
ゼロ戦才人 第1部

山口多聞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロ戦才人 第1部

【Zコード】

N7385D

【作者名】

山口多聞

【あらすじ】

才人は曾祖父である才吉からある物を見せられる。それは旧日本海軍の戦闘機零戦であった。彼はその零戦ごとハルケギニアに召喚されてしまう。さらにオリキヤラ多数も登場。タルブ村での戦闘までを書く、ゼロの使い魔のファンフィクション第2弾。

甦った翼（前書き）

この作品では原作とは少し・・・と言うかかなり違つた設定を取つています。それに加えて時折漫画版やアニメ版の設定が入つたりします。また、読んでない人にはネタバレになる点もあります。そして、才人のミリタリーマニア度が高いです。それからかなり御都合主義です。

以上の事を御理解のうえお読みください。

甦った翼

その日、日本の東京に住むごく普通の17歳の男子高校生、平賀才人は埼玉県の田園地帯の中にある小さなセスナ機用飛行場に来ていた。

なんで彼がこんな所にいるかというと、彼の曾祖父である平賀才吉から是非とも今日来て欲しいと言われたからだ。

今年85歳になる才吉は、ことのほか曾孫の才人を可愛がっていた。幼い頃から自分の軍隊での話を聞かせてくれたりもした。おかげで才人はそれなりにミリタリーに関する知識がある。というか少しばかりオタクだ。そして、才人自身もそれなりに才吉を慕つていた。

この日は近所のパソコン専門店で午前中に修理が終わったノートパソコンを受け取る以外に予定はなかつたので、才人は出かけるついでに才吉の所へ行く事にした。

一旦パソコン店へと出向いて修理中のパソコンを受け取つた才人は、その足で電車に乗つて埼玉へと向かつた。途中で数回の乗り換えを行い、だいたい1時間ほどの時間をかけた。こうしなければいけないのは、彼自身未だ自動車免許もバイクの免許も持つていなければだ。

「おお才人、待つっていたぞ。」

最寄の駅から20分程歩いて飛行場に到着した才人を、才吉は大げさに出迎えた。

「曾爺ちゃん、久しぶり。相変わらず元気だね。」

才人の言うとおり、才吉は実際70代でも通りそうな程若々しい老人だった。またかなり行動派である。

「ああ、まだまだ若い者には負けんよ。と言いたいところだが、最近は体の至る所にガタが来ているよ。だが、後10年は死ぬ気はないぞ！」

そう言つて笑う才吉の笑顔を才人は好きだった。

「で、今日はこんな所に何で呼んだの？」

「おお、そ�だつた。お前に見せる物と頼む事があつたんだ。」

「一体何？」

見せる物と頼む事とは一体なんであろうか？

「取り敢えずこっちに来なさい。」

才吉に案内されて才人がやつて来たのは格納庫だった。その中に入つた才吉が電気をつける。そしてその灯りの中に照らされた物体を見て才人は息を飲んだ。

「こ、こいつは。」

彼の目の前にあつたのは1機の飛行機だった。ただしプロペラ機だが、見慣れたセスナ機ではない。黒く塗られたカウリング。一人

乗りの風防。エンジン部を除く機体全体が灰白色に塗られた機体。そして胴体と翼に目立つように描かれた太陽の紋章。ミリタリーに明るい彼はその正体に直ぐに気付いた。

「ゼロ戦じゃないか！！」

「そうだ。ゼロ戦だ。正式には零式艦上戦闘機21型だよ。かつて多くの連合国パイロットを恐怖に陥れたゼロファイターその物だ。」

才人もゼロ戦は今までさんざん本や映画で見てきた。しかし、目の前にあるのは実物大のゼロ戦である。

「これって本物？」

もしかしたら映画用か何かのダミーかと思つて聞いた。しかし、才吉は笑つてこたえた。

「もちろん、本物だ。ワシが戦後60年かけてこいつためた小金でよやく作り上げたものだ・・・と言いたい所じやが、実際はそれだけじゃなく、ワシが海軍から復員したときに基地からくすねた金の延べ棒を現金に換金した金で作つたものだ。」

そういうと、才吉はガハハと大笑いした。才人はそれは窃盗ではと突つ込みを入れたくなつたが、それよりも好奇心が先行した。それにどこまで本気で言つているのかもわからなかつた。

「すげえ。けど畠中ちゃん。なんでこれを作つたの？」

「つむ。よくぞ聞いた。お前はワシが旧海軍の士官パイロットして太平洋戦争を戦つたのは知つているな？」

「うん。」

その話なら子供のころから何度も聞いていた。そして才吉は現在も時折飛行機を操縦したりしている。年を追うことにその回数は減り、単調な飛行しか出来なくなっていた。それでも、彼がパイロットであるということは才人に深く印象付けられていた。

「ワシは太平洋戦争末期、神奈川県にある厚木基地の302空で同期の佐々木武雄海軍少尉とともに小隊を組んで戦つておった。しかし忘れもしない8月15日。早朝の空戦から帰還途中に、ワシらは突然発生した日蝕の中へと突っ込んでしまった。そしてその先には広大な草原が広がっていた。ワシは怖くなつてもう1回日蝕に入つてこちらに戻つた。しかし、ワシの後ろを飛んでいた佐々木はついに帰つてこなかつた・・・」

と、そこで才人は才吉が涙を流しているのに気付いた。

「曾爺ちゃん。」

「確かに零戦は武器かもしけんが。ワシにとつては共に戦つた戦友との思い出、青春だつた。だからこうして零戦を複製する事にしたんだ。戦後60年経つてようやくその夢が叶つたわい。」

才人はその言葉に、田の前にあるゼロ戦をもう一度見つめ直す。

(さうか、これは曾爺ちゃんの青春その物なんだ。)

しかし、疑問も浮かんできた。

「けど曾爺ちゃん。これって太平洋戦争初期の塗装だよね？なんで曾爺ちゃんがその友達と戦っていた時の色じゃないの？」

実はゼロ戦は登場時からミッドウーホー海戦のころまでの2年間は機体の塗装が灰白色だった。しかし、それ以降は終戦まで迷彩の意味から塗装は濃緑色になっている。

ところが、田の前のゼロ戦は前期の塗装だった。

「それはだ。これが21型だからだ。実は発注したメーカーにはただゼロ戦を忠実に復元して欲しいと注文したもんでな。向こうが勝手に塗装と型を決めてしまったんじゃ。」

（なるほど。だから）丁寧に尾翼にはA1-148・つまり戦争初期に活躍した空母「赤城」航空隊のマークが入っているのか。）

ちなみにAは第一航空戦隊、1はその一番艦を意味する。

「なるほど。で、もう一つ。俺に頼みたい事つて何？」

「おおそりだつた。実はこれを着て欲しいんだ。」

そう言って才吉が差し出したのは、旧海軍の飛行服だった。肩には日本海軍の軍旗である旭日旗が縫い付けられ、名前を書くところには、平賀才吉少尉と書かれている。

「え、これを？」

「やうだ。」

なんでもそんな事をするのか気になつたが、取り敢えず着る事にした。脱ぐのも面倒なので、今着ている服の上に着る。ついでに、ちゃんと救命胴衣とベルト、さらには帽子とゴーグルもつける。

「うーん、よく似合つているわ。」

飛行服は才人にピッタリだった。

「それで、これを着てどうしろと?」

「そのまま「シックピット」に乗つてくれ。荷物は「シックピット」の後ろにでも置いておけ。」

言われるまま、才人の日修理が終わつたパソコンを入れた鞄を「シックピット」の後ろに置いて、彼もそのまま「シックピット」に入った。

「これで良い、曾爺ちやん?」

「ああ、ありがとう・・・懐かしい、63年の前のことが甦つたようだ。」

そう言つて才吉は泣き始めた。ビューラオ人に過去の光景を復元して欲しかつたようだ。

「そうこうとか・・・それにしても。」

操縦桿を握つてみる。才吉から何度も聞いてきた自分自身で空を飛んでいく光景が瞼に浮かんでくる。

(曾爺ちやんがこいつに惚れこんだのもわかるかも。俺もこいつを

操縦してみたい。）

武器でありながら、流麗な機体の美しさはラインは彼の心を掴むのに十分だった。才人は操縦桿をつかんで、目をつぶって自分が空を飛んでいる姿を思い浮かべる。

そうやって彼が零戦に酔いしれている時、突然目の前が真っ白になつた。

「うわーー！」

「何！？」

ゼロ戦を包む形で、大きな鏡のような光の塊が出現した。そして、次の瞬間にはゼロ戦も、そして乗っていた才人もその場から焼き消えていた。

「ば、バカなーー！ 一体どう言ひことだーー？」

才吉はただ茫然と、ゼロ戦とひ孫が消えて空っぽになつた格納庫を見ていた。

甦った翼（後書き）

御意見などを待ちしております。

ファーストコンタクト

その日ハルケギニアにある小王国、トリステイン王国にあるトリステイン魔法学院の庭では、2年生の生徒が進級に関わる重要な儀式を行っていた。

『サモン・サーヴァント』と呼ばれる自分のパートナーとなる使い魔を呼び出す儀式だ。主に呼び出されるのはカエルやフクロウ、モグラに竜、火トカゲのサラマンダー等だ。

この世界では魔法が存在し、その魔法は主に火、水、風、土といった4系統に属性がわかれ。この属性に合わせるように使い魔が決まることが多い。もちろんそれだけではなく、魔法を使う『メイジ』のレベルも大きく影響する。

この儀式で『使い魔』を呼び出せなければそれは退学を意味する。また呼び出した使い魔が珍しいものであれば、自身の名声を上げるのに一役買うこととなる。

教官であるコルベールの前で生徒たちは次々と使い魔を召喚し、そして主と使い魔の契約を結ぶ『コントラクト・サーヴァント』を行つていった。

そしてついに最後の1人となつた。コルベールは彼女の名前を呼ぶ。

「さて、残るは君だけだなミス・ヴァリエール」

「はい、ミスター・コルベール。」

「コルベールは最後に行つ女生徒を見つめた。整った顔立ち、ピンク色でロングの美しい髪が目立つその少女の名はルイズ。本名はもつと長いのだが今回は割愛する。

彼女が『サモン・サーヴァント』を行うために一步前へ出ると、周りの同級生たちはひそひそと話し始めた。

「ゼロのルイズがやるぜ。」

「また爆発でも起こされたらまらないわよ。」

『ゼロ』のルイズ。それが彼女に付けられた二つの名だ。この言葉を口に出されただけで彼女の表情は相当険しくなる。

そのあだ名の由来は、彼女が魔法使いである貴族の生まれながら、魔法を満足に扱えない事に起因していた。このことを彼女は大きなコンプレックスにしていた。

このハルケギニアの地を支配しているのは、魔法が使える『メイジ』である。しかもその中で国に対してなんらかの功績を残し貴族と認められたものだけだ。だからこの地の価値観は魔法を中心に回っていると言つて良い。つまり、魔法が使えないことは一人前の貴族として認められないことを意味する。

ルイズはその貴族の中でも最上位の位に位置し、王族とも血縁関係にあるヴァリエール公爵家の出身だ。その彼女が魔法を使えないことは当然ながら家名に恥を塗る事態である。当然ながら、周囲から貴族の一員として教えられてきた本人にとつてもとつもない屈辱である。

もちろん彼女も日々努力しているのだが、それが報われた試しは今のところない。幾ら彼女が努力しても、魔法が正常に発動したことはない。

そう言ひわけで、彼女にとつて今日の儀式はある意味雪辱戦であった。

（見てらっしゃい、必ずすゞい使い魔を呼び寄せて、首をギャフンと言わせてやるんだから。）

彼女はそう心に誓っていた。今日こそは自分が『ゼロ』ではないことを証明し、今までの汚名を返上してやると。

彼女は杖を出して、他の生徒たちと同じように呪文を唱えた。

すると、突然彼女の田の前が真っ白になり、ついで爆発音がするに辺りは煙で覆われた。

「うわー！」

「きやあー！」

「やつぱり失敗しやがったー！」

生徒たちは突然のことに慌てふためきながら逃げ回った。教師のゴルベルも、これには面食らってしまった。いくらなんでもこんな時ここまで爆発を起こすとは予想できなかつたのだ。

しかし、煙が晴れると彼らはより一層驚く事となつた。先ほど爆

発が起きたその場所に今までなかつた物体が存在していた。

コルベールもルイズも一応召喚には成功したようだと考えたが、その物体の全体像がわかると呆然としてしまった。なぜなら、そこにはあつたのは生き物どころか今まで見たこともない物体だったからだ。

「何よこれ！？」

ルイズの第一声がこれである。

最初は大きさから竜かと思った。しかし目の前にある物体は頭の部分に風車の羽をさらに細くしたような板をもち、そして羽のような物は、龍のようにばたつかせておらず固定されている。それどころか、生物の特徴たる目も口も見当たらない。おまけに尻尾の部分には見たこともないない文字が描かれ、その全体の色も竜にしては見かけない少しくすんだ白色だった。

ルイズに加えて周りで見ていた生徒たちやコルベールも啞然とする中。

「一体なんなんだ！？」

若い男の声が響いた。

才人は突然の事に戸惑つた。彼はいきなり周りが真っ白になつたかと思い目を瞑つた。そして再び目を開けると、そこには先ほどま

でいた格納庫の中とは似ても全く違う景色が広がっていた。

頭上には先ほどまであったはずの屋根がなく透き通ったような青空が広がり、近くには城壁のような壁や高い塔が見える。しかも、明らかに日本のものではない。

「……は一体？」

ありえない状況に彼は戸惑う。そんな彼に突如声が掛けられた。

「あんた誰？」

才人は直ぐに声のした方に顔を向けた。先ほどまでゼロ戦の側にいたのは才吉一人のみのはずだった。しかし、そこに立っていたのは明らかに日本人ではない少女であった。また少し離れた所に男性が一人立っているが、先ほどまで会話していた才吉ではない。またさらに距離を離して複数の人間が自分の方を見つめていた。

(なんだこいつら?)

彼の第一感想である。

「ちょっと答へなさいよー?」

先ほどの少女が苛立たしげに誰何する。多少気分を害したもの、今の状況を把握するには彼女らと話すしかない。取り敢えず才人は零戦から降りる事にした。コックピットから身を乗り出して地面に降りて、少女の前に立つた。

ルイズは目の前に立った人間の恰好に驚いた。みたこともない茶色の服を着て、さらに頭の上にもこれまた見たこともない帽子と眼鏡のような物をつけていた。平民のようではあるが、今まで見ていた平民とは似ても似つかない格好である。

「あ、あんた誰よ？」

「俺か？俺は平賀才人。」

名前を聞いて、ルイズはおかしな名前と思いながら多分こいつは平民と思った。そして恐らく後ろの見慣れない物体は竜であるとも思った。

「どこの平民？その竜になんで乗っていたの？」

「はあ？平民？竜？なんのことだよ。俺は高校2年生の17歳だぞ。それにこいつはゼロ戦っていう飛行機だぞ！」

突然言われた聞きなれない単語の連発に、ルイズの頭は混乱する。

「高校生？飛行機？」

まったくわけがわからない。そこで、質問をえてみた。

「あんた魔法は使えるの？」

すると、才人はバカにしたような表情でルイズを見た。

「はあ？お前バカか？そんなものあるわけないし、使えるわけねえじゃん。」

取り敢えず田の前の男が平民であるとは確信した。

「使えないのなら、やっぱり平民じゃない。しかも魔法を知らないなんてどこの田舎の出身よ？」

「だから平民ってなんだよ？それに東京は田舎じやないぞ。」

全く話が噛み合わない。そこへ、ようやく立ち直ったコルベールが近づいた。

「ミス・ヴァリエール、喧嘩は後にして取り敢えず儀式を進めたまえ。」

「けど先生。契約するにしても、私はどうひと契約を結べばいいんですか？」

「」の質問にコルベールも困った。確かに今回ルイズが召喚した物は田の前の少年と、得体の知れない物体である。

しかし、物体の方はどうやら動物ではないようだ。彼は確認のため『ディテクト・マジック』をやってみる。すると、生物としての反応が出るのは田の前の少年だけだ。

考えた末、彼は結論を述べた。

「取り敢えず契約を結ぶべきはその少年のようだ。人間の使い魔といふのは前例はないが、一度やつたら後戻りは出来ない。ミス・ヴ

アリエール、その少年と使い魔の契約を結びたまえ。」

結局、この言葉によりルイズはしぶしぶ才人と契約を結ぶ事となつた。この後、彼女は驚く才人にキスをした。そして才人には使い魔としてのルーンが刻まれた。

これが後に、ハルケギニアにその名を轟かす2人のファースト・コンタクトであつた。

ファーストコンタクト（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

「はあ？ 異世界から来た？ あんた頭大丈夫？」

ルイズがベットに腰掛けながら、目の前の床に座っている才人へ向けて言つた。その表情は目の前の人間を狂人か何かで見るものであつた。

「大丈夫だよ。」

信じてもらえるか不安だったとはいえ頭ごなしに否定されたので、その声は不安の色が混じつっていた。

あの後訳もわからぬままキスされ、激痛とともにローンを刻み付けられた才人。その後訳がわからないままここに連れてこられた。今彼とルイズは今女子寮にあるルイズの部屋にいた。

日が沈み、月が出てようやく才人は自分が地球ではないどこかにいるのがわかつた。何故なら空に登った月が2つあつたからだ。

それから才人はとにかく今自分が置かれている状況を知ろうとルイズに質問しまくつた。その結果、ここがハルケギニアという地にあるトリステインという国であること。そして、魔法を使える者がメイジと呼ばれていて、その中の貴族が支配をしていること。最後に、自分が目の前の桃色髪の少女の使い魔にされたことを教えられた。

それらを知った才人はすぐに自分が異世界人であることを説明したが、ルイズは馬鹿にするだけで本気にしない。まあ才人としても

それはわからぬもなかつた。ある日同じ人間から、「私は異世界人だ。」と聞かされて信じるとしたらよっぽどのお人好しである。

「そんなに言うんなら、何か証拠を見せなさいよ。」

その言葉に、急いで才人は服のポケットを弄つた。ちなみに、今は飛行服を脱いでいるのでその下に着ていた普段着ている青のパークーにジーパンという格好である。

彼がポケットから証拠として取り出したのは携帯だつた。

「何それ？見慣れない箱ね。」

「これは携帯。離れている所の人と話すための機械だよ。もつとも、他に最低でももう1個携帯がなきや話せないけどね。」

「それじゃあ証拠にならないじゃない。」

そこで、才人はあることを思いついた。携帯を開いて少し操作をすると、携帯をルイズの方に向けてボタンを押した。

カシャ！

その音にルイズがびくついた。

「な、何よ今の音…？」

「シャッターの音だよ。ほら。」

才人はルイズに携帯の画面を見せた。もちろんそこにはルイズの

顔が映つていいわけだが、ルイズはそれを見て仰天した。

「な、何これ？私じゃない？一体どんな魔法なの？」

その言葉に、才人は溜息を吐いた。

(こいつは何でも魔法にしたいのか)

と。

「魔法じゃない、科学。」

「科学？何それ？」

才人はこの言葉に駄目だと思った。この世界の人間は科学に対しての素養が全くないようだ。

(仕方がない、明日ゼロ戦のエンジンを動かして見せるしかないか。

結局そういう結論に至った。しかし、現実はそう上手くは行かなかつた。

翌朝から才人に待つていたのは、ほぼ下僕に近い生活だった。ご主人であるルイズを起こし、服を用意し着せ、さらに洗濯もさせられた。もちろん、現代日本の高校生である才人は文句を言ったわけだが、そうすると凄まじい報復処置を受けねばならなかつたので、従わざるを得なかつた。

また、朝食も固いパンに少量のスープという囚人食よりも低ラン

クの物であった。そして、朝食を終えるとすぐにゼロ戦を見せたかったのだが、ルイズは。

「授業があるから。」

と一言で拒否してしまい、才人に残った仕事を言いつけるとさっさと教室に行ってしまった。

「あんの野郎！..」

と一人怒るが、それで収まる筈がなかつた。しかも、やはり朝食の量が足りなかつたらしく、彼は空腹だつた。

「うひ、まずは腹を満たす方が先決だ。」

そこで彼は思い出した。

（そういえば、ゼロ戦に置いて来た鞄の中に昨日昼飯に買つて余つたアンパンとメロンパンが！）

彼はゼロ戦のある場所に走つた。

ゼロ戦は昨日才人が来た時のままの状態で置かれていた。誰かが何かしていいか心配したが、どうやら興味を持たれなかつたらしい。

「良かつた。」

急いで翼からよじ登り、風防を開ける。中も特に荒らされた形跡はなかつた。鞄はちゃんと残つていた。もちろん、中身も無事であ

る。

急いでパンを出す。

(よし、賞味期限も大丈夫だ。)

彼は安堵すると共に、地面に降りた。すると、後ろから声を掛けられた。

「あのー?」

女の子の声である。今は確か授業中の筈だ。そう思いながら振り返ると、絵に描いたようなメイド服姿の少女が立っていた。才人は口をポカンと開けて固まる。

「あの、どうかしました?」

もう一度声を掛けられ、才人は正気に戻った。

「あーー」めん。メイドさんなんか見たことないもんで驚いちゃって。

」

「せうだつたんですか。私はシエスタ、見ての通りこの学院に奉仕しているメイドです。」

歳は才人と同じくらいであろう。黒く美しい髪をショートカットにして、それなりに可愛い顔立ちをしている。顔にいくらかあるソバカスも可愛いといえば可愛い。

「俺は平賀才人。よろしく。」

「ヒラガサイト？変わった名前ですね？」

「このセリフを既に何度も言われた才人はもう驚かなくなっていた。

「で、俺なんか用？」

「あ、これによじ登つているのを見て、何をやつてこらんだらうと思つて。」

「そり。これはゼロ戦っていう飛行機さ。」

「ゼロ戦？飛行機？」

（やつぱりわからないよな。）

そこで才人はようく噛み碎いた説明をする。

「ようするに、ここつは空を飛ぶ機械なんだ。」

そういつと、ショスタはキョトンとしたが、すぐに笑い出した。

「アハハハ・・・『冗談が上手いんですね。船や龍じゃありませんし、こんな物が飛ぶはずなんてありませんよ。』

この言葉に、才人は少し気分を悪くした。飛行機を知らないとはいえ、このまで正面から言い切られるとやはり気持ちのいいものではない。

そこで、才人は考えた。ここつを飛ばせば信じもらひえるかもど。

目の前の女の子に格好良いといひを見せられると、つづ下心もなくはなかつたが。

「だつたら飛ばしてあげるよ。」

「えー、本当ですか？」

別に才人は虚勢を張つた訳ではなかつた。彼は才吉からゼロ戦の操作方法を聞いた覚えがあつたし、それにその才吉とともにセスナ機に乗つて、簡単な操縦訓練の様な物を受けた事があつたからだ。

（それにどうせ落ちてもここは異世界だし、俺が死んでも困る人間なんかいないさ。）

さつそく才人は飛行準備に入った。

部屋から飛行服を持つてきて着替える。燃料タンクを確認したところ、幸い機体の燃料は満タンである。だから、エンジンが故障さえしてなかつたら飛べるはずだ。

コックピットに入ると、彼はベルトを締めた。そして操縦桿を握つた途端、彼は不思議な気持ちになつた。

（なんだ・・・まるでこいつを何回も操縦したみたいだ。計器やレバーのことが何もかもわかる。曾爺ちゃんから何度も昔の話を聞いた所為かな？）

彼はそう考えたが、今は確認することなど出来なかつた。彼は気付かなかつたが、左手のルーンが光つていた。

とにかく才人は飛行するための準備を進める。操縦桿、ラダーの動作を確認する。いずれも正常だ。

「シェスター！危ないから機体から離れて！！」

才人は機体に近づいて物珍しげに見ていたシェスターに注意する。すでに車輪止めは解除してある。もしかしたらエンジンを始動した途端に動いてしまうかもしれないからだ。

「よし、あとはエンジンを始動させるだけだ。」

オリジナルの零戦は、エンジンをかけるためのクラランクを手動で回す必要があった。しかし、こいつにはセルモーターが付いているからその必要もない。

才人はエンジンの始動ボタンに手をかけた。

「コントラック！！」

異世界の証拠（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

初飛行とハルケギニア

ルイズは不機嫌だつた。生徒たちを見返すつもりで挑んだ使い魔召喚は、1人の平民と得体の知れない物体（ゼロ戦のこと）を呼び出すという前代未聞の結果となつたからだ。さらにその使い魔は異世界から来たなどと訳のわからないことを話し、主人の命令に反抗的であるのだから、プライドの高い彼女が苛立たない筈がない。

さらに彼女の怒りに火を注ぐかのように、朝から同級生が会うたびにそのことを話題にしてバカにしてくるのだ。キュルケ、モンモランシー、マリコルヌ、それこそ名前を上げたらきりがない。

そういうわけであるから、普通は教室に使い魔を引き連れてくる所を、彼女は恥ずかしさから才人を教室に連れてこなかつた。もつとも、彼を連れていなくても悪口を言われる状況に変わりはなかつたが。

そんな憂鬱な状態であつたが、時間は進んでいく。始業の時間となり『赤土』の2つ名を持つ中年女教師のシユブルーズが入つてきた。

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のよう・・・

そこまで彼女が言つたところで、ルイズは彼女と目が合つた。

「あら、ミス・ヴァリエールは使い魔の姿が見えませんね、竜でも召喚したんですか？」

教室内の生徒はほとんど使い魔を連れている。なのにルイズだけ

は連れていない。つまり教室に入らない動物をルイズが召喚したと
彼女は考えたらしい。

しかしながらルイズはそれに答えられず、周りの生徒はクスクス
と笑うだけであった。

「先生。こいつは、平民を召喚したんですよ。それで恥ずかしくて
連れてきていませんですよ。まあ、本当は召喚したんじゃなくて、
そこらの平民をただ連れてきただけでしちゃうけど。」

そう横槍を入れたのは、小太りの少年マリコルヌだった。その言
葉に反応するように何人かが笑った。もちろん、それに黙つている
ルイズではない。

「何ですって！？」

2人が授業中であるにも関わらず喧嘩を始めようとしたので、当
然シユブルーズが声を荒げて止める。

「おやめなさいミス・ヴァリエールにミスター・マリコルヌーーはし
たないですよ。それでは、授業をはじ・・・」

シユブルーズはそこまでしか言えなかつた。何故ならそれを遮る
ように、窓の外から聞いたこともない音が響いてきたからだ。

ババババ・・・

この世界の人間は一度も聞いた事のないような音である。しかも
絶えることなく聞こえてくる。

「何かしら?」

ショブルーズが確認のために窓に駆け寄った。ルイズをはじめとする生徒たちも次々と窓に駆け寄った。同様の光景が1年生から最上級学年までの教室で見られた。

「かかった!…」

ゼロ戦のエンジンは一発で掛かつてくれた。エンジンの出力計とプロペラの回転計が右に回る。才人はプロペラピッチ、燃料混合比を発進のための適切な位置に併せる。

「よつし、エンジン温度、回転数異常なし。」

あとは前方に障害物さえなければ離陸できる。シエスタはすでに安全な場所まで下がっている。今中庭には誰もいない。しかし、彼はあることに気付いた。

「平坦な土地だけど、滑走距離が足りるかな?」

ゼロ戦は城壁ギリギリの位置に置かれていて、反対側の城壁までの距離はそれなりにあるようだが無事離陸出来るか心配になってしまった。1歩間違えればそのまま城壁に激突である。

(そういえば、曾爺ちゃんがエンジン出力をギリギリまで高めてブレーキをいれて、一気に離せば短距離で離陸できるとか言っていたな。)

これは一種の賭けである。なぜなら勢いで機体が前につんのめる可能性があるからだ。

(ハヤシがハサツトウを手に持つ。)

才人はブレーキをかけたままエンジンの出力を最高に上げた。プロペラの回転数が上がり、当然ながら機体が前へ動き出す力も強くなる。

(もつてくれ！！)

エンジンの出力とプロペラの回転数は最大となつた。幸いその間に機体が逆立ちする事はなかつた。

「...」

才人は一気にブレークを解放した。すると機体は勢いよく前に進みだした。

「上がれ、上がってくれー！」

操縦桿を力一杯引く。機体はどんどん增速していく。しかし、燃料満タンの所謂過重負荷である重い機体は中々浮き上がらない。

「駄目か・・・上がれ！！」

彼は折れんばかりに操縦桿に力を込めた。すると、祈りが通じたのか機体がフワリと浮き上がった。そして、車輪が城壁を掠めるよう通過した。

「やつた！！」

ゼロ戦はさりげなく上昇し、スピードを上げていく。そのまま才人は脚を引き込むと垂直上昇に移った。

ルイズはその光景をハラハラしながら見守っていた。

「あいつ本当に飛ぶ気なの？」

才人からあの物体が空を飛ぶための物と聞いてはいたが、彼女もシエスタと同じく全く信じてはいなかつた。飛行機という物に対する概念がない世界の人間であるから仕方ないといえれば仕方ない。

とにかくルイズは信じきつていた。あんな奇妙奇天烈な金属の塊が飛ぶはずがないと。しかし、現実には確かにあの物体は危うく城壁にぶつかりそうにこそなつたものの、ちゃんと飛んでいる。しかも、凄まじいスピードで。

窓に駆け寄つた誰もが、呆気にとられてしまつた。

「あれって、ルイズが平民と一緒に召喚したやつだよな。」

「空を飛んでいるつてことは、じゃああれば竜だったのか？」

「やつするといつは平民じゃなくて竜使いなのか？」

生徒たちが次々と憶測し話し始めた。もはや授業どころではなくなってしまった。

「皆さん、落ち着きなさい。とにかく席に戻りなさい……」

シユブルーズがなんとか生徒を諫めようとするが、もはや誰もその言葉を聞いていない。そんな中。

「あ。」

そう言つたのは、『雪風』の2つ名を持ち、蒼髪が特徴で普段から無口で本ばかり読んでいる眼鏡の少女タバサだ。彼女はその蒼い瞳を空に向けている。

「どうしたのタバサ？」

『微熱』の2つ名を持ち、スタイル抜群であり、普段ルイズとは不似戴天の敵であるキュルケが彼女に聞いた。彼女とタバサは比較的仲が良い。

「こっちに来る。」

「え……」

ルイズとキュルケの声が重なった。

「これであの娘も信じてくれたよな・・・ようし、サービスだ。」

燃料に限りがあるから、彼は10分そこそこで着陸する気だった。しかし、最後にシエスタに対するサービスのつもりで超低空飛行をすることにした。

高度15mで中庭の上を通過する。かなり危険なことであるが、何故か才人には恐怖心のような物は湧き上がらなかつた。

その最中、才人は何気なく顔を横に向けた。すると、塔の中にある教室の窓から顔を出していたルイズと目が合つた。

「あいつも見てたのか。」

一言そつ呟くと、彼は脚を出して着陸態勢に入った。

ルイズも才人と目を合わしたことに気づいていた。あれに乗つていたのは間違いなく才人だつた。つまり彼の言つていた事は事実だつたのだと言つことを、彼女は認めざるを得なかつた。

「嘘でしょ。」

現実を見せられても、まだルイズは信じられない思いで一杯だつた。これは夢か何かとさえ思つた。しかし、これは現実であるとう事を彼女に強く知らしめる事態がまもなく発生した。

「ミス・シュブルーズ、あれは一体？」

隣の教室の教官が飛び込んできた。

「それは私にもわかりません……ちょっと、ミス・ヴァリエール。あれはあなたが召喚した物のようですね、ジーニーとか一緒に来て説明してください。」

「え！？いや……その……ああの犬……！」

こうして彼女は事情聴取のため、校長室へと連れて行かれることとなつた。もちろん、この後城壁の外側に着陸したゼロ戦から降りたサイトも直ぐに教官たちの手で同様に校長室へ連行された。

初飛行におけるハルケギニア（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

ガンダールヴ

才人のゼロ戦が着陸した10分後トリステイン魔法学院校長室
「申し訳ありませんでした。私の使い魔が大変な御迷惑をお掛けしてしまって。ほら、あんたもちゃんと謝りなさい！！」

「ええと、『めんなさい。』

ルイズが才人とともに校長をはじめとする教師たちに謝罪をしていた。もちろんその理由は零戦での飛行による授業妨害に対するものだ。

今ここにいるのは、今回の騒動で授業を潰されてしまった教官3人に校長秘書のミス・ロングビル。そして、ルイズと才人に向かい合う形で椅子に座る老獴な校長オーラド・オスマンであった。

「ミス・ヴァリエール、謝れば済む問題ではありません！」

「今回の騒動で全学年の授業が潰れたんだぞーー！」

「使い魔の過ちは主人の過ちでもあるんだぞ。君はその責任を心得ていたのかねーー！」

シユブルーズを含む教官たちは、必死に謝るルイズと才人に容赦なく怒りの言葉を浴びせる。そんな中でオスマン校長だけはまるで眠つたように動じない。そして、教官たちの罵声が一時的に止んだ所でようやく彼は口を開けた。

「 もうその辺りでよからう。」

その言葉に、全員の視線が彼に注がれた。

「 1回1回このよつなことでたびに田ぐじらを立てていては、切りがないぞ。今日は大目にみてやろうではないかのう。」

オスマンの意外な言葉にルイズはキヨトンとし、才人は許してくれた事に安堵する。一方、教官たちは一斉に異を唱えた。

「 校長、今回の騒動はただの失敗ではありませんぞー・全学年の授業が妨害されるという前代未聞の事態なんですぞ!」

「 そのよつな」とは断じて認められません!」

「 せつですー・ミス・ショブルーズの言つとおりですー。」

だが、オスマンは全く動じなかつた。

「 もちろん、ミス・ヴァリエールとその使い魔に対してはなんらかの処分が必要かもしけんが、それについては私に一任してもらいたい。君たちは次の授業の準備に入りたまえ。」

結局、校長の意見にこれ以上逆らう人間などおらず、教師たちは不満気な表情のまま部屋の外へ出て行つた。

「 さて、君たちに対する処分じゃが、今回の騒動は故意に起こしたものでもあるまい。そのこの使い魔の少年はまだ魔法学院に慣れておらんようだし。ワシとしては罰を与えるほどの物ではないと思ってる。しかし授業が潰れたというのも事実である。よってワシは校

長としてなんらかの形で君たちに処分を『えなければならぬ』

「はい、貴族の義務として甘んじて受けます。」

ルイズが堂々と言ひ。

「いい覚悟じゃ。ではミス・ヴァリエールは始末書を3日以内にワシに提出しなさい。それと使い魔君はある鉄の鳥、いや竜かな・・・とにかくあれを虚無の曜日以外に飛ばす際は今後ワシの許可を必要とする」とあることある。以上だ。」

すると、秘書のロングビルが反応した。

「校長、少し軽すぎませんか？」

その言葉に、罰を受けたルイズ自身頷いてしまった。あまりにも軽すぎではないのか。しかも、始末書を学年担当の教師ではなく校長に直接提出するなどおかしな話である。

「ミス・ロングビル。今回の処分はワシに一任されたはずじゃ。違うかな?」

「えー? はい。」

すると、ロングビルも黙り込んでしまった。

「わかったのならミス・ヴァリエールとその使い魔は出て行つてよろしい。」

了りして2人は校長室から退室した。その帰り、コルベールが校

長室に血相を変えて入つていいくのが見えた。

「まつたく、あんたのおかげで私が始末書を書く羽目になつたじゃないのよ……」

廊下を歩きながら、ルイズは自分の使い魔に対する怒りを爆発させた。

「『』、ごめん。まさかこんな騒動になるとは思わなくて。」

さすがに今回は自分のしでかしたことで起きた現実と、校長室で多数の人間に罵声を浴びせられただけあって、才人も責任を感じていた。女の子の一言に苛立つた拳句、授業を潰してしまったのだから仕方がない。

「ふん！そんなんじや許さないわよ。罰として昼食は抜きよ！それと今後しばらく、授業時間中は私から離れないように。いいわね？」

昼食を抜きにされても、別に才人はどうとも思わなかつた。先ほど食べ損なつたパンを食べるだけだ。だから素直に命令に従つ事にした。

「わかつたよ。けど、あれで信じただろ、俺が別世界の人間だつて。

「

すると、ルイズは苦虫を潰したような表情をした。認めたくはないが、現実は変えられないからだ。

「それについては、認めたくないけど認めてあげるわよ。た、急ぎなさい。次の授業が始まっちゃつわ。」

「はいはい。」

その頃、彼らが出てきた校長室では。

「『ガンドールフ』だと。あの使い魔の少年がかね？」

オスマン校長が興奮しているコルベールからの報告を興味深そうに聞いていた。ちなみに、話の内容の重大性から秘書のロングビルは退室させている。

「そうです。間違ひありません。あの左手のルーンは間違いなく『ガンドールフ』の物です。」

「むう・・・見慣れない格好をして謎の鉄の竜とともに現れ、しかも『ガンドールフ』だと・・・おもしろい。しかし、それと同時にこれは厄介だな。」

その一言に、コルベールは不思議そつな顔をする。

「何故ですか？」

「『ガンドールフ』といえばあらゆる武器を使いこなした始祖ブリミルの使い魔。その力は並のメイジでは歯が立たず、しかも数万の

軍勢を抑える力もあつたというではないか。その存在が現代に甦つたとなれば、おそらく王室は黙つておるまい。もしかしたら戦争好きの連中に、戦争を始める材料を与えてしまつかもしれん。しかも、あの鉄の竜は先ほど見ておつたが、火竜の数倍の速さで飛び回り、風竜以上に敏捷に動き回つておつた。もしあれが武器であるなら、より危険だ。」

「なるほど。校長の深い考察には感服いたします。」

先ほどの興奮から一転して冷静かつ真剣な表情でコルベールが頷いた。

「とにかくだ。あの少年と鉄の竜については注意せねばな。このことは他言無用じゃ。特に王室関係者の耳に入らないよう厳重に注意するんだ。さつきも言つたが、戦争好きな連中が知つたら何をするかわかつたものじゃない。」

「わかりました校長。ところで、あの鉄の竜ですがどうします？私はとしては大変興味があるのですが？見たところ魔法を使つてている様子はありませんでしたし、あの操つていた少年も調べた限りでは平民でした。」

コルベールは魔法使いには珍しく、科学研究や歴史研究が好きであつた。彼はゼロ戦がそうした研究の対象になる物であることを、直感的に見抜いたようだ。

「ふむ・・・確かに、あれが何かについては知る必要があるな・・・ミスター・コルベール。ならあの少年から上手く聞き出してくれたまえ。」

「わかりました。」

こうして、才人の預かり知らぬ所で、大きな何かが動き始めていた。

ガンダールヴ（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

決闘

校長室から解放され、2時間目の授業を終わらせた才人（厳密にはルイズ）たちに新たなる問題が起きたのは昼食の時であった。朝の騒ぎでルイズによつて昼飯を抜かれた才人だつたが、シエスタが朝のお礼と謝罪の意味も含めて厨房に彼を通した。そして彼はそこで昼食にありつけることとなつた。

ちなみに、これによつて不要に成つたアンパンとメロンパンはシエスタに譲られたが、彼女はアンパンの餡をいたく気に入りこの後厨房で作るようになるのだが、それは別の話である。

さて、事件が起きたのは昼食が終わりかけた時であつた。ギーシュというルイズの同級生の1人が落とした多数のラブレターを、才人が拾つたのが事の発端であつた。

これによつてギーシュが何人の女性と付き合つていたのがばれて、彼が大恥をかいてしまつたのである。才人が対峙したのがただの平民であるなら良かつたが、相手がメイジであるのがまずかつた。メイジでしかも貴族が平民に恥をかかされて黙つているわけがない！

「平民の分際でよくも僕に恥をかかせてくれたな、君に貴族への礼仪というのをわからせてやるうー！」

この言葉に、才人もカチンと来た。彼はこの時点において、売られた喧嘩を買わないような冷静な性格の人間ではなかつた。

「おもしろい、やつてやるぜー！」

あつさつと買ってしまった。

「ふん。ヴェストリの広場で待っている！」

「ううして、才人はギーシュと戦うことになったのであるが、一部始終を見ていたシエスタが顔面を蒼白にしながらまず止めに入った。「ダメです才人さん。あなた殺されちゃいます。相手はメイジなんですよ。」

メイジの恐ろしさを心底知っている彼女は、才人を引きとめようとした。しかし逆にメイジを全くと言って良いほど知らない才人からしてみれば、その言葉は大げさにしか感じられなかつた。

「けど、ここで引き下がるなんて出来ねえよ。大丈夫、あんなやつ簡単にやっつけられるって。」

才人からしてみれば、拳骨勝負には自信があつた。ギーシュを目見た所、あまり体力はなさそつだと思っていたからだ。しかし、才人は次に駆け寄つて来たルイズの言葉で重大な事を忘れていたのに気付いた。

「ちょっとあんた正氣なの？そのメイドの言つ通りよ、相手は魔法を使えるメイジなのよ。あんたなんかが勝てるはずがないじゃない。」

「

そう、相手が魔法を使うことをしつかり見落としていたのだ。魔法がどんなものであるかはわからないが、少なくとも拳で戦うより痛いことにはなりそうだと思つた。

(ヤバ！素手で戦う事しか考えていなかつた。)

しかし今更引き下がるわけにもいかない。そこで彼は考えた。

(向こうが魔法なら、こつちは飛び道具だ！…)

才人はゼロ戦と一緒に飛ばされてきたある物を思い出し、急いでそれを取りに行つた。そしてそのまま約束どおり、才人は左手に何かの包みを持って、ヴェストリの広場に向かつた。またポケットの中にも、外からは見えないが得物をいれていた。正面から向き合つて人。周りで見守る人間の中には、必死に止めようとしたルイズと、シエスタの姿もあつた。

「ほう。逃げずにやつてくるとは感心だな。」

ギーシュがあざ笑いつゝに言ひ。もつ既に勝つたと思つてゐるようだ。

(ち、現代日本人を讃めんなよ…)

「それでは始めようか。」

ギーシュが薔薇を模した杖を振り上げると、目の前に花びら一枚現れ、それがすぐに女戦士の形をした甲冑となつた。

「くそ、やつぱり魔法を使つかー！」

「当たり前だ。メイジの僕が素手で戦つとでも思つたのかね？君のお相手はその青銅のゴーレム『ワルキュー』だ。では行くぞ…！」

ギーシュの指示と共に、ゴーレムが才人に迫った。

「くそ、使いたくなかったけど。曾爺ちゃん、借りるぜ……」

すると、彼は左手に持っていた包みを開いた。その中身は、金で装飾された短刀だった。それを持った途端、才人のルーンが光るが、それに気付いたものはいなかつた。

直後、間近に迫ったゴーレムを才人はあっさりかわした。その動きはとても常人のそれではなかつた。

「何！？」

まさかよけるとは思わなかつたギーシュは驚きの声を上げた。

「やるじゃないか！だが次はそうはいかない！」

その後もゴーレムが才人に攻撃をかけるが、才人はそれらを全てかわしてしまつた。これには才人自身も驚いた。またギーシュやギヤラリーはそれ以上に驚いた。

「な！一体どういうことだ！？どうして平民にあんな動きが出来るんだ！？」

（なんでだ体が軽々と動く！？もしかして恩賜の短剣の御利益か？）

ふとそんな事を考える。

今才人が持っているのは、恩賜の短剣である。これはかつて旧海軍兵学校で成績優秀者に天皇から下賜された剣のことだ。もちろん、

旧海軍士官であった才吉の持ち物である。何故かゼロ戦に積んであったのだ。

(まあいいや、今はここに勝つだけだ。)

そして隙を見計らつて才人はその短剣でゴーレムに攻撃をかける。その胸目掛けで短剣を刺した。剣が折れないか心配であつたが、ワルキューの外板は意外と薄いようで、そろはならず、逆にあつけないほど簡単に食い込んだ。

「よつしゃーー！」

「ゴーレムの胸に深々と短剣が刺さると、そのゴーレムはあっさり消え去つた。

「何ー！」

「嘘ー！」

「すーじーーー！」

ギーシュを含めた周りにいた全ての人間が目を疑つた。平民の少年が、刃物を持っているとはいえメイジの作ったゴーレムに勝つてしまつたのだ。

「くそーーー！うなつたら数で勝負だ。」

先ほどと回じよつてゴーレムを出現させたギーシュ。ただし、今度は7体だ。

「どうだね、さすがにこれだけの数は相手に出来ない。」

「へえ。」

さすがに7体となると、短剣1本だけでは無理である。

「本当は最後の武器だけど、いつなつたり。」

オ人はこの時点でまだ着替えておらず、飛行服を着ていた。そのポケットからあるものを取り出した。瞬間にスライドを引いて初弾を装填すると、その銃口を『ゴーレム』に向かた。

「これでも喰らえ土人形め！…」

バンバンバン！！

3発の重々しい銃声が広場にどどりいた。それと同時に、ゴーレムが3体消滅した。彼が使ったのはなんと拳銃だった。かつて日本陸海軍で愛用された14年式拳銃だ。これは飛行服の中にいれられていたものだ。

ちなみに、何でこんな物（本物の拳銃）があつたかについては、オ人はもう突っ込むのをやめている。とにかくこれでオ人は3体のゴーレムを瞬時に撃ち抜いて倒した。

「なーー！」

ギーシュが油断しているうちに、オ人は残つたゴーレムを短刀で刺した。いずれも、刺されると直ぐに土くれとなつて消え去つた。

そして、驚いたまま動けないギーシュとの距離を一気に詰め、その喉元に短剣を突きつけた。

「これでもまだやるか？」

もはやギーシュに逆転できる余地はない。彼は負けを認める以外の選択肢を見つけることが出来なかつた。

「ま、参つた。僕の完敗だ。」

この瞬間、才人の勝利が決定した。

「すげえ！――」

「やるなあの平民！――」

「幾らなんでもギーシュが負けるとは思わなかつたぜ――！」

ギャラリーの生徒たちが口々に賞賛や驚きの声を上げた。それに構わず、才人は短剣と拳銃を仕舞い、その場を立ち去りうつとする。

その彼に、ギーシュが声をかけた。

「待て……お前は一体何者なんだ！？なんであんな戦いが出来る？」

「俺にもわからねえ。ただ言えるのは、俺はルイズの使い魔でことだけかな。」

そう言つと、彼は心配そうに見つめていたルイズとシェスターの元へと歩いていった。

決闘（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

コルベール

「むう・・・」

『遠見の鏡』で才人とギーシュの決闘の一部始終を見ていたオスマン校長は唸つた。その隣では同じく決闘を見ていたコルベールが唚然としている。彼は先ほど決闘のことをオスマンに伝えるためにやつてきていた。

「あれが『ガンドーラルヴ』の力なのでしょうか。いくら『ドット』クラスとはいえ、ギーシュはメイジです。それを平民の少年があつという間に倒してしまったなんて。」

コルベールの言葉は少し震えていた。伝説をそのままに確かめたからに他ならない。一方、オスマンはその点にも驚いていたが、別の点にも着目していた。

「それも問題じゃが。彼の使った武器を見たかね。あの鞘に装飾を施した短剣はともかく、銃のような武器を使っていた。しかし、あんな武器をワシは見たこともない。」

「私も武器には詳しいほうですが、仮にあれが銃だとしてもあるよう連発が出来る銃はいまだ見たことがありません。しかも、威力に比してかなり小さいように感じました。」

ハルケギニアにも銃はあるが、才人たちの世界の中世レベルの科学力しかないために銃は火縄銃やマスケット銃など、1回1回装填し直す必要のある物しかない。だから、才人の使った拳銃のように連発が出来る銃などもちろんあるはずがない。しかも威力にしても

段違いである。

「本当にあの少年は何者なんじや？魔法の使えない魔法使いが呼び出し、『ガンドールヴ』の紋章を持ち、見た事もない服装をして鉄の竜を操り、さらには驚異的な威力を持つた銃じや。」

オスマンは真剣な眼差しのまま考え込んでしまつ。

「もはや我々が考えられるレベルの話ではないと想います。やはり王室に報告するべきでは？」

だが、オスマンは慎重だった。

「いや、もう少し様子を見よ。」

彼は王室への報告を先送りにした。

校長室で自分について、そのような真剣な会話がされているとは露とも知らず、才人はこの時ルイズから「主人様の命令違反について叩かれていたのであつた。

ちなみに、これ以後ルイズ（正確にはその使い魔）を見る生徒や教師の目が明らかに変わったのは言つまでもない。

それから数日後の昼下がり、ルイズから短時間ながら休憩をもつた才人は城壁の外に出てゼロ戦の状態を調べていた。飛行機とい

うのは機械としてはかなりデリケートな物である。小さな異常が、重大な事故に繋がりかねないのだ。

才人がとりあえずやらなければならないと思つたのが、ゼロ戦を入れる屋根を作ることだった。雨ざらしでは直ぐに鎧が浮いてしまう。

そんな彼の背中には一本の剣が担がれていた。前日が虚無の曜日であつたために、ルイズが彼を街へ連れ出してくれた。その時、短剣だけでは不安という事で護身用にルイズが武器屋で買つてくれた喋る剣、『デルフリンガー』だ。

「なあ相棒。相棒の話だといつは空を飛ぶ武器なんだろう? いつちょ飛ばして見せてくれねえか?」

武器という事で、それなりにこの喋る剣はゼロ戦に興味を持つてくれたらしい。

「だめだめ。飛ばすにはオスマン校長の許可が必要なんだ。」

「ちえ、臆病だね。」

色々愚痴ばかり言う剣だが、才人はこいつをそれなりに気に入っていた。

「ところでも相棒。なんでもさつきからこいつの周りを何度も見ているんだい?」

「整備のためだよ。これは機械だから、ほつとくと壊れちまうんだ。剣だって鎧が浮かないように時々研ぐだろ、それと同じさ。」

「ふーん、そんなもんかねえ。」

才人はデルフリンガーと会話しつつ、ゼロ戦を見て回る。先日飛行したとはいえ、飛んだのはほんの10分ほどだ。燃料はまだ充分ある。ただし才人は改めてこのゼロ戦を見て、いくつか驚くべき点を発見していた。

まずこのゼロ戦は戦える状態にあつたことだ。なんと機関銃が本物であつたのだ。ただし、オリジナルは機首に7・7mm機関銃2基、主翼に20mm機銃2基という組み合わせであったのが、この機体では主翼の武装が12・7mm機銃4基に交換されていた。おまけに胴体機銃も同じく12・7mmに換装されていた。20mm機銃弾は重くて弾数が少ない事からの反省であろう。

また、エンジンも換えられているらしく先日飛んだ際は1500馬力の出力が出ていた。これはオリジナルの1・5倍の出力である。それに加えて、胴体内の空きスペースに色々と入っていたが、それについては追々書いていくこととなるだろう。

機体を一通り見た才人は、最後にエンジンカバーを開けて内部を見た。

「よし、油漏れもないし異常はないそうだな。」

そこへ、1人の男が近づいてきた。

「ほう、これは興味深い。」

そこにいたのはコルベールだった。才人が城壁の外に出たのを見

て追つてきたのである。本当なら遠巻きに見て監視するつもりだったが、ついつい好奇心が先行してしまい、才人に声を掛けてしまったのである。

「あ、コルベール先生。」

まだこちらに来て日が浅く、しかも平民であることから貴族としやべる機会は少ない。当然ながらこの学院で才人が見知っている顔は未だ少ない。しかし才人は彼が平民平等に扱う、この世界では珍しいメイジであったので既に名前と顔を覚えていた。

「いやあ、邪魔してすまない。見慣れない物を見ると直ぐに興味を持つてしまうものでね。しかし随分と複雑な仕掛けのようだが、これは一体何かね？」

「コルベールはエンジンに興味を持つたようだ。

「エンジンです。」

「えんじん?」

「簡単に言えば、こいつの心臓です。ガソリンという油で爆発を起こし、それでピストンを動かして、プロペラを回すんです。」

才人は自分の知る簡単な知識をコルベールに言った。これはコルベールがそれなりに科学の素養があると、ルイズと一緒に出た授業を見て知っていたからだ。

「なるほど。そのプロペラという板を回して前に進み、そして風を受けて飛ぶわけか。実に興味深い。いや、普段から竜やグリフォン

を使い慣れている我々ならば、機械を使って飛ぶことなど考えもつかないだろう。」

「さすが先生、良くわかつていらっしゃる。」

才人は目の前の男に感心し、尊敬の眼差しを向けた。

「けどこれにも大きな欠点があるんです。先ほども言いましたが、動くにはガソリンという油が必要なんです。それがなくなつたらこれが飛べなくなります。」

コルベールはその言葉に思考を巡らせた。

「ふむ。それは残念だな。しかし、そのガソリンさえ手に入ればこれは動き続けるわけだな。」

「まあ永久にはつていうわけではないんですけど。なにせ金属の塊ですから、いざれ錆びて朽ち果ててしましますよ。」

その言葉に、コルベールは笑つた。

「アハハハ・・・。それについては心配ない。『固定化』の魔法を掛けねば良いのだよ。」

そう言われて、才人はルイズと一緒に出ていた別の授業でそんな魔法があつたのを思い出した。固定化とは、金属等を一定の状態に保つ魔法だ。なるほど、確かにそれなら劣化しない。

と、そこへ。

「才人さん！！」

メイドのシェスターが走つてくる姿が見えた。

コルベール（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。ストーリーについてや、こんな話にして欲しいなど、なんでもどうぞ。

+くれのワーケ

「 やあシエスタ。何？」

シエスタは直ぐ側に立っていたコルベールに一回お辞儀をすると、すぐに才人の方に向き直った。

「こないだ才人さんが食べさせてくれたアンパンを作つてみました。
お一つどうぞ。」

「 ありがとう。」

そう言つてシエスタは焼きたてのパンが乗つた籠を差し出した。
才人はその内の一つを取つて食べてみる。見た目はそのままであつたが、やっぱり料理は味である。

「 おいしいよ、シエスタ。」

何の問題もなかつた。むしろ本物よりおいしかつた。

「 本当ですか！？ 良かつた。」

素直に喜ぶシエスタ。

それはアンパンそのものだつた。こちらに来てからは日本の食べ物にありつけなくなつてしまつたから、余計においしく感じた。

「 私も貰つていいかな？」

「どうぞ。」

コルベールも一つ取つて食べた。

「うん、確かに美味しい。しかしこんな味は初めてだ。この中に入っている黒い物は一体何かな？」

「餡という小豆を砂糖で煮詰めた物です。こないだ才人さんが教えてくれたんです。」

「ほう。私は今まで色々な料理を見てきたが、この餡という物は初めてだ。」

「そういうえば、料理長も同じ事を言つていました。」

その2人のセリフに、才人は苦笑いした。異世界の食べ物であるから、いくらこの世界の料理に精通していても知つているはずがない。

「才人君。君は一体どこから来たのかね？見た事もない飛行機械に、見た事もない料理。一体君の故郷はどこなのかね？」

「あ、それは・・・・」

才人は返事に窮した。まさか、異世界から来たなんて言つても2人とも信じてくれないだろう。とりあえず今は誤魔かす事にした。

「ええと、まあ遠くからです。いずれまた詳しく教えますよ。」

すると、才人はじつとゼロ戦を見つめているシエスタに気付いた。

「シエスタ、どうかしたの？」

「え！？あ、いいえ。ちょっと気になつたことがあつたもので。でも、多分思い違いです。気にしないで下さい。じゃあ、私は仕事があるので。」

そして、シエスタは学院内に戻つていった。その後サイトはコルベールとしばし話したが、コルベールもまもなく学院内に戻ると言つた。

「さて、それじゃあ私も失礼するよ。片付けなくてはいけない仕事があるのでね。ガソリンと固定化の魔法についてはまた考えておくよ。それと、またちょくちょく見に来てもよいかな？」

「はい。先生なら色々相談できると思うので、今日はありがとうございました。」

そしてコルベールはその場を離れた。今回の会話で、コルベールは才人に関しての情報をかなり仕入れた。その中で彼が重要視したのは、彼がそれなりの知識をもつていることと、人格的には問題ないということであった。

その日の夜、学院を文字通り揺るがす事件が起きた。学院内の宝物庫から『破壊の杖』が盗まれたのである。

ちょうどその時、才人はルイズとキュルケの喧嘩に巻き込まれていた。原因はキュルケが才人に剣を贈ると言い始めたことだつた。もちろん、既にキュルケはルイズが才人に剣を贈つたことを知つて

いた。ようは嫉妬によるあてつけである。

才人としてはどっちの剣を取るか迷ってしまった。デルフリンガーも確かに面白い剣であったが、キュルケが贈ると言った剣は装飾が施された美しい大型の剣で、それなりに魅力的であった。

結局才人は決められず、そこで中庭に出てキュルケとルイズの魔法勝負となつた。その最中のことである。突然巨大なゴーレムが現れ、宝物庫を破壊し杖を盗んでいったのだつた。

翌朝、学院は大騒ぎになつた。ただでさえ厳重な防備がなされた学院の宝物庫を破壊されたのに、昨日潜入したのが最近世間を騒がせている土くれのフーケであつたのだから尚更である。

ただちに教師全員と目撃者の4人（ルイズ、才人、キュルケ、そして対決に付き合つたタバサ）が校長室に召集された。

オスマン校長は4人に對して一通りの事情聴取を行つた。それが終わつた時である、校長秘書のミス・ロングビルが有力な情報を集めてきた。

「近隣の農民がフーケらしき人間を目撃しました。森の奥の廃屋に、ロープを被つた不審な人物が潜伏しているそうです。今までの目撲証言から考えると恐らくフーケです。」

この報告を聞いてオスマンはその場の人間に聞いた。

「王室に報告していくは間に合わない。それに学院の面子に掛けても杖は我々の手で取り返す必要がある。誰か志願する者はいないか？」

しかし、オスマンの言葉に対し、教師たちはお互いに責任をなすりつけるばかりで全く志願しようとはしない。オスマンもあきれ返った程だ。

そんな中で真っ先に杖を上げたのがルイズだった。

「先生たちには任せて置けません。私が行きます！…それが貴族の義務です！」

彼女に刺激されるように、キュルケも杖を上げた。さらに、心配したタバサも杖を上げた。こうして、フーケ討伐隊が編成された。これに道案内約のロングビル、ルイズの使い魔の才人を加えた5人はオスマン校長らに見送られて出発した。

馬車に揺られる事約2時間。一行は森の中にある廃屋に到着した。才人を先遣偵察役、ロングビルが周囲の警戒役として、5人はその廃屋を調査した。

すると、埃だらけの小屋の中にはフーケはおらず、すぐにタバサが部屋の隅に置かれていた破壊の杖を見つけ出した。そして、その『破壊の杖』の正体を見て才人は絶句した。

(なんでこいつがここにあるんだ！？)

才人はそう思つたが、直ぐに頭を切り替えた。驚くと同時に、あまりにあつさり見つかることと、フーケの姿が見当たらなかつた事に、才人は大いなる不安を抱いたからだ。上手く行き過ぎている。そしてその不安は次の瞬間には現実の物となつた。

突如昨夜見たのとそっくりな『ゴーレム』が小屋の屋根を引っ張ったのである。

4人は直ぐに反撃を開始した。しかし相手の魔法使いは相当高いレベルにあるのか、『ゴーレム』は並大抵ではないほどに頑丈だった。キュルケの火の魔法も、タバサの風の魔法もことごとく跳ね返された。

「だめだ。逃げろ！！」

サイトの叫びとともに、キュルケとタバサはすぐに走って逃げた。しかしルイズだけは逃げようともせず、『ゴーレム』の前に立ちはだかつた。

「あのバカ！！」

急いで才人はルイズを抱きかかえ走った。

「何するのよ！…降ろしなさい！貴族は敵に背を向けてはならないのよ！…」

「その貴族のプライドのために死んでいいはずがないだろ！…命は1つなんだぞ！…冷静になれ！…キュルケやタバサの強力な魔法でもだめなんだ。ましてやお前の魔法なんかが通じるわけないだろ！…」

すると、ルイズは激しく抵抗した。

「そんなのやつてみなきやわかんないじゃない。私が『ゼロ』じゃないってこと教えてあげるわよ。」

説得は駄目と見た才人はルイズに平手打ちをした。

「ふざけるな！！命に関わる問題なんだぞ！！死んで『ゼロ』の名を返上しても意味ないだろ！！今はまず自分が出来る事を考えろ！！」

その言葉に、ルイズは黙り込んだ。

+くれのフーケ（後書き）

御意見などを待ちしております。

破壊の杖

才人がルイズを抱えて走った。すると突然2人の目の前に、竜が着地した。その上にはタバサとキュルケが乗っている。タバサの使い魔である風竜、シルフィードだ。

「おお、タバサの竜か。悪い、ルイズを頼む。それと、タバサ！その『破壊の杖』を俺によこせ！！」

抱いていたルイズをキュルケに引き上げてもらい、才人は『破壊の杖』をタバサから受け取った。

「ちょ、ちょっと。平民に魔法の杖が扱えるわけないじゃない！気でも狂つたの？」

キュルケが心配そうに言うが、才人は悠然と言った。

「大丈夫だ！…とにかくお前らは上がって待つてろ…安心しろ。こいつは魔法の杖なんかじゃないからな…！」

「「え…?」」

驚いているキュルケとルイズを尻目に、タバサはシルフィードに上昇を命じた。その間に才人はゴーレムの前に踊り出る。

「こんなでか物は剣なんかじゃ話にならねえ。けどこいつなら一撃で行けるはず。」

才人は『破壊の杖』、いや元いた世界ではさんざん映画や漫画な

どで見たロケットランチャーを肩に担いで構える。

砲口のキャップを外し、インナーチューブをスライドさせ安全装置を解除。最後に照準装置を立てる。ゼロ戦の時と同じく、彼自身驚くほどスマーズに扱えた。

そして、その狙いを『ゴーレム』にピタリと合わせた。

「行け！！」

才人は発射スイッチを押した。

ドビューン！！

爆炎とともに発射筒内のロケット弾が勢いよく発射され、ほんの数秒後には『ゴーレム』に直撃し信管を作動させた。分厚い装甲板で覆われた戦車さえ貫く兵器相手では、いかに『ゴーレム』が巨大でも所詮その体自身は土である。だから、無事で済むはずがない。

命中と共に起きた煙が晴れると、そこには上半身を完全に吹き飛ばされた『ゴーレム』があつた。残つた下半身も直ぐに崩れ去つて消えた。

驚くほど呆気ない勝利であった。しかし、才人には『ゴーレム』に勝つた事よりも、なぜこんな物がここにあるのかが不思議だった。彼が見る限り、この『破壊の杖』は間違いなくM72ロケットランチャードだ。

(どうしてこいつがここに？)

そんな考え方をしていると、空中に待避していた3人が降りてきた。

「才人、大丈夫！？」

ルイズがまず駆け寄ってきた。

「ああ、なんとかな。」

「それにしても、あなた良くそれを扱えたわね。一体それは何なの？」

キュルケが驚きの表情で叫びつ。

「これは俺の世界の武器だよ。どうしてこんな所にあるんだ？」

そんな中で、タバサは辺りを窺っていた。

「どうしたんだタバサ？」

「フーケはどうかしら？」

「そう言えば、ゴーレムを操っていたのならこの近くにいるはずよね。」

ルイズも辺りに視線を向ける。すると、警戒役のミス・ロングビルがひょっこり現れた。そして、使用後才人が地面に置いたランチヤーを拾い上げた。

「みなさんご苦労様でした。これでこの『破壊の杖』の使い方がわかりました。」

敬語だが、どことなくその言葉には悪意のようなものが感じられた。まさかという予感が4人に走った。ルイズらは杖を構え、才人は背中のデルフに手を掛けようとした。しかし。

「動かないで！！」

4人の動きを察知したロングビルはランチャーの砲口を4人に向けた。4人の予感が確信に変わった。

「そんな・・・じゃあ、あなたが土くれのフーケ！？」

ルイズが言うと、ロングビルは掛けていた眼鏡を外し髪を下ろした。

「そうよ、私が土くれのフーケよ。さあ杖を捨てなさい。そこの使い魔君は剣を捨てなさい！じゃないと、命はないわよ。」

才人はちらつと一瞬視線をフーケに向けたが、直ぐにデルフの鞘に手を掛け抜いた。その彼の行動にルイズたちは啞然とし、またフーケは思わず才人の行動に驚愕した。

もちろん、彼女の警告に逆らつたのだから彼女は躊躇しなかつた。

「くー！」

フーケが先ほどの才人のように発射スイッチを押した。しかし、ランチャーからは何も出ない。

「え！！」

混乱するフーケを尻目に、素早く動いた才人が剣をフーケに向けた。そして、次の瞬間にはその喉元にデルフを突きつけた。

「勝負あつたな。そいつを地面に捨てて、両手を上げるんだ！！」

フーケは悔しそうな表情をしながらランチャーを落とし、両手を上げた。

「ルイズ、こいつの杖を取り上げる……」

「わかったわ。」

ルイズがすぐに、懐に入っていたフーケの杖を取り上げた。これでもうフーケに反撃手段はない。メイジは杖がなければ魔法が使えない、ただの人間にしかすぎない。

「どうして、どうして魔法が出なかつたの？」

悔しがるフーケに、才人が勝ち誇つたように言った。

「あいにくとそれは1回きりの使い捨て兵器なんだよ。まあこっちの世界の人間が知らなくて当然といえば当然だけどな。」

「使い捨て……」

「そ、う。どうせ使い方がわからなくて俺たちに使わせようとしたんだろうけど、それが裏目に出たね。そのまま逃げていれば良かつた

ものを。』

言い切ると、才人は後ろで立ち尽くしていた3人の方へ振り返つて言った。

「よつしゃ！『破壊の杖』を取り戻して、フーケを捕まえたぜ！…』

その後、学院に戻った4人は校長室に呼ばれた。オスマン直々にルイズら貴族には今回の功績を王室に報告し、今後何らかの褒賞があると言わされた。一方一番活躍したにも拘らず才人は平民であるため、褒章などは一切なし。しかしながら、そんなことは才人にとってどうでも良いことだった。

むしろそれを気にしたのはルイズであった。彼女はオスマンになんとかならないかと言つたが、才人はそれをやんわりと制した。

結局ルイズはそれ以上何もいわず、オスマンに言われてキュルケとタバサとともに夜の晩餐会の準備のために出て行つた。一方才人は、オスマンと話したいことがあると言つて部屋に残つた。

ルイズ、キュルケ、タバサが退室していくと、1人才人は校長室に残つた。

「ワシに聞きたいことがあるよつじやね？」

「そうです。あの『破壊の杖』は俺の世界の武器でした。一体誰があれをここに持ち込んだんです？」

「ふうむ。そういうことが、あれはな・・・」

オスマンの説明によれば、あのロケットランチャーは30年前、彼が森でワイバーンに襲われた際、ある男が倒すのに使った物だという。その男は既にケガをしていてオスマンの介護の甲斐なく死亡。そして彼が持っていたもう一本のランチャーを『破壊の杖』と名づけ、宝物庫に保管した。

つまり、その男を含めてどのようにしてオスマンの目の前に現れたのかはまったくわからないということだった。

「そうですか。」

才人にしてみれば肩透かしを喰らつたも同然であった。何か地球へ戻れるヒントを得られると期待していただけに、落胆も大きい。

「すまんな。ただし、その手に刻まれたルーンについては教えてやれるぞ。それは『ガンダールヴ』のルーンだ。」

「『ガンダールヴ』？」

「伝説にある、あらゆる武器を使いこなした始祖ブリミルの使い魔のルーンじゃ。」

その言葉に、才人はゼロ戦やロケットランチャーを軽々扱えた理由がわかつた気がした。

「なぜ君がここに現れ、そして『ガンダールヴ』になつたのかは我々にもわからん。じゃが、ワシは君に出来る限り協力するだけ言つておこう。」

結局、オスマンとの会談の成果は限られた物であった。

破壊の杖（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

アンリエッタ行幸

フーケを捕まえた翌日、才人はゼロ戦の格納庫で目を覚ました。この格納庫はオスマン校長が、昨日のお礼ということで、魔法を使いわずか数時間で建ててくれた物だ。この時になつて、ようやく才人は魔法の偉大さを知つたのであるが、それは別の話である。

さて、才人はこの前日までルイズの部屋で寝ていたのであるが、今日はゼロ戦の格納庫で寝ていた。原因はルイズの怒りを買ったからである。

昨日の夜、パーティーが開かれ、そこで才人はルイズと一緒に踊ったのであるが、その後部屋に戻つてルイズが自分のことを好きだと早とちりし、夜這いしようとしたのである。そこでルイズが目を覚まし、夜這い自体は未遂で終わつたのであるが、才人は当然部屋を叩き出される結果となつた。叩き出されたと言うよりは自分から身の危険を感じて逃げ出したと言つた方が良い。

そんな事があつたせいで、この日は朝からルイズとギクシャクする事となつた。才人はひたすら謝り仕事をいつも以上に真剣にこなしたが、軽く見られたルイズの機嫌は直らなかつた。

そんな状況を一変させたのは、2時間目の授業の最中に髪を被りやたら装飾を施した服で入ってきたコルベールの一言であった。

「本日、アンリエッタ姫殿下が我がトリステイン魔法学院に行幸なされます。」

その言葉に、生徒たちは色めき立つた。この世界での王族の存在

は才人がいた世界よりも遙かに大きいことを示した物といえた。もつとも、その才人はもともとが地球人であるから、どうしてそんなに驚くのかがよく理解できなかつた。

そんな中、ルイズは驚くというよりも喜びの表情を見せた。

「姫様に・・・会える・・・」

授業が中止となり、学院は姫殿下を迎えるための準備に入つた。生徒たちは身だしなみを整える。ルイズもいつも以上に鏡を見て、念入りに服装をチェックしている。

その様子を才人は物珍しげに見ていた、突然ルイズが彼の方に視線を向けてきた。

「そういえばあんた、代えの服はないの？」

「はあ？」

いきなりそんな質問をされたために、才人は間抜けな表情をしてしまつた。もちろん、いきなりこの世界に召喚された彼に代えの服はない。飛行服があるが、あれは日常着る服ではない。下着類はなんとか調達したが、上着はずつと同じ服のままだ。

「そんな汚れたみすぼらしい服で姫様を迎える気なの？」

そう言われて才人は自分の服をみた。確かに昨日フーケと戦つたせいもあり、服は埃まるけで汚れていた。

「なんでもいいから着替えなさいよ。姫様の前にそんな格好のまま

出すわけにはいかないからね。」

無茶な相談であると思つた才人だが、あることを思い出した。

「わかつた着替えてくる。ただしちょっと時間かかるからな。」

そう言つて才人は1人部屋から出て行つてしまつた。

ルイズは一体どこへ行つたのか首を捻つた。まさか今から買いに行くとは思えない。借りに行つたのかと考えた。あの決闘以降ギーシュと意外と親密しているようだし、ゴルベルとも親しくしているようだつたから、ルイズは借りに行つたと断定した。

そして30分後、才人は戻ってきたわけであるが、その格好にルイズは驚いた。

「あんた何よその格好！？」

才人が着ていたのは、まばゆい真っ白な生地に金色のボタンがついた制服らしい服であつた。腰には先日の決闘に使つた金の短刀を引っ提げている。そして頭には錨のマークが付いた帽子を被つ正在。もちろん、ルイズには見覚えのない物である。

「曾爺ちゃんの着ていた服なんだ。ゼロ戦に積んであつただけど、やつぱこれじゃあまりいかな？」

才人が着ていたのは旧日本海軍の第2種軍装だつた。その肩には中尉を示す2つの桜マークの階級章が付いている。そしてそのサイズは才人にピッタリであった。そのため、今の彼は普段の150%は格好良く見えた。

「ま、まづくはないわ。まああんたならそれで充分でしょ。」

ルイズは本心を抑えそう言った。

そして午後、アンリエッタ姫を迎えるために生徒たちは正門に並んだ。才人もルイズの使い魔として隣に並んだが、やはり才人の服は目立つた。まあ普段の服でも充分目立つたであろうが、真っ白な士官服はいつにもまして周りからの視線を引いた。

「君は軍人だつたのかい？」

そんな質問まで出たが、才人はなんとか切り抜けた。まもなくアンリエッタ姫が乗った馬車が入場して来た。ユニコーンに引かれた豪華な馬車からアンリエッタが降りると一斉に生徒たちは杖を上げて歓迎した。もちろんルイズも同じようにした。そうしなかったのはゲルマニア出身のキルケと、ガリア出身のタバサ、そして使い魔の才人ぐらいである。

才人は取りあえず型通りの敬礼をした。

その後、様々な歓迎式典が行われたが、ルイズは早々と部屋に戻つた。才人は部屋に入るのを許されたが、その間ずっと何かを思いつめたような表情をするルイズが気になつた。

そのまま夜を迎えたが、ルイズの様子に変わりはなかつた。ためしに冗談を言つたりしてみるが、まったく反応がない。

(一体どうしたんだ?)

そんなことを考えていると、扉をノックする音が聞こえた。

「どうぞ。」

ルイズが答えると、フードを深く被った女性が入ってきた。そして女性がフードを取った瞬間、2人とも目を丸くした。

「姫様（殿下）！？」「

なんと来訪者はトリステイン王国王女のアンリエッタ姫殿下その人であった。

その後、ルイズがかつてのアンリエッタ姫の遊び相手であり、親友であつたことを知つて、才人はルイズの行動のおかしな点の答えを知つたのであつた。

2人の少女が昔話に花を咲かせ、1人蚊帳の外に置かれた才人は、邪魔をしては悪いと思い、部屋を出ようとした。

それに気付いたアンリエッタが引き止める。

「あ、あのどうかされましたか？」

「え？いや、邪魔をしちゃ悪いと思つて。」

「まあ、そんな気遣いは無用です。変わった軍服ですが、どちらの軍の方ですか？」

どうやら才人を軍人と思つたらしい。

「いいえ、俺は軍人じゃありません。平賀才人。そこにいるルイズの使い魔です。」

すると、アンリエッタ姫の表情が驚きの物に変わった。

アンリエッタ行幸（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

密命

アンリエッタは才人がルイズの使い魔と聞いて、目を丸くした。

「ルイズ、あなたが昔から変わっているのは知っていましたが、まさか人を使い魔にするなんて。」

すると、ルイズは反論した。

「したくてしたわけじゃありません。そいつが勝手に現れたんです！」

その言葉に、才人としては文句の一つでも言ってやりたいところであったが、お姫様の前なのでなんとか思いとどまつた。

「そうなんですか・・・ところでルイズ、実は頼みたい事があるのですが・・・」

アンリエッタの表情が笑顔から思いつめた表情になる。

「何でしちゃうか？」

「実は・・・」

彼女の話によれば、現在ゲルマニアとの間で同盟関係構築を目的として、アンリエッタとゲルマニア皇帝の婚約が進んでいるという。もちろん、アンリエッタは結婚したくはないが、国の防衛政策上やむを得ぬことだった。

しかし、隣国アルビオン王国では現在王制妥当を掲げた貴族派グループのレコン・キスタが明日にも王室を滅ぼさんとしていた。このレコン・キスタは次なる標的をトリステインとしており、そのためにもトリステインとゲルマニアの同盟を阻止しようと画策していた。

そして、かつてアンリエッタがアルビオン王国のウェールズ皇太子に出した手紙の中に、それを行えるだけの材料になりうる内容の物があるという。アンリエッタ、いやトリステイン王国としてはそれをレコン・キスタの手に渡る前に、回収する必要があった。

「つまり、私にアルビオンに行き、その手紙をウェールズ皇太子から受け取つて来て欲しいと？」

「そうです・・・親友にこのよつな命がけのお願いをするのは気が引けるのですが、信頼できるのはあなた一人だけなのです。」

話を聞いていた才人は、婚姻外交の恐ろしさという物を思い知られた。普通の人間として生きていれば、結婚は個人の意志に任される。しかし彼女は王族であるがゆえにその自由さえなく、それどころか結婚の結果によっては国を危機にさらす可能性もあるという、重い責任を負わされていた。

才人もドラマなどでそうしたことがあるのはわかっていたが、目の前で実物を見せられると正直哀しくなる。

「わかりました姫様。私が必ずやウェールズ皇太子にお会いして手紙を受け取つて参ります。」

「ありがとうございます。」

アンリエッタはまずルイズに頭を下げる、続いて才人の方を向いた。

「使い魔さん。ルイズをしつかり守つてあげてください。」

本来なら、才人にはルイズを命を捨ててまで守る義理はない。ましてやアンリエッタやトリステインのために働く義務もない。しかし、目の前のアンリエッタ姫やルイズの友情、そして彼女の運命を聞いて守つてやりたくなつた。

「はい、お任せください。」

自然とそのセリフが出た。そして、さらに提案した。

「ところで、ここからそのアルビオンまではどれくらいの距離でしょうか？」

突然の事でルイズもアンリエッタも答えに窮した、直ぐに我に帰つて考える。

「アルビオンは常に動いているので、正確な距離は言えません。ただし、もう間もなく二つの月が交わる時期、おそらくラ・ロシヨールの街から300キロメイル程まで接近します。」

アンリエッタの説明に、才人は少し困惑した。動いているという意味がわからなかつたのだ。

「あの、アルビオンが動いているってどういふことですか？」

「アルビオンは浮遊大陸なのよ。だから動いていて当然じゃない。」

ルイズが補足説明したが、もちろん才人は驚かずにはいられない。なにせ浮遊大陸なんて地球じゃアニメや漫画の話である。しかしそれに関しての突つ込みはやめておく。一々そんなこと言っていたら切りがないからだ。

ところで、メイルという単位に才人が疑問を言わなかつたのは、既に言葉こそ違うが地球でのメートルに大体同じであることを知つていたからだ。

「じゃあその、ラ・ロショールまではどれくらいですか？」

その問いに、再びルイズが答えた。

「馬で2日だから、ここから大体700キロメイルくらいかしら。」

「つまり最短距離なら片道1000キロメイルか・・・ならなんとわかるかも。」

その言葉に、今度はルイズが聞いた。

「ちょっとあんた一体何を知りたいのよ?」

そこで才人は少し顔をにやつかせて言った。

「俺のゼロ戦、つまりあの飛行機械は燃料が満タンなら3300Km飛べるんだ。kmはキロメイルと同じ意味だ。だから、上手く行けばアルビオンまで往復できる。」

その言葉に、ルイズは耳を疑つた。

「3300キロメイルを飛べるですって！？嘘でしょ！？竜でもそんな距離は連續して飛べないわよ。」

「それだけじゃない。ゼロ戦の巡航速度は300キロメイル以上だ。だから朝出発すれば昼前にはアルビオンに着ける。」

その言葉に、アンリエッタとルイズの表情が喜びの物になる。

「だったら早いほうがいいわ、直ぐ出発しましょー。」

「いや、夜はさすがに無理だ。下手すりや地面に激突してしまう。それに俺とルイズが乗るためにちょっと手を加えなきゃならない。出発は明日の夜明け前だ。」

才人は急ぐルイズを宥めると、早速出発の準備を開始した。

まずアンリエッタにアルビオンとトリスティン国内の精密な地図を用意してくれるよう頼んだ。空の上を飛ぶのだから迷子にならぬよう、常に航路確認をしなければいけないからだ。有難いと言えるのは、途中のラ・ロシェールまでは地上の目標を確認しながら飛べることだ。

続いて才人は、コルベールの部屋に行つて先日頼んだガソリンの精製が出来ているかを確認する。実は先日、サイトはタンク内のガソリンを少しばかりサンプルとしてコルベールに渡していた。

才人はコルベールにゼロ戦がなくなつたら飛べなくなると聞き、それが複製できなかと言つてきた。そこでダメ元で渡した

のだ。幸運だったのは、コルベールは私的な研究で既にガソリンを『鍊金』で作っていたことだ。

複製可能とわかつた才人は早速それを依頼して、さらにコルベールもそれを受託した。研究大好きで、才人のゼロ戦にも大いに興味を示した彼らしい決断だった。

もつとも、さすがに深夜に取りに行くのは問題ありと言えた。

コルベールは深夜の来訪に驚いたものの、樽1個分ほどの量が完成していることを才人に教えてくれた。

才人はその全てを引き取ると、早速ゼロ戦にいれてタンクを満タンにした。さらに入らなかつたガソリンをワインのビン5本に小分けし、操縦席において緊急補給用とした。可燃物を持ち込むのは本来御法度だが、万が一足りなくなつて帰れなくなつたら困る。

また、ルイズを乗せるために操縦席後ろにある無線機や酸素タンクを除けて一人分の臨時座席をこしらえた。そうした作業を終えるころには日の出の3時間程前になつていた。

作業が終わつてから間もなく、アンリエッタがアルビオンとトリステインの地図を持つてきてくれた。精度はそれほどのものではなかつたが、ないよりはマシだ。さらにアルビオン軍の現在の状況や、レコン・キスタに関する最新の情報もついでに教えてくれた。

「アルビオン王国軍は現在ニュー・キャッスル付近に陣を張つているそうです。それとアルビオン付近の空域にはレコン・キスタについた軍艦が多数遊弋しているそうです。お気をつけて。」

「ありがとうございます。」

才人は地図を見て大体の航路を決める。その作業を終え外を見る
と、空が白み始めていた。発進可能な時刻となる。

「よし、行くぞルイズ!!」

「ええ!!」

密命（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

アルビオンへ

空が白み、徐々に周りの風景が鮮明になつてくる中、トリスティン学院の城壁外でレシプロエンジンの音が鳴り響いた。才人がゼロ戦のエンジンを始動させたのである。彼はエンジンが無事掛けたのを確認すると、各部のチェックと必要最低限の暖機運転を行う。それが終わると、ルイズを機内にいれた。

アンリエッタからウェーラーズ皇太子への手紙と、『水のルビー』という指輪を預かった彼女は、慣れない足取りで才人の手をとり、翼をよじ登つてコックピットに入った。

ルイズに続いて、才人がコックピットに入る。

「どうか、お気をつけて。」

爆音で聞こえないものの、機体から少し離れた場所に立つアンリエッタが手を振つて2人を見送る。それに答えるように才人とルイズも手を振つた。

2人を乗せたゼロ戦は、黎明のトリステイン学院を出発した。

出発すると、才人は高度3000mで水平飛行に入った。巡航速度は400kmである。本来の巡航速度はもつと遅いのであるが、現代製のエンジンのおかげで高い性能を出せているようだ。

「こりゃあ予定より早く着けるかもしれないな。」

才人がそんな事を呟くと、後席のルイズが不満げに言った。

「それは良いことだわ。ここは窮屈で仕方がないから、早く出たいわよ。これなら馬で行つた方が良かつたかもしないわ。」

本来ゼロ戦の操縦席は一人乗りである。そこにむりやり体格的に小さいとはいえたが、一人を無理に乗せたのだから窮屈であつてありまえである。

「そんなこと言つなよ。その代わりアルビオンまで半日も掛からないんだからな。」

取りあえずそう言つて宥めておく。才人は地図とコンパスを見ながら自分の飛んでいる方位や位置を確認する。少しでも油断すると直ぐ迷子になつてしまつ。

首都のトリスターニアをはじめ、時折街や村を目印に、才人の零戦はアルビオンを目指して飛んでいく。飛行中、ルイズは才人の邪魔をしないためかあまり言葉を発しなかった。

一度才人が後ろを除くと、彼女はスヤスヤと寝息を立てていた。昨夜は緊張で眠れなかつたようだから仕方がない。才人も徹夜であつたが、眠るわけにはいかないので、ルイズの寝顔に微笑みながら、ひたすら眠気と戦う。

それでもやはり一人では眠くはなる。彼が眠りそつになると。

「寝るな！！」

と、デルフリンガーに叱咤された。

出発して2時間、ラ・ロショールの街を確認した。ここから先が正念場である。上手くアルビオンまで機体を持っていかなければならない。また、アンリエッタからは空族やレコン・キスタ軍の軍艦がうろついているという情報を貰っている。

才人は後ろのルイズに声を掛けた。

「おい！ルイズ起きろ！！」

彼女は直ぐに目を覚ました。

「何、もつアルビオンに着いたの？」

「違う。さつきワ・ロショールを通過した。そろそろアルビオンに近づくから、後ろを見ていてくれ、敵にでも会つたら大事だからな。」

才人はこの世界の船が空に浮き、木造である事を聞いていた。ゼロ戦は完全武装しているが、機銃で船を沈められるなどとは考えていなかつた。もし出会つたらなるべく戦いは避けなければならない。

「わかつたわ。」

ルイズは後方を警戒する。

しかし、その後幸いにも敵の船に出会つことはなかつた。一度だけ遠方に船影を認めたが、それもほんの1分ほどの事で、すぐに見えなくなつた。

そして、出発してから3時間、ついにアルビオンを認めた。

「これがアルビオンか。」

空浮いている大陸アルビオン。話を聞いて想像はしていたが、それ以上の物だ。

「そりよ、セ、ニユーカッスルに早く向かいましょ。」

オ人はアルビオンの地図を開き、ニユーカッスルに機首を向けた。オ人はアルビオン上空に出ると、本当に大陸であるのがわかる。それほど大きいのだ。オ人は雄大な光景に目を奪われつつ、周囲の警戒を続ける。

そして内陸に沿つて飛ぶと、間もなく目的地のニユーカッスルが見えてきた。さて、ここからが問題である。ゼロ戦が降りられる適当な平地を見つけなければいけない。

しかし、幸いと言おうか丁度いい場所が直ぐに見つかった。オ人は両脚を下ろして着陸態勢に入った。

「着陸するぞ。しつかり掴まつていろよ！」

地面に脚をつけた瞬間、凄まじい振動が襲ってきた。滑走路でも草原でもない荒涼とした荒地であつたために、石や起伏が多いのだ。それでもなんとかひっくり返る事もなく、機体は止まった。

「大丈夫かルイズ？」

「もう、何回も体を打つたわ。もう少しさしく降りなさいよ……」

「じめん、じめん。」

そんな愚痴を言いつつ、言われつつ、2人はコックピットから出た。この時ルイズは防寒対策で着てきたフードを脱いだ。そして、いつのまにかゼロ戦の周りを杖を構えたメイジに囲まれているのに気が付いた。どうやら陣地のど真ん中に下りてしまつたようである。

「お前たち何者だ！？」

格好から見て相手はどうやら王室軍であるようだ。才人は慌てて手を上げて言った。

「待て！！敵じゃない！！トリスティン王国からの特使を連れてきた、ウェールズ皇太子に会いたいんだが。」

そうすると、1人のメイジが前に出た。

「アルビオン王国軍近衛師団隊長のトーマスだ。君たちがトリスティンからの特使である証拠を見せてもらいたい。」

「それならここに。」

すると、ルイズが1通の書状を手渡した。アンリエッタ女王直々に書いた身分保証書だ。トーマスはそれに目を通すとルイズに返した。

「ふむ。本物のようだ。君たちをトリスティンからの特使と認める。よしこそアルビオン王国へ。ウェールズ皇太子殿下は今、本国艦隊を率いて出撃中だ。だからしばらく待っていて欲しい。」

2人はジェームズに案内された場所で待つことになった。驚くべき事に、才人たちの降りた場所は本当に仮宮殿に近い場所であった。才人は物珍しげに見るジェームズたちに頼んでゼロ戦を人目のつかない場所に移動してもらつと、飛行服を脱いでライズと一緒に貴賓室で待つた。

「それにしても、皇太子自ら艦隊を率いて出撃とは、王国軍はそんなに追い詰められているのか？」

才人が思ったことを口にした。

「哀しいけどそつらしいわ。王室軍はレコン・キスタに負け続けてここニユーカツスルが最後の皆らしいけど、いつ落ちてもおかしくないって言うのが専らの噂よ。」

ライズの言葉に、才人は自分たちがいる間は襲つて来て欲しくないと真剣に思った。

才人が腕時計（もちろん向こうつの世界の）を見ると、時刻はまだ9時半を過ぎたぐらいである。トリステインを出たときが5時半を回ったぐらいであったから、4時間もしないうちに着いてしまつたようだ。どうやら早く着き過ぎたようだ。

2人はひたすらウエルズ皇太子の帰りを待つしかなかつた。

そして3時間後、ようやく貴賓室の扉が開けられた。

アルビオンへ（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

ウェールズ皇太子

貴賓室の扉が開き、入ってきたのは金髪の美青年であった。その物腰から、王族ということが才人にも良くわかる。

「お待たせして悪かつた特使殿。アルビオン王国皇太子のウェールズ・テューダだ。」

ウェールズが名乗ると、ルイズが立ち上がり礼をする。

「お会いできて光榮です。トリスティン王国より特使として派遣されましたルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエル。こっちは使い魔の才人です。」

ウェールズは2人を一瞥すると、机を挟んで向かいの席に座った。

「ようこそアルビン王国へ。もつとも、もはや王国領はこの二ユーカッスルだけだが。それで、私に何の用かな?」

「まず、アンリエッタ王女殿下のお手紙を。」

ルイズはアンリエッタか託された手紙を渡した。ウェールズは封を開けてそれを読んだ。そして表情一つ変えずに、読み終わると視線を再びルイズに向けた。

「ふむ。用件はわかつた。来たまえ、その手紙をお渡ししよう。」

「はい。才人はここで待つてて。」

そして彼はルイズを伴つて部屋から出て行った。それと入れ替わりに、執事服を着た老人がティーセットを持つてやって来た。

才人の前に紅茶が出される。

「ありがとうございます。」

才人が頭を下げた。その執事も同様に頭を下げた。

「では、じゅつくり。」

「あ、待ってください！」

才人は老人を引き止めた。

「あの、こんなことを聞くのは失礼ですが、ウェーレズ皇太子は自ら本国艦隊の指揮を執っているみたいですが、王室軍はそこまで追い詰められているのですか？」

すると、老人は才人の質問に丁寧に応じた。

「はい、残念ですが事実です。アルビオン王室はレコン・キスタが攻めて来れば、明日にも滅びるでしょう。ここに残っている兵士は約300。敵は数万の大軍勢です。とても太刀打ちできません。先ほど言われた本国艦隊も名ばかりで、残存しているのは巡洋艦「イーグル」号ただ1隻だけです。」

「それじゃあ勝つ見込みは全くないんですね。降伏もしくは亡命は？」

「我がアルビオン王国に降伏の言葉はありません。最後の一兵まで戦う所存です。」

才人はこれでは旧日本軍じゃないかと思つた。才人の考えからすれば、全滅まで戦うなんて馬鹿げている。精一杯戦い、それで敵に投降するのは卑怯な行為ではない。もつとも、それはあくまで才人の価値観であるのだが。

「じゃあ亡命は？」

すると、老執事は首を横に振った。

「私くしどもとしては、攻めてウェールズ殿下だけは亡命するよう進めています。国王陛下も口にこそ出しませんが、殿下に再起を期してほしいと思っているでしょう。しかしながら、殿下はそれを良しとしておられません。例え亡命してもレコン・キスタの連中は追つてくる。それに亡命先の国にも迷惑を掛けると仰られて。」

なるほど、地球でも最後には存在 자체を消されてしまった王室はたくさんある。特にソ連によって銃殺され、薬品で骨まで消されてしまったロマノフ王朝は有名だ。そのレコン・キスタがソ連と同じくらい、しつこい連中ならそういうことはありえる。

しかし、それでも目の前の人間をむざむざ死なせるのは嫌だと才人は考へた。そこで質問を変えた。

「王室は国民から受けは悪かったんですか？」

国民の世論を味方に出来るのなら、王室が巻き返すチャンスはあると思つて言つたが、老執事は苦笑いして言つた。

「確かに、国民、特に平民からは王室に対する不満はありませんでした。しかし、貴族の殆どが反王室に回ってしまったてはどうにもなりません。平民がいくら王制がいいと言つても、メイジには逆らえませんから。」

なるほど、この世界には地球にはないメイジといつ要素があったのを思い出した。

「レコン・キスタは公約として聖地の奪回を掲げております。さらに、貴族による共和制をも公約としております。」

「聖地？」

才人には初耳の単語であった。

「聖地を！」存じないのですか？始祖ブリミルが降りたといわれる地です。現在はエルクが支配している土地で、これまでに何度も各王国が奪回を目指しましたが、成功した試しはありません。その分、多くの人間が奪回を望んでいます。それに王室は反対を唱えた結果、この有様です。」

つまりはキリスト教のエルサレム奪回と、イスラム教との戦いの変形版と才人は理解した。しかし、それ以前に才人は王室には何の落ち度もない事に気付いた。

「それじゃあレコン・キスタの身勝手な目標のために、罪のないアルビオンの王室が潰されるようなものじゃないですか？」

「そうで、」といいます。しかし、他国はこの戦争に非干渉です。聖地

奪回はハルケギニアの誰もが持つ夢でござりますし、たとえ我が国に同情する國も、レコン・キスタが強力であるがゆえに、手を出せないのです。」

「何とも酷い話だ。ようはアルビオンの王室はレコン・キスタの生贊にされるということだ。

「ひでえ話だ。」

そう言つた時、扉が開き、ウェールズとルイズが入ってきた。その瞬間、才人は立ち上がり、ウェールズに向かつて言つた。

「ウェールズ皇太子、トリステインに亡命してください！」

すると、ルイズと老執事はギョッとなつた。1人の使い魔、言つなれば従者とも言える平民が王族に対し意見を言つたのである。

「ちょ、ちょっといきなり何よ才人。殿下に失礼でしょ！！」

ルイズが才人を止めようとすると、才人は続けた。

「ここの爺さんから話は聞いたぜ。この戦争、王室には何の落ち度もないそりゃないか！それなのに、あんたらは死ぬのかよ！…それで良いのかよ！！」

「黙りなさい才人！…」

「いや、かまわない。続けたまえ。」

才人を黙らせようとするルイズを、ウェールズが止めた。

「レコン・キスタはあんたらを潰したらこの国をどうするか考えたことあるのか？俺の世界じゃ沢山の王室が消えたけど、その後には独裁者が生まれたことが結構あつたんだ。そのせいで、多くの罪のない人が泣かされたのも事実なんだ。レコン・キスタがそうならない保証はあるのかよ！」

才人の言葉をウェーラズはじつと聞いていた。

「最後の一兵まで戦つてあんたらが死ねば、あんたらは王室の誇りとともに散つたつてことで満足できるかもしけないけど、その後残された国や国民がどうなるのか、ちょっとは考えてみたらどうなんだ。レコン・キスタが聖地奪回とか始めて、アルビオンの国民がより苦しい事になつたら、あんたはどうするんだい？アルビオンが滅ぶようなことになつたらどうするんだい！」

才人は一通り言い終え、ウェーラズからの返事を待つた。

ウェールズ皇太子（後書き）

ここまで一応原作に沿つた話でありましたが、ここから先は大きく変わります。

御意見・御感想お待ちしています。

ウェーラズの決断

才人の言葉を聞き、表情一つ変えず立っていたウェーラズであったが、すぐに高笑いを始めた。

「 「 「？」」」

「ハハハ・・・みんなよつてたかつて私に生き恥を晒して欲しいらしいな。・・・しかし、それもたまには良いかもしれん。・・・後世の歴史家はなんと評するのかな？皇太子の考えを一平民が変えたことを。」

ウェーラズの言葉に、3人はハッとする、

「殿下、では？」

ルイズの言葉に、ウェーラズは頷いた。

「私は、トリステインに『命じよつと應ひ。』

その言葉に、老執事は泣き始めた。

「殿下・・・よく、よく」決心くださいました。」

才人もルイズも取りあえずホッとした。

そんな中で、ウェーラズは泣きじゃくる老執事に力強く言った。

「そつと決まれば、パリー、泣いている暇はないぞ。一刻を争う。

父上に直ぐに報告せねばならない。それに出発の準備だ！」

「はーーー！」

老執事は直ぐに泣くのをやめ、貴賓室から出て行った。そしてウェールズは才人とルイズの方に向き直った。

「アンリエッタへの手紙は無駄になるかも知れないね。もつとも、私が無事にこの国を出られたらの話だが。」

そう苦笑いするウェールズに、ルイズが言う。

「ウェールズ殿下、かならずや私たちが殿下を無事トリステインに着けるようお守りします。」

「心遣いありがとう、ミス・ヴァリエール。しかしこの付近の制空権は既に敵に握られている。無事その警戒網をすり抜けられるかは、五分五分だ。それに、次の船が出るのは3日後だ。それまでに、私が刺客に殺されるということもありえる。もしかしたら君たちの気持ちを無駄にしてしまうかも知れない。」

すると、才人が言った。

「ウェールズ皇太子。窮屈を我慢できるのでしたら、明日中にトリステインに案内します。」

翌日早朝、才人とルイズを乗せたゼロ戦は、わずかな人々の見送りを受けてニュー・キャッスルから一路トリステインを目指して飛び立つた。

ゼロ戦は名残惜しそうにニュー・キャッスル上空を1回だけ旋回すると、蒼穹の彼方へと消えていった。

後に生存者の証言によれば、この時見送りの中で、侍従長のパリーと近衛師団の服に着替えてやつてきたアルビオン王国国王ジエームズ1世はその機影が見えなくなるまで手を振っていたという。

昼前、トリステイン学院上空に爆音が響いてきた。ゼロ戦の物である。自室にいたコルベールは窓を開けて空を見た。すると、予想通り才人のゼロ戦が近づいてくるのが見えた。

彼はすぐに部屋から出て、城壁外のゼロ戦の格納庫へと向かった。

車輪を降ろし、着陸したゼロ戦は格納庫の前までやつてきたが、

その操縦席を見て「コルベールは少し面食らつた。

なんと才人がルイズを膝の上に乗せて飛んできたのである。確かに才人から一昨日の夜聞いた話では、ルイズを乗せるために後部にスベースを開けたはずである。そこを使つていないと何かを積んできたという事になる。一体何を積んできたのか気になつた。

「コルベール先生。」

ゼロ戦から降りたルイズがまず声を上げた。

「やあミス・ヴァリエール。アルビオンへの旅はどうだったかな?」

すると、ルイズが仰天した。この任務は極秘のはずである。なぜコルベールが知つてているのかと。

「ああ、安心したまえ。実はアンリエッタ姫から昨日オスマン校長と一緒に聞かされたんだ。この事を学院内で知つてるのは校長と私の2人だけだ。」

その言葉に、ルイズは安堵した。

「さ、こっちです。」

丁度その時、才人がゼロ戦のコックピット後ろから1人のフードを被つた人間の手を取つている所だった。

「ミス・ヴァリエール。あのフードを被つた人間は誰かね?」

「すぐにわかります。それよりも、オスマン校長に会いたいのです

が？大丈夫でしょうか？」

「ああ、オスマン校長なら今日は予定もないはずだから、恐らく校長室にいらっしゃるはずだよ。」

「ありがとうございます。」

ルイズは礼を言つと、才人とフードを被つた人間と共に学院内に入つていった。コルベールも気になつてその後を追つた。

数分後、校長室に着いた一行はオスマン校長の前に立つていた。

「お帰り諸君。しかし、アルビオンから帰るそつそつワシの部屋に来るとは意外じゃな、それにその人物は誰かね？」

その言葉に、才人がフードの人物に向かつて言った。

「もうフードを上げて、変装を解いてもらつて良いですよ。」

すると、その人物はフードを上げ、付け髭と鬢をとつた。その顔を見て、コルベールは仰天し、オスマンは予想していたのかニコッと笑つた。

「お初にお目にかかりますオスマン校長。アルビオン王国皇太子のウェールズ・テューダです。」

ウェールズが挨拶をすると、オスマンは立ち上がり彼に近づき、片手を差し出した。

「ようこそトリステイン魔法学院に。校長のオスマンです。」

そして2人は握手した。それが終わると、オスマンはルイズと才人の方へ顔を向けた。

「さて、何故ここにウェールズ王子がいるのかを説明して欲しい。」

才人とルイズはウェールズ皇太子を亡命させるまでの経緯を話した。

「ふむ。じゃが亡命させるにしても、何故王宮ではなくここに連れてきたのかな？」

その質問にルイズが答えた。

「王宮では騒ぎを大きくしてしまったからです。アンリエッタ殿下はまもなくゲルマニアに嫁ぐ予定ですし。それに、レコン・キスタにトリステインへの侵攻の口実を与えるかねません。」

さらに、引き継ぐ形で才人が言った。

「あと、トリステインの王室にも、もしかしたらレコン・キスタ派の人間が混じっているかもしれません。だから安全を考え、ここに連れて来ました。」

「ふむ。で、ワシにどうしろと……と言いたいところじゃが、まあ言いたい事はだいたいわかる。学院でウェールズ皇太子をかくまつて欲しいのじゃろ?」

「そうです。突然のことですいませんが、よろしくお願ひします。」

ルイズが頭を下げた。

「俺からも、お願ひします。」

オ人も頭を下げた。そしてオスマンは直ぐに返答した。

「2人とも頭を上げなさい。ウェールズ皇太子の身柄は責任を持つて我々が守ろう。ミスター・コルベール、異存はないかな？」

コルベールに確認をとる。

「は、私は校長の意見に異存ありません。」

「では、ウェールズ皇太子にはとりあえず補助教員という肩書きでここにいてもらおう。アルビオン時代のような生活は望むべくもないが、それでよろしいかな？」

「もちろんですとも、むしろ命を助けていただいたこちらの方が感謝せねばいけません。どうかアルビオン王国の復興までよろしくお願いします。」

ウェールズはそう言つて頭を下げた。

これが新生アルビオン王国誕生のスタートであった。この3日後、ニュー・キャッスルに立てこもるアルビオン王室軍はレコン・キスター軍の前に全滅した。

ウェールズの決断（後書き）

予告したとおり、この話から大きく歴史が変わります。本来ここで出てくるはずだった才人の仇敵ワルド子爵やキュルケやタバサ、ギーシュといった面々もゼロ戦での高速移動のために活躍の場がなくなってしまいました。一部の方には不快だったかもしれませんのが、このシリーズ、まだまだ続くのでよろしくお願いします。

ニュー・カツスルにおける戦闘でアルビオン王室軍が全滅したといふ報せは、翌日トリステイン王室に伝えられた。

アンリエッタ王女はその報せを臣下から説明されると、体調が優れない事を理由に自室に戻つた。そして、一人悲しみに暮れた。

「ウェールズ様……どうして、どうして亡命なさらなかつたのです。」

彼女がルイズに託した手紙には、ウェールズへ亡命を促す内容が書かれていた。しかし、帰還したルイズから聞かされたのは説得の失敗であつた。そして、彼女はアンリエッタにウェールズからの手紙を手渡した。その内容は、彼女を慕いながら死を目前にしての別れを綴つた物だつた。

無残な現実に打ちひしがれる彼女であつたが、しばらくして窓を叩く何かの存在に気付いた。気になつて近づいてみると、手紙を運んできた伝書フクロウだつた。

「何かしら?」

フクロウの足に結わえられた手紙を読んでみると、差出人は魔法学院のルイズからだつた。緊急で会いたい用があるから学院に来てくれと書かれていた。

こんな時に何の用だらうと思いつつ、緊急であると書かれていたのでとりあえず出向く事にした。

アンリエッタは自分と背丈が似ているメイドに身代わりになるよう頼み、外へ買い物に行く使用人に化けて王宮を出た。ルイズからの手紙には一人で目立たないよう、王宮から少しはなれた場所に来るよう書かれていたからだ。

指示された場所に行くと、一台の馬車が待ち構えていた。

「お待ちしております殿下。」

その馬車で待っていたのは、魔法学院教師のコルベールだった。アンリエッタは彼に面識があつたから直ぐにわかった。

「お乗りください。学院まで」案内します。」

アンリエッタは馬車に乗り込み、学院へと向かった。

学院に付くと、ルイズを使い魔の才人が待ち構えていた。

「殿下、お待ちしていました。」

ルイズが恭しく頭を下げた。

「ルイズ、どうこうことですか?このようにお忍びで来るようそちらから言つなんて。緊急の用つて何ですか?」

すると、ルイズと才人は笑顔になつて言つた。

「姫様、風の塔の最上階の部屋に来ればわかりますよ。」

才人はそう言うとウインクした。アンリエッタはわけがわからぬまま2人に案内されてその部屋と向かった。

部屋の前に着くと、才人がノックした。

「才人です。アンリエッタ殿下をお連れしました。」

「入りました。」

その声を聞いてアンリエッタは心底驚いた。何故なら数時間前、その死の報告を聞いた人物の声そのままだつたからである。

扉が開けられ、その部屋の中に立っている人物の姿を見て、アンリエッタの驚きは歓喜へと変わった。魔法学院の教師が着る服を着てはいるが、その顔は見間違はずがない。

「ウェールズ様！！」

アンリエッタはそのままその人物に抱きついた。その人物は、彼女が愛して止まないアルビオン王国皇太子、ウェールズ・テューダー那人だった。

抱きつかれたウェールズも彼女をしっかりと受け止めた。

「アンリエッタ・・・心配をかけてすまなかつた。」

「良かつた・・・生きてらっしゃったんですね。本当に良かった。」

才人とルイズは所在無さそうにその光景を見ていた。

愛する者同士の抱擁が終わると、アンリエッタは疑問にしていたことを口にした。

「けど、どうして。ルイズは亡命を拒否したと言いましたが。」

「申し訳ありません姫様。実は・・・」

ルイズはここまでこの事を洗いざらい言つた。ウェールズの説得に成功したこと。オスマン校長の協力で彼を学院に匿つたこと。王宮に内通者がいるといけないので虚の報告をして、なおかつウェールズが亡命しなかつた時にアンリエッタに渡すはずだった手紙をそのまま渡したこと。そしてウェールズの死が公表されたのでアンリエッタを呼んだこと。スパイ対策のためにお忍びで来てもらつたこと。

「そうだったのですか。」

アンリエッタはようやく眞実を知り、納得する事が出来た。

「姫様。ウェールズ殿下を守るためとはいえ、姫様に嘘をつき、御心痛を与えてしまったこと、本当に申し訳ありません。いかなる罰でもお与えください。」

ルイズが畏まつてそう言つたが、アンリエッタはいつもの様に微笑んだ。

「ルイズ、あなたには感謝しますが、罰を『えよつとは思いません。本当にありがとうございます。』

「僕としては才人君の働きも大きかつたと言つておこう。彼の説得がなければ亡命には踏み切れなかつただろう。それに、彼の飛行機

械のおかげでアルビオンからレロン・キスタに感づかれる事なくトリストインに亡命できたんだ。」

ウェールズは才人の行いを賞賛した。

「まあ、そうでしたの。ありがとうございます、使い魔さん。本當なら勲章でも与えたいのですが。」

その途端ルイズが前に出た。

「いけません姫様。こんなやつに勲章なんて。」

さらに、才人自身も勲章なんて必要なかつた。

「姫様。その気持ちだけで充分です。俺は勲章なんかいりませんよ。」

その言葉は、アンリエッタから見れば謙虚な姿勢であると見えた。

「いいえ、お2人には本当に感謝の気持ちで一杯です。」

するとアンリエッタは懐から袋を出し、才人に手渡した。

「これはせめてもの気持ちです。お2人でお使いなさい。」

才人に手渡された袋の中身を見てルイズは仰天した。その袋は金貨で満杯になつていた。7・800エキューはありそつだ。

「姫様！..そんな、こんなに…！」

「良いんです。」

ルイズは深々と礼をした。もちろん才人も大金を貰つたので礼をした。

この後、アンリエッタを含めて4人は今後の打ち合わせを行つた。「とにかく、まずは組織作りです。王子様一人だけじゃどうにもなりませんよ。」

「才人君の言うとおりだ。僕としても先に亡命した貴族や、アルビオンに残つた反レコン・キスタ派の貴族に今連絡を取つているところだ。」

ウェールズの言う所では、レコン・キスタに参加している貴族の中には力関係でいやいや参加している者や、反感を抱いている者もいたという。彼はその抱きこみを図つてゐるようだ。

「とにかく今はレコン・キスタに感づかれないことですね。安心してください、私たちが必ず守り通します。」

ルイズが力強く言う。その姿に、アンリエッタも頬もしさを感じた。

「ルイズ、よろしくお願ひします。私も微力ですが、出来うる限りの強力をいたします。」

こうして、方針が決められた。とりあえずしばらくはレコン・キスタに対抗するための組織作り。そしてウェールズが魔法学院に匿われている事を感づかれない事であった。さらに、アンリエッタは

秘密裏に、トリステイン内のレモン・キスタ派の洗い出しを行う事となつた。

御意見・御感想お待ちしています。

曾祖父来る（前書き）

この話からかなり作者の妄想が強くなります。原作派の方はお怒りになるかもしれません、よろしくお願いします。

才人とルイズがトリステインに戻つてから数日後、ルイズの元に一通の手紙が届いた。実家からの物らしかつたが、それを読んだ彼女は一瞬目を見開いた。しかし、直ぐにいつもの表情に戻つた。

その様子を見ていた才人は何か起きたのかと思ったが、追求するのはやめておくことにした。したところで、「使い魔に言つ筋合いなんてないわよー」と怒鳴れるのがオチと思ったからだ。

ちなみに、その手紙の内容を才人が知る事となるのはもつ少し後の事だ。

さらに数日後のこと。その日は丁度虚無の曜日であつた。才人はゼロ戦の格納庫にコルベールとともにいた。この日ルイズは王宮から呼び出しがあつたために出かけている。

「いやあ才人君。すまないね、せつかくの休日に付き合わせてしまつて。」

「良いんです。じつちじつもいつもお世話になつてばかりですから。」

才人の言葉は嘘ではなかつた。彼はこれまでに色々とコルベールに世話になつっていた。特にゼロ戦の燃料の精製は助かつている。

先日アンリエッタ姫からもらつた褒賞金の一部を彼はそのお礼としてコルベールに渡していた。ちなみに、褒賞金はルイズと1対1で折半している。

「しかし本当にこの機械は興味深い。君の世界では随分とこうした分野の技術が進んでいるようだね。」

「コルベールが感心しながら囁つ。

「まあ、魔法がない世界ですから。その代わりとして人間は色々知恵を絞っているんですよ。」

そんな会話をしながら2人はゼロ戦の整備を行っていた。才人の『ガンドールフ』のルーンのおかげで、不調な箇所は直ぐにわかる。もつとも、そのような箇所は滅多に見つからない。なぜならアルビオンに行く前に、コルベールの紹介で土メイジに『固定化』の魔法をかけてもらえたからである。

さすがに燃料が減らなくなるという事はないが、エンジンや機体の部品が劣化したり磨耗したりするという事がなくなつたからその効果は大きい。

作業を続けていると、突然辺りが暗くなつた。

「なんだ？」

才人とコルベールは格納庫から出た。空を見ると、片方の月が太陽に重なつていた。

「どうやら日蝕のようだな。多分直ぐに納まるよ。」

日蝕と聞いて、才人は才吉の話を思い出した。

(もしかして日蝕を通じて地球に帰れるんじゃ？)

しかしすぐにその考えを捨てた。

(まさか。)

そつちの考え方の方が強かつたからだ。もっとも、彼は地球に帰還する方法を考えていなかった。先日何気なくノートパソコンをいじつたら、なんとメール機能が生きていた。才人は駄目元で両親当たりに異世界にいることと、元氣でいることをメールしてみた。もっとも、その後返信はなかつたからどうやら届かなかつたらしい。

閑話休題。まもなく日蝕は終わり、日が再び差してきた。

才人とコルベールは格納庫に入り、再びゼロ戦の整備を開始しようとした。その時であつた。上空から突如爆音が響いてきた。それも3つ。

一つはゼロ戦と同じような音で、一つはそれよりも小さな感じのプロペラ音、さらにもう一つはそれとは違ったバタバタ・・・という特徴的な音であつた。そしてその両方共に才人は聞き覚えがあつた。

「まさか！？」

才人は慌てて格納庫から出て空を仰いだ。そしてそこで信じられない物を見てしまつた。そこには3つの空飛ぶ影があつたからだ。一つはシルエットからしてゼロ戦だ。さらに、その後ろを飛んでいるのは種類はわからないが双発の小型レシプロ機だ。そしてもう一機は軍用ヘリコプターだ。

「UH-60」じゃねえか！？」

1回叫んで、その後才人は絶句してしまった。どうしてハルケギニアに地球の飛行機が3機も現れたか全くもつて理解できなかつた。

「才人君、あれは？」

コルベールも訳がわからないという風に見ている。

「俺の世界の飛行機とヘリコプターです。でもどうして？」

とりあえず才人は上空に向けて大きく手を振つた。もしかしたら氣付いてくれるかもしれないと思ったからだ。

すると、まずゼロ戦が高度を落として降りてきた。才人の乗つている21型ではなく、濃緑色の機体と少し短い翼の形からして後期タイプの52型だ。

そのゼロ戦は綺麗に着陸すると、そのまま才人の前まで滑走して止まつた。そして風防が開き、パイロットの姿が見えた。パイロットは才人の方を振り向くと、直ぐに声を掛けて来た。

「よう才人、久しぶりだなー！」

「えー曾爺ちゃんー？」

才人は腰をぬかさんばかりに驚いた。なんと操縦していたのは、こちらに召喚される直前まで目の前にいた平賀才吉その人だつたらである。

「そんな、どうして…？」

「ひつひつひひひの世界に辿り着けたのかまつたくわからぬ。」

オ吉は「ラクピットから降りるとすぐにオ人のそばにやつて来た。

「こやあ良かつた。いきなり消えたときほんづなつたか心配したが、元気そうでなによりだ。」

「それよつも曾爺ちやん、びつやつひひせんひせつてきたんだー！？」

オ人は叫んだ。それが一番気になる所である。

「うふ？ いやちゅうじ回りついで口蝕が起きてな。もしかしたらお前が言つてきた異世界にまた出られるかもしれないと思つてな。まさかひつも簡単にお前を見つけられるとは思わなかつたぜ。老体に鞭打つて飛んだかいがあつたつていうもんだけ。」

ひつひつ笑うオ吉。

「メールは届いてたんだ・・・けど、ならなんで返信をくれなかつたのや？ それにこのゼロ戦はどうしたんだよ？」

オ人はゼロ戦を指を立てて言つ。

「返信するよりも先に助けに行つてみようか」とになつてな。ゼロ戦は有り金全部はたいて作り直した。」

「有り金全部つて・・・」

ようは大博打を打つたわけだ。もし見つけられなかつたらどうするつもりだつたんだろうと、目の前の曾祖父の考えに少し啞然とする才人。

だが、今はその事に構つてゐる暇はない。

「それで、あの2機は何？」

才人は空中で旋回してゐる2機を指差した。

「ああ、軽飛行機の方はお前の知つてゐる人間が乗つてゐる。ヘリの方は何時の間にか付いてきてたんだ。とにかく2機とも着陸させよう。」

そう言つと、才吉はゼロ戦に戻つて無線交信を始めた。1分ほどして、まず軽飛行機が降りてきた。さらに、少し遅れてヘリの方も降りてきた。

そして、軽飛行機が着陸して中から出てきた人間を見て、才人は再び絶叫した。

「父さんに母さん！？？」

曾祖父来る（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

悩み

軽飛行機から降りてきたのは、間違いなく才人の父親の才助と瑞江だ。何週間ぶりにあつ両親であるが、今の才人には再会できた喜びよりも、どうしてここに来たのかといつ驚きと疑問のほうが大きかつた。

「父さんに、母さん……どうして！？」

才人の目の前に来た2人に向けて最初に才人が言つた言葉である。

「おいおい。数週間ぶりの再会なのに喜びもせずその言葉かよ。」セリフ

才助が苦笑いしながら言つ。

「うちはあんたが行方不明になつてから随分と心配したのよ。けどまあ、元気そうで良かった。」

瑞江の方は行方不明になつた息子が元氣でいてくれたことに、素直に喜んだ。

「うめん。けど、どうやって2人とも来たの？」

その疑問に才助が答えた。

「お前からのメールを見てな。丁度日蝕も近かつたから、もしかしたらに賭けたんだ。いやあ賭けが成功して良かつたよ。中古とはいえ飛行機を手に入れたかいがあたつていうもんだ。」

そう言って才助は微笑んだ。

「けど戻るのはどうするんだよ？日蝕は次何時起るかわからないんだぜ！」

才人の言葉に、才助は楽天的な意見を述べた。

「なあに。戻れなかつたら戻れなかつただよ。人間なんとか生きていくわ。」

「親子3人また一緒に暮らせるならビヨンでもいいわよ。」

そう言って笑う2人に才人は、先ほどの才吉の時と同様啞然とします。訳のわからない異世界にやつて来て、よくそんなポジティブな意見を言えたものだと。

「もういいや。あと、あの自衛隊のヘリはビヨンしたんだよ？」

才人は着陸したUH-60Jヘリを指差した。

「あれか？ あれはな、気づいたら何時の間にか付いて来てたんだ。」

才助がそつけなく言った。その後才助が説明した所によると、地球を出発した時は確かにいなかつたが、日蝕に入つて次の瞬間こっちの世界に出たときには後ろにいたと言ひ。

才助も才吉も、瑞江もなんでついてきたのかわからないらしい。そつしている内に、そのへりのパイロット2人が走ってきた。陸上自衛隊のパイロットスーツに身を包んでいた。

2人は才人たちの前に来ると、ピシッと敬礼をして名乗った。

「陸上自衛隊西部方面軍第一ヘリコプター隊の清水一尉です。」

「同じく山田二尉です。」

「お二人はどうしてここに？」

才人が訊ねると、清水一尉が説明してくれた。

「自分たちは演習参加のために陸上自衛隊、大津駐屯地へ必要物資を運搬していました。そしたらいきなり日蝕が起きて、そのまま突っ込んでしまいました。それで気付いたらここにいたわけです。一体ここはどこですか？日本でないのはわかりますけど。」

「おおそうだ、才人、俺たちにも説明してくれ。」

「ええと、『ルベール先生。』

才人は今まで蚊帳の外に置かれていたルベールを呼んだ。

「ちょっと、この世界について一緒に説明してください。」

才人はここが地球ではないハルケギニアという異世界であること、自分が魔法使いの使い魔として召喚された事等を説明した。もつとも、口だけでは5人とも実感がわかなかったらしいので、才人は最後に付け加えた。

「まあ夜になればいやでも実感できるよ。」

こうして、ハルケギニアでの平賀一家の新たなる生活がスタートしたわけである。もつとも、才人にとっては問題だらけの頭のないことではあったが。

さて、頭が痛い状況に立たされていたのは何も才人だけではなかった。内戦がとりあえず終了したアルビオンでは、レコン・キスターの長にして神聖アルビオン共和国皇帝に就任したクロムウェルが頭を抱えていた。

「まさかウェールズを逃がしてしまったは・・・」

ニュー・カッスルにおける戦闘が終了した後、死体の確認や残された宝石や武器類の回収作業が行われた。ところが、ついにウェールズ皇太子の死体だけは見つからなかつたのである。さらに、貴族の死体も予想以上に少なかつた。

その真相は、情報収集のためにわざと生かして捕らえた捕虜の口からもたらされた。それによると、ウェールズは戦闘の3日前、さ

らに見つかっていない貴族は1日前、それぞれ脱出していったという。特にウェールズの方は船ではなく、見たこともない鉄の竜を使っていたといったのだ。

その後、トリステイン内においてレロン・キスタ派の洗い出し作業が始まっているという情報が入ってきたことから、ウェールズがトリステインに潜んでいる可能性が高い。しかし、その場所までは特定できなかつた。

「あの王子は一体どこに隠れたのだ？・・・それに加えて、行方不明の貴族の動きも気になる。」

死亡が確認できなかつた行方不明の貴族の多くが、いずれも若く将来有望視されていた者ばかりであつたということも、大きな問題であつた。恐らく連中はアルビオン王室政府を再組織し、アルビオンの奪回に動くに違いないとクロムウェルは予想した。時期はわからぬが、必ずそうするのは確実と言えた。

さらに、国内の貴族にもレコン・キスタに反攻こそしないが快く思つていらない連中は大勢いた。もしその連中と結託したらと考えると、予想もしたくない結果になりそうであつた。

「トリステインへの侵攻を急ぐ必要がありそうだ。」

彼はそう呟いた。

そしてもう1人頭を抱えているのは・・・

「どうしよう。」

ルイズであった。彼女の目の前には一冊の書物が置かれていた。
『始祖の祈祷書』である。

トリステイン王家のしきたりでは結婚式の時、この『始祖の祈祷書』を貴族から選ばれた巫女が持つて、詔を読むのが慣例とされていた。今回その重役をアンリエッタは親友のルイズに依頼してきたのだ。

先ほどこの『始祖の祈祷書』をオスマン校長より受け取り、その事を伝えられたルイズであるが、その詔を彼女自身が考へなればいけないのが大きな問題であった。なにせ国同士の結婚式という重要な場で読むのだ、相当上手い文句でなければならぬ。しかし、そんな文句は簡単に思い浮かばない。

さらに、ルイズはあることを知っていた。それはウェールズとアンリエッタが愛し合っている事であり、さらにアンリエッタが今回の結婚をしたくないことである。その二つがルイズの心に大きなもやもやを発生させ、考える気力を奪っていた。

「祝いたくもない結婚式の詔を書けといわれてもね・・・

そう呟いて机に突っ伏した。彼女の悩みも深かった。

悩み（後書き）

御意見・御感想、アイデアなどをお待ちしています。

乙女の戦い

両親に曾祖父、さらには無関係の自衛官2人がハルケギニアに来てしまったために、才人は頭を悩ませた。なにせ、この世界には彼らの生活基盤がないのだ。

取りあえずオスマン校長に掛け合つて、使ってない部屋を彼らの当座の居室として使用させてもらうことが許可された。ただし、自衛官の2人は「装備を守る必要がありますので。」と言って、ヘリの中に寝袋を引いて寝てしまった。まあこれは本人たちの意思であるので仕方がない。

ちなみに、生徒や教師達には才人の家族たちで、一時的に滞在すると説明しておいた。もちろん、皆怪訝な表情をしたが、オスマン校長のお墨付きであつたので、文句は言われずに済んだ。

次に生活費を稼がなければいけない。最も、5人ともこのことはしっかりと理解してくれたらしく、母親の瑞江は遅早く食堂の手伝いの仕事を見つけてきて、翌日にはせっせと仕事を始めている。

残る4人については、そう簡単に職につけるとは才人は考えていなかつたが、これもオスマン校長が手を回してなんとかしてくれた。そのおかげで4人は全員ゴルベールの助手ということで、トリステイン魔法学院の職員の職を得る事が出来た。

こうして、才人の頭を悩ませた問題は比較的短期間で消滅した。

一方で、今回両親が来てくれたことで、才人にとっては嬉しい事も多々あった。才助と瑞江の2人は乗ってきた軽飛行機に積めるだ

けの生活物資を乗せていたのである。そのおかげで才人は1か月ぶりに米と、インスタントとはいえ味噌汁にありつくことが出来た。

また、自家発電機も積んでいたために、パソコンの充電も可能になつた。もつとも、これを重宝したのは才人よりも才吉であつた。才人にしてみればインターネットが使えない（ただしメールのみは何故か使えた。）のでは動いても意味がなかつたからだ。一方、才吉にとつてはコルベールの研究を補助するさいに必要な計算式などを出すのに大いに役立てた。

その他に、才吉は向こうの世界に残つた知人にメールを送つて、簡単なモーター・やエンジン等の設計図を送つてもらつたりもした。このおかげで、後々ハルケギニアに大いに影響を与えることとなるが、それは別の話である。

一方、才人の両親出現のニュースで大いに喜んだのが、メイドのシエスタだつた。彼は才人に随分と熱を上げているのであるが、ここで才人の両親に自分を売り込んで既成事実を作ろうと画策したようだ。

「才人さんのハートをゲットして、さらにお父様とお母様に認めてもらえば・・・」

もちろん、その希望（野望？）はすぐにルイズの耳にする所となつた。それなりに才人に惹かれていた彼女に何の影響も与えないはずがなかつた。案の定、

「あんのメイド、私の使い魔どころかその親にまで媚を賣るとは・・・いい度胸しているわね！――！」

彼女がそう言つて目をひん剥き、叫んだのは当然といえば当然だつた。彼女自身は才人の両親が現れたときは、簡単な挨拶をしただけであまり重要視しなかつたが、シエスタに遅れる事2日遅れで色々と工作を開始しようとしたわけであるが、彼女の工作は不発で終わる事となる。なぜならそれどころではない事が起きたからだ。

その日、ルイズは才人とともにウェールズに呼び出された。

「アルビオンからの連絡では、近々アルビオン、正確にはレコン・キスターはトリステインに戦争を仕掛けるらしい。」

その言葉に、2人とも顔を見合せた。

「それは確実なのですか？」

ルイズが念のために聞いた。

「複数の人間から同様の報告が来ているから間違いないと思う。恐らく1か月以内には侵攻してくるだろう。そのためにはアルビオンの空軍工廠では突貫で艦艇の整備を急いでいるそうだ。既に、この情報はアンリエッタにも伝えた。もつとも、伝えててもトリステインに取れる策はあまりないとと思うが。どうしたものか・・・」

ウェールズの表情は苦渋に満ちていた。

才人はウェールズの部屋から出ると、ルイズに聞いた。

「アルビオン軍ってそんなに強いの？」

「ええ。空軍力はトリステインの数倍よ。それに、竜騎士団の勇猛さと強さはハルケギニア随一と言われているわ。恐らくトリステインが今持っている力じゃ太刀打ちできないわ。」

ルイズは悔しそうに言った。認めたくないがそれが事実であったからだ。

2人は重い空気を背負ったままルイズの部屋まで戻った。すると、予想外の人物が待ち構えていた。

「才人さん。」

「あ、シエスタ。どうしたの一体？」

部屋の前で待っていたのはメイドのシエスタだった。すると、ルイズの表情が途端に険しくなる。

「あら、あなた一体何の用？メイドがこんな所で待っているなんて、よっぽど暇みたいね。」

その声にはあからさまに怒氣と敵意が含まれていた。しかしシエスタは全く意に介さず、ルイズに向かって言った。

「別にミス・ヴァリエールなんかには関係ないことですわ。あ、失礼。」

謝るもの、全く誠意がない。もちろんシエスタは故意にそうしたのだろう。それは彼女の顔を見ればよくわかることだった。ルイ

ズの怒りのメーターが大きく上昇する。

(やばい!!)

才人は危険を察知した。このままでは、2人がマジの乱闘を始めかねない。才人は慌てて仲裁に入った。

「やめろ2人とも!!廊下で喧嘩するなんてはしたないぞ!!」

この言葉に、2人は少しばかり頭を冷やす。

「そうね、貴族の私が平民のメイド相手に手なんか出した所で一文の得もないわね。」

「確かに、今ここでは周りの方に迷惑をお掛けしますね。」

(今ここじゃなかつたら乱闘する気か!?)

と心の中で呟くが、口には出さない才人。

「で、シエスタ何か用?」

才人は話を本題に戻した。

「はい。実は明日から姫様のご結婚を記念して特別休暇が出されることになったんです。そこで、この機会に才人さんに私の故郷を案内しようと思つて。」

その言葉に、ルイズが噛み付いた。

「はああ！－なんで才人があんたの故郷なんかを案内されなきゃならないのよ－？」

ルイズが怒り狂うが、シェスタはそれをスルーして才人の腕に自分の腕を絡めた。

「才人さんどうせ暇なんでしょ？なんなら『両親と一緒に来てもらつても良いんですよ。・・・そしてそのままゴーリン。』

最後は小声であったが、ルイズは聞き逃さなかつた。

「そんなの絶対許さないんだから！－才人は私の使い魔なのよ！－私の側にいる義務があるのよ！－あんたの自由になんかさせないんだから！－！」

マジ切れするルイズ。しかしシェスタは勝ち誇った顔をして言った。

「魔法の使えない貴族なんて恐るるに足りませんわ。」
「なんですって！－」

一番言われたくない事を言われ、鬼神のごとく怒り狂うルイズを見つづ、才人は必死に妥協案を考える。そしてそれを口にした。

「落ち着けよルイズ！－・俺としてはシェスタの故郷は見てみたいと思つ。」

するとシェスタが勝ち誇つた顔をした。逆にルイズの怒りはさら大きくなつた。

「まあ。」

「「」の犬！！」

「けど、確かにルイズからあまりに離れるのも使い魔としてどうかと思う。だから、お前も付いてこれば良いじゃん。どうせ姫様の結婚式までは余裕もあるし。」

その妥協案にシェスタは苦虫を潰したような顔になつたが、ルイズの方は幾ばくか機嫌を直した。

「まああんたがそういうならそつしてあげなくもないわね。2・3日なら授業を休んでも大丈夫だし、それにちょっと外に出たかったし。いいわよ。」

こうして、ルイズVSシェスタのマジな戦いは才人の調停によつて終結した。

翌日、才人はルイズ、シェスタ、両親に才吉の5人でシェスタの故郷であるタルブの村に向かつた。

乙女の戦い（後書き）

御意見・御感想、作者への要請などお待ちしています。

タルブ村

タルブの村へは、折角なので才助たちが乗ってきた双発の軽飛行機が使っていく事にした。複数の人数が乗れて、航続距離も往復するのに充分だったからだ。

「うわあーすごいですね。空から地上を眺めるところな風に見えるんですね。」

シエスタは飛行を開始してからずっと騒ぎっぱなしであった。まあ一度も空を飛んだことがないのだから、その感動は相当大きい物であろう。

一方で、ルイズは不機嫌な表情で彼女を見ていた。彼女が才人に手出ししないか警戒しているのだ。

その様子を才人は困り果てた表情で見つめていた。対照的に母親の瑞江は楽しそうにその光景を見ていた。それを訝しがって才人が瑞江に尋ねた。

「母さん。なんでそんな楽しそうにしているのさ?」

すると、瑞江は笑みを絶やさずに言つ。

「そりゃあんた、あんたを2人の可愛い女の子が奪い合おうとしているんだよ。これは親にとっちゃ重要な事よ。なにせ、もしかしたら2人の内のどちらかが義娘になってくれるかもしれないからね。」

その言葉に、才人は顔を真っ赤にした。

「か、母さん。俺2人とはそんな関係じゃないぜ！！」

ルイズとシエスタには聞こえないようにしつつも、母親に抗議する才人。しかし、瑞江は表情を変えずに言い返した。

「今はでしょ？」

その言葉に、才人は反論する気力を失う。この人には何を言っても無駄だと。

「はああ・・・女に絡む問題がこんな複雑なもんだとは思わなかつたぜ。」

彼の溜息は日本海溝よりも深そうであった。

そんなこんなで、魔法学院を出発してから約3時間で目的地のタルブ村に到着した。

シエスタの故郷であるタルブ村は緑が豊かな森が近くにあり、色とりどりの花々が咲き誇る草原が広がる美しい場所だった。その草原の中で比較的平坦な場所を見つけて、軽飛行機は着陸した。そこは村からもそう離れていない丁度良い場所だった。

タルブ村の住人は、突然空から現れた珍客に驚いたものの、シエスタの姿を認めて安堵するという場面もあった。

タルブについた一行はシエスタの家に招かれ盛大に歓迎された。特に、才人はシエスタの両親や兄弟がどう教えられたのかわからぬが、やたらと厚遇された。もちろん、それはルイズの神経を逆な

する行為であったことは間違いなかつたが。

翌日、才人はシエスタから妙な話を聞いた。

「竜の羽衣？」

「ええ、私たちの村に伝わる一種の宝物です。私の曾おじいさんはそれを纏つて空から現れたと言われています。なんなら見に行つてみます？」

その『竜の羽衣』なる物体が何であるかわからないが、才人は空から現れたという部分に興味を引かれた。もしかしたらという予感が頭をよぎつた。

「わしも付いて行つて良いかな？」

才吉が話に割り込んできたが、シエスタは嫌がる様子もなく、「はい、どうぞ」と言った。

シエスタを案内役に、才人、才吉、さらに付いて行くと言い出したルイズの4人がその村はずれの『竜の羽衣』がある場所へと向かつた。

ところが、その場所に着いて、才人と才吉は仰天してしまつた。

「なあ爺ちゃん・・・もしかしてこれつて・・・」

その言葉に、才吉は頷いた。

「ああ、ワシの田^だがおかしくなつていなければ、これほど見ても神社だ。」

『竜の羽衣』が安置されているというその寺院は、才人や才吉からすれば地球で見慣れた神社の形そっくりだった。2人は急いで中に入った。そして、そこに鎮座する『竜の羽衣』を見て絶句した。

「そんな・・・ゼロ戦！？ビリして！？」

才人がうめくよつに言つた。

そこには、間違ひなくゼロ戦だった。才人が使つてゐる21型ではない。濃緑色の塗装、加速性能を高めるために採用された単排氣管、長銃身の20mm機関銃。才吉がこちらの世界に来るとき持つてきた52型だ。そのノタイプである。

部隊のパーソナルマークだらうか、機首には白い文字で辰の文字が刻まれてゐる。

それを見て、才人以上に驚いてゐる人物がいた。才吉である。

「まさか・・・」

彼は機体の後部に回つた。尾翼のマークを見るためだ。そこに書かれていたのは、YD-136。Yは海軍横須賀鎮守府。Dはディフェンスの意味である。このマークをつけていたのは、終戦まで関東上空の防空戦闘を受けた海軍厚木航空隊の物である。

その部隊は、紛れも無く才吉が60年前に戦つていた部隊だ。そ

してその機番号は彼にとつて忘れる事の出来ない物だつた。

「佐々木の・・・佐々木武雄少尉の機体だ！間違いない、あの日日蝕に消えた佐々木の機体だ！！」

才吉はシエスタに詰め寄つた。

「君の曾おじいさんはこれに乗つてきたといったね。彼は、佐々木はどうなつたんだね！？」

今まで蚊帳の外に置かれていて、いきなり詰め寄られたシエスタは少し答えに窮したが、直ぐに冷静になると答えた。

「曾おじいさんは5年前に亡くなりました。」

その言葉を聞いて、才吉は力なくうな垂れた。

「そうか・・・あいつは先に逝つたのか・・・すまないが、彼の墓に案内してもらえないかな？」

シエスタは3人を村の共同墓地にある、曾祖父の墓に案内した。

その墓石はやはり日本で見慣れた形の物だつた。正面に書かれている文字はハルケギニアの文字であるが、側面に書かれていたのは紛れもなく日本語だつた。

その文字を、才人が読む。

「海軍少尉、佐々木武雄、異界に眠る。」

墓石に向かつて、才吉はピシッと日本海軍式の敬礼を行つた。才人もそれに倣つて同様に敬礼した。

「曾おじいちゃんは故郷の事については何も喋つてくれませんでした。ただこの文字を読めた者に『竜の羽衣』を託すと、そして陛下にお返しして欲しいと言い残したそうです。陛下つてどこの陛下でしょうか？」

シェスターが聞くと、才吉が答えた。

「天皇陛下だ。ワシらの國の王様だ。もつとも、こいつが返そうとした昭和天皇はもう20年近く前に崩御してしまったがね・・・あいつは死ぬまで戦争を戦つていたんだな。・・・佐々木、戦争は終わつたんだ。これでようやくお前の戦争も終わりだ。地球に連れて帰ることは出来んが、ゆっくり眠つてくれ。」

そして才吉はそう言って、涙をこぼした。

タルフ村（後書き）

御意見・御感想・要請などお待ちしております。

墓参りを終えた才人と才吉は一端シエスタの家に戻った。そこで、亡き佐々木少尉の唯一の遺品を見せられた。

「曾おじいさんは日記も何も残していないくて、唯一の遺品がこれです。家人間は全く何のために使うものかわからなくて。」

シエスタから見せられたのは、旧海軍のパイロット用ゴーグルだつた。ゼロ戦のほうは固定化の魔法がかけられていて新品同然で残っていたが、こちらは大分くたびれている。それでも原型は保っていた。

才吉はそれをじっと見て、目を瞑つた。恐らくかつての戦友との青春を思い出しているのだろう。

「あいつは、こちらでそれなりに幸せに生きれたようだな。ちゃんと子孫を、自分が生きた証しをしつかり残したのだから。」

才吉がしみじみと言つ。

「お爺さんは、私たちには自分の故郷のことや、故郷に戻りたいことも一度も言わずに死にました。でも、もしかしたらそうであつたのかもしれません。92まで長生きしましたし。」

その言葉に、才人と才吉がギョッとした。

「92だつて？」

「はい、そうですが。何か？」

シエスタが才人に向けて困惑の表情をする。

「曾爺ちゃんつて今85だよね。それでシエスタの曾爺ちゃんとは
同じ年のはずだろ、なんできてるんだ?」

才人の疑問はもつともな物だった。すると、才吉がある仮説を建
てた。

「もしかしたら、こちらへ移動するときに同時にタイムスリップを
したのかもしけんな・・・まあこれはしつかり調べてみないとわ
からないがな。」

これについて謎が解明されるのは、もう少し後のことになる。

翌日、このまま休暇でタルブの村に残るシエスタと別れ、才人た
ちは魔法学院への帰路についた。ゼロ戦は取りあえず引き取る事に
はしたが、今は運搬手段がないために後日運ぶ事にした。

そして魔法学院に着いた才人とルイズはウェールズから想いもが
けない事態を聞かされた。

「アンリエッタ姫の結婚が延期?どういうことですか!?」

ルイズが突然の事態に驚きを隠さず、ウェールズに詰め寄った。

「昨日ゲルマニアからトリステイン王室に使いが来てそう通告したらしい。ゲルマニアは昨今の外交情勢に対して自国内で処理する問題が多く、その処理のために結婚式を開く余裕がないと言つたそうだ。」

「まったく！…やっぱりあんな成り上がりの国を信頼するべきじゃなかつたのよ！…」

子供のころからゲルマニアを毛嫌いしているルイズはそうゲルマニアを罵つた。すると、突然後ろから声がした。

「果たしてゲルマニアだけの問題かな？」

3人の目がその声がした方に向けられる。そこに立っていたのは才吉だつた。ちなみに、才吉とウェールズはすでに才人が紹介しているので面識がある。

「曾爺ちゃん。何時の間に？」

「扉の鍵が開いてて、ノックしても返事がないから勝手に入らせてもらつた。で、話の続きだがもしかしたら今回の結婚延期はゲルマニア以外の国の横槍かもしけないぞ。才人だつて戦史をそれなりに知つているんだ。そういうことが外交戦術でありえることぐらいわかるだろ？」

意味深げに言う才吉。それに対し、才人もすこしづかり思案する。また、それを見ていたウェールズも顎に手をあて考え込む。ルイズだけは意味不明とばかりに一人蚊帳の外状態だ。

「つまり、あなたは今回の結婚延期がレコン・キスタによる工作活

動の結果であると言いたいのですか？」

ウェールズが才吉に問いただした。

「その可能性があるかもしないとだけ言っておきましょう。しかしながら、もしかしたらそれ以上の問題かもしません。」

「など？」

すると、今度は才人が言った。

「つまり、曾爺ちゃんは日中戦争みたいな構図を言いたいわけだ。」

そう言うと、才吉はやりと笑った。一方、訳がわからないのはウェールズとルイズだ。

「「日中戦争！？」」

「ああ。日中戦争って言つのはだな。」

才人は2人に簡潔に話してやつた。日中戦争とはもちろん日本と中国が戦つた戦争のことだ。日本が大陸における霸権と資源を得るために戦つた戦争であつたが、その背後には中国での権益獲得を狙うアメリカやソ連という大国の影が見え隠れしていた。

そしてこの戦争の結果は当事国の日本が最終的に世界中を敵に回して敗北、中国も勝つたには勝つたが国内がボロボロになってしまい、逆に背後から窺つていたアメリカとソ連は中国に対して大きな影響力を獲得した。

その内容を才人は簡潔に2人に説明した。

外交を仕事にしているウェーラズは「なるほど。」と頷いたが、ルイズの方は「だからそれが一体何?」という顔をしていた。

「だから、つまりそれを今のハルケギニアに置き換えるんだよ。正確にはトリステインとゲルマニアが共同して戦うなら一つとなつて日本。それと戦うアルビオン、正確にはレコン・キスタが中国つて考えるんだ。まあ逆でも良いけど、そうなると、アメリカとソ連のコマが余るだろ?それを当てはめてみろよ。」

すると、ルイズは少し思案して頷いた。

「まさか、ガリアにロマリア!？」

すると才人は真剣な表情になつて小さく頷いた。

「そうかもしだれないしそうじゃないかもしだれない。あくまで仮説だよ。」

「け、けど才人。いくらなんでもそんなこと有利得るのかしら?」

ルイズは半信半疑だった。すると、才吉が言つた。

「ルイズさん。国際外交って言つのは上つ面じやどこの国も正当な手続きを踏んで活動しているが、裏じや自国の利益のために色々汚い事をするもんなんだ。綺麗事だけでは生きていけないのが国際社会つてもんだよ。」

その言葉に、才人は頷き、ウェーラズも賛同した。

「あなたの言う通りだ。もつとも、今はとてもそこまで調べるまでには手が回らないのですがね。田先の戦争をなんとかする方が先決ですよ。」

「まあそうでしょうね。おお、そうじゃった。それで才人を呼びに着たんじゃった。」

「俺？ 一体何の用？」

才人には才吉に呼び出される覚えはない。

「実はな、零戦に搭載する兵器が機銃だけじゃ火力不足だからな。そこで新兵器をコルベールさんとともに開発したんじゃ。それを見に来てほしかつたんじゃった。」

新兵器と聞いて才人は気になった。

「新兵器？ 爆弾でも作ったの？」

ゼロ戦には胴体の下に250kg、片翼に1発ずつの60kgの爆弾が吊るせるよう設計されている。才人は才吉がその爆弾を開発したのかと思った。

「それよりもっとおもしろいぞ。とにかく付いて来い！！」

才人は才吉に引っ張られてコルベールの研究室に向かった。

背後の影（後書き）

御意見・御感想・御要請お待ちしております。

才人が才吉に連れられる形でコルベールの研究室を訪れると、コルベールが出迎えてくれた。

「おお、才人君。待つていたぞ。今回はあの飛行機に積む新兵器を開発したのだが、是非とも君に見て欲しくてね。」

「コニコニ顔で話すコルベール。

「先生、曾爺ちやんと組んで一体どんな新兵器を開発したんですか？」

「それはこれだよ。」

彼が見せてくれたのは、細長い円筒形の物体であった。才人が思つたのは、それは口ケットに似ていることであった。

「何ですかそれ？もしかしてミサイルですか？」

すると、コルベールは少し顔をしかめた。

「ううん・・・君の言ひ方サイルがどういう物か知らないから何とも言えないが、才吉ちゃんの話では口ケットと言つ物だそうだ。」

やつぱつ口ケットの一 種のよつだ。

「まあとにかく、これは空中を炎を引いて飛んでいくて、当たつた物を破壊する兵器だよ。」

「コルベールの説明に捕捉をするように才吉が続けた。

「まあ言つなれば無誘導型の空対地、空対艦ロケットだな。」

その説明でようやく才人は目の前の物体の中身を把握した。無誘導の打ちっぱなし式のロケットは第二次世界大戦の時に、ソ連やアメリカが多用した兵器だ。主に対地攻撃に使われ、地上目標や艦船相手にその効果を發揮している。

「ジャイロも何もないからちゃんと直線に飛んでいくわけではないが、それでも木造の船相手ならこれで充分過ぎる程の効力を發揮するはずだ。さすがに機銃だけじゃ火力不足だからな。」

才吉が得意げに言つ。

「いやあしかし、本当に地球という星の学問は進んでいるようだね。火薬の燃焼効率や速く飛ぶためにロケットの形をどのように設計するのかなど、とてもハルケギニアでは追いつきようのないレベルだ！すばらしいの一言だよ！…」

コルベールは地球の科学技術をべた褒めした。まあ実際大目に見ても300年近くの科学技術の差があるので、当然といえば当然といえる。

「で、これをゼロ戦に装備するわけ？」

「まあそいつ言つことだな。一基あたりの重さがおよそ60kgじゃから、片方の主翼に2発ずつは積めるな。ちなみに弾頭は焼夷弾と榴弾じやから、艦船攻撃にも対地攻撃にも使えるぞ。」

焼夷弾とは、文字通り当たつた相手を内部に詰まつた薬品などで焼く種類の弾だ。榴弾とは爆風と破片で相手を破壊する武器の事である。

と、そこで才人はあることが気になった。

「けど曾爺ちゃん。これって信管はつこしてるとかよ？当たつてちゃんと爆発しなきゃ意味ないぜ。」

信管とは爆弾や魚雷などに付いている、衝撃などで炸薬を爆発させる装置のことだ。確かハルケギニアの大砲は丸い鉄球を撃ち出すだけの物である。1800年代以降に広まつたドングリ型で信管がついた砲弾はまだ登場していない。つまり、ハルケギニアには信管を作る技術はないのである。

しかし、才吉はこう言った。

「もちろんあるぞ。」

それは予想外の答えだった。

「えー！どうやって作ったんだよ？」

「もちろん地球から取り寄せた設計図を元に作ったんじゃ。この世界でも腕のいい金属加工職人なんかはいるからな。細かい部品はそういう人間に頼んだ。とても量産なんかは出来ないが、どうせゼロ戦は2機しかないんじやから、それに積む分を作るだけなら充分だ。

「

そう言つて嬉嬉といつ曾祖父に、少しばかり呆れる才人。

「よくそんなところまで頭回るね。けど、資金はどうしたんだよ？
ゴルベール先生だってそんな金持ちじゃないんだぜ。」

すると、ゴルベールが笑いながら話した。

「安心したまえ才人君。この兵器の開発資金はウェーラーズ皇太子が出してくれている。それにトリスティン空軍へも買取を打診している所だ。」

その言葉に、才人はあらためて曾祖父の強かさを思い知らされた。

（何時のためにウェーラーズ王子に協力を取り付けたんだこの爺さんは？）

「しかし、やはり地球から部品を取り寄せられれば言つ事ないんだがな。」

そう言つて才吉は苦笑した。科学技術の劣るハルケギニアでは同じ部品を作つても品質が劣つてしまつ。もっとも、地球より優れている部分も多々あるのも事実だ。特に魔法による医療技術や鍊金技術はその筆頭である。

閑話休題。

「けど爺ちゃん。向こうに行くには日蝕が起きなきやいけないんだぜ。」

そう、地球に行きたくても現在の所わかつてゐるのは日蝕を抜け

ていく事だけ。しかも佐々木少尉の事例から見ると、それさえも時間を超えて全く違う年代に出る危険性もあるのだ。

「やうじゅ。じゅが向こうでもしばらくは日蝕はしばらく起きやうにないと才蔵は言つておったからな。しばらくは望み薄じゅな。」

才蔵とは才吉の息子で、才人の祖父のことだ。彼は向こうの世界からメールでこちらに色々と情報を寄越してくれている。

「なんか他に方法はないのかな？小説だと台風とか嵐に突っ込んだり異次元に飛んでいたなんて設定が良くあるのに。」

「バカ言つんじゅない。台風や嵐なんかでは飛行機ではバラバラになつてしまつぞ。例え本当に行けるとしてもとてもやれる物じゅないぞ。」

「だよな。」

才吉に否定され少々がっかりする才人。

すると、マルベルが言つた。

「素人考えですが、日蝕で通つていけるのなら月蝕、もしくは月が隠れてしまう新月でも行けるのでは？」

その言葉に、才人と才吉はハツとする。

「先生、ハルケギニアでも月蝕は起こるのですか？」

才吉が訊ねた。

「ええ、起こります。けど、月蝕の場合は回数は日蝕よりも多いとは言え、次がいつになるか。けど、新月なら確か明日でしたよ。本当に繋がつていいるか保証はありませんが、やってみる価値はあるかもしません。」

その言葉に、才人と才吉は直ぐに行動に移った。

「先生、出来ているガソリンを急いで飛行機の格納庫へ運んでおいてくださいーー！それに曾爺ちゃん！」

「分かっている。才蔵に連絡して向こうの新月についてメールで聞けば良いんじやろ？」

こうして彼らは新月を用いての地球への帰還計画をスタートさせた。

数時間後、地球の才蔵からメールの返事が来た。その内容は地球、正確には日本上空の新月は翌日という物だった。

才人はそれに対して素直に喜んだ。

「地球に帰れるかもしれない！」

既にハルケギニアに来て2ヶ月経つ。彼の望郷の念は深い。

しかし彼は知らなかつた。その時部屋の外でその会話を聞いている人間がいたことを。

新兵器ヒント（後書き）

御意見・御感想・要請お待ちしています。
次回、才人は地球へ行けるのか?』期待ください。

新月の夜、といつてもハルケギニアの新月は地球と違つて月が一つあるので見えなくなつてるのは片方のみだが、とにかくその日才人は才吉と共に、両親が乗つてきた双発の軽飛行機で夜間飛行に挑もうとしていた。

「エンジン異常なし。燃料は満タン。機体にも異常なし。各機器正常と。」

才人は出発前の最終点検を終えていた。

「曾爺ちゃん。いつでも行けるよ。」

才人が機長席に座る才吉に報告する。ちなみに才人は隣の副操縦士席に座り、操縦の補助をする。本来この飛行機は武器ではないはずだが、なぜか『ガンダールブ』は反応していた。どうやらルーンが飛行機自体を武器として認識しているようだつた。

「ようし、じゃあ行くか。」

軽飛行機に乗り込む2人を、才人の両親である才助と瑞江が心配そうに見つめている。今回の試み、成功するかどうかわからないのだから当然といえる。しかもそれに息子と祖父が挑もうとしているのだ。

そんな彼らに、今回の計画を支援するコルベールと見送りとしてやつてきたウエールズが声をかける。

「なあに、心配要りませんよ。彼らなら必ず成功させてまた戻りますよ。そん気がします。」

「僕もそう思います。根拠はありませんが、彼ら、特に才人君ならどんな困難の壁も乗り越えられると思います。」

2人の期待に応えるかのように、軽飛行機は離陸を開始した。今回は夜間発進になるために、草原に松明を立てて臨時滑走路の印にしていた。

そのおかげで、2人を乗せた軽飛行機は何事もなく離陸できた。飛んでさえしまえば、あとは上昇し月蝕で見えなくなっている月へ向かつて飛ぶだけである。

「ようし、行くぞ才人！」

「わかつてゐる。」

才吉は黒く隠れた月目掛けて機体を旋回させる。副操縦席で操縦を手伝う才人は徐々に大きくなる月の影を見て、心臓の鼓動が早くなるのを感じた。地球に帰れないときの不安ではない。もしかしたらとんでもない場所に出てしまつかもしないことへの不安があつたからだ。

彼は必死に心の中で祈つた。

(頼む！俺たちを地球へ、元いた世界の日本へと導いてくれ！！)

一心不乱にそう祈つた。そして運命の一瞬である。才吉が声を上げた。

「突つ込むぞ！！」

2人を乗せた軽飛行機は、新月で姿が消えている月へと突入した。地上で見ているメンバーは、ふいに軽飛行機のエンジン音が聞こえなくなつたのに気付いた。

「どうやら月の中へ入つてしまつたらしいな。あとは2人が無事、地球へ着けるのを、そしてここへ戻つてくるのを祈るしかない。」

才助が傍らの妻に対して、咳くように言つ。

「そうね。けど、才人が行つて本当に良かつたのかしら？ルイズさんは話を聞いて寂しそうな顔をしていたわよ。それにあのシエスタつていう娘も。2人とも本当に才人が好きみたいね。そんな2人をおいていつちやうなんて、才人も罪深いわよ。」

瑞江が女として、才人に対して同情とも批判とも取れる言葉を発した。

「ああ・・・ところで、その2人はなんで今回見送りに現れなかつたんだ？」

「えー？さあ？」

才人が飛び立つたといつのに、ルイズとシエスタの姿はなかつた。そして、才助の疑問に答える人間も、その時はいなかつた。

一方、新月に突入した才人と才吉が一瞬光に包まれた後、次の瞬間見たものは、灯りをともした街が広がる大地だった。

「こには、日本か？」

才人が呟くが、外を見るだけでは全く確認は取れない。夜なので地形などが詳しくはわからないからだ。

隣の才吉が無線機のダイヤルを回した。そして、ある周波数に固定すると彼は頭につけているレシーバーの送信機を使って交信を試みた。

「こちら闇夜の鳥。闇夜の鳥。同じ穴の貉、同じ穴の貉、聞こえて
いるならば応答せよ。」

闇夜の鳥は才吉たちの暗号名。同じ穴の貉は地球で待っているはずの才蔵の暗号名だ。以前に打ち合わせて決めたものである。才吉はそれを2回ずつ繰り返した後、返信がないか待つ。すると、ほんの数秒で返信が来た。

「こちら同じ穴の貉。闇夜の鳥。こっちもレーダーで捉えた。右に20度変針して3分飛行せよ。そうすれば飛行場が見えるはずだ。」

才人にはその声が聞き覚えのある祖父の物であるのがすぐにわかつた。

「やった！ 爺ちゃんの声だ。地球に帰つてこれた……やつたよ曾爺ちゃん！！ 大成功だ！！」

「ああ、これで地球との連絡が開けたわけだ。これはすげえことだ！！」

地球への帰還成功に、歓喜する才人と才吉。そんな彼に後ろから声をかける人物がいた。

「ふーん・・・ここがあんたの世界なんだ。」

「そりゃ、ここが地球で俺の生まれ故郷日本。・・・って、え！？」

才人は心臓が止まるかと思えるほど驚いた。この飛行機には才吉と自分以外に乗つていなければ。しかも、今の声の主は最近ものすごく身近になつていた人物の声に良く似ていた。

才人は恐る恐る後部に首を向けた。そしてそこにいたのは。

「ふ、ルイズにシェスター！！！？？」

数時間前に今回の飛行のことを告げ、一端別れたはずの少女2人が座席に着席していた。

「おやおや。」

才吉のほうは驚きつつも、どこか楽しそうな表情をしてそういつづった。

「なんでお前らがここにいるんだ！？！」

才人は叫んで2人に聞いた。

「私はあんたの『ご主人様』なのよ。いわば保護者なの。付いて来て何が悪いの？」

「すいません。才人さんと会えなくなるんじゃないかと思うと、いつも立つてもいられなくて。」

2人はそう言い訳と釈明をするが、もちろん才人は納得する筈がない。

「なんでじゃあああ……クソ、やけにあっさり引き下がったと思つたらこう言ひことだつたのか。て言つうか、お前ら付いて来てどうするんだよー?」

才人の地球への帰還成功による喜びの気持ちは一気に萎み、彼らをどうするかということへの悩みの気持ちが大きくなる。さらに、彼女らを今度は安全に送り返す必要もあるのだ。

「まあ付いて来てしまつたんだから、どうしようもないだろ。前向きに考える才人。」

才吉が慰めのつもりでそう言つた。

「なんで曾爺ちゃんはそんなに前向きに行けるんだよ……ああ、もうどうするんだよ全く……」

才人が頭を抱えてしまつが、そんなことお構いなしに才吉は軽飛行機を指示された飛行場に着陸させた。

軽飛行機が止まると、4人は地上へと降りた。そこには1人の老人が立つて彼らを待つていた。才人の祖父である才蔵だ。

「父さんに才人、お帰り。て、なんだその女の子たちは！？」

彼はルイズとショスタを見るなり田を点にした。

「ああ爺ちゃん。実はさ・・・」

才人は才蔵にここまで経緯、2人が何者であるかを説明した。

「なるほど・・・異世界のね・・・まあ、取りあえず家に来い。」

こうして、才人たちは一端才蔵の家へと移動する事となつた。

帰還と闇入者（後書き）

御意見・御感想・要請などをお待ちしています。

取りあえず4人は才蔵の車で、才蔵の家まで移動する事となつた。ハルケギニア人であるルイズとシエスタの2人は車に乗つた時から騒ぎっぱなしであつた。

「ねえねえ、馬もないのにどうやってこの車動いてるの?」

「街がすゞく明るいですね。それに高い建物が多いですね。あ、あの赤や青に光る物はなんですか?」

何もかもが2人にとつて初めてで刺激的なものばかりであるから、驚き目を輝かせるのは当然といった。しかしながら、いくらなんでもはしゃぎ過ぎである。

「2人とも取りあえず黙つていてくんない。」

才人は2人をなんとか宥める。その様子を才吉は微笑しながら見ていた。

ちなみに車の時計は午前4時を指している。そんな時間であるから車はほとんどない。そのため、才蔵の家へは比較的早く着いた。ちなみに、才蔵の家というが実際には最近には珍しい複合家族の家、つまり才吉に才人の家族も住んでいたから、才人にしてみれば自分の家に帰ってきたのと同じである。

「さあ着いたぞ。取りあえずこんな時間だから、少し休むと良い。才人、お前も自分の部屋で休め。部屋はお前がいなくなつた時のままだ。」

「ありがとう爺ちゃん。」

才蔵の気配りに、才人は素直に感謝する。

扉を開けると、才人の祖母、つまりは才蔵の妻である礼子が5人を出迎えた。

「お帰り才人にお父さん。それに、可愛いお客さんが2人いるわね。」

可愛いと言われ、ルイズとシェスタは気を良くしたのか、上機嫌で挨拶する。

「始めてまして。ルイズと申します。ご厄介になります。」

「シェスタです。同じく厄介になります。」

「平賀礼子です。夫から連絡は貰っています。小さな家ですけどごゆっくりしていって下さい。」

まだ時間が早いということで、取りあえず全員仮眠する事になった。ルイズとシェスタは女子一人なので、礼子によつて普段は才助、瑞江夫婦が使つてゐる寝室へと案内された。

一方、才人は2階にある自分の部屋に戻つた。部屋に入つて電気をつけると、そこにはあの日ハルケギニアに行つた時のままの状態の部屋が視界に飛び込んできた。

無性に故郷へ帰つてきた安心感のような気持ちが湧き上がつてくる

る。事実そつなのだ。1ヶ月しか離れていなかつたはずなのに、1年近くも向こうにいた気がする。

才人はベッドに横たわつてこれからのことを考える。

才人としては再びハルケギニアに戻ろうと考へていた。もちろん両親がまだ向こうに残つているという事もあるが、それ以上にリーズを始めとする向こうで出会つた面々のことが気になつてしまつがないのだ。

ハルケギニアにいた時は、日本に帰る方法を思案したり、望郷の念に浸つたりすることも多々あつた。しかし、いざ地球へと戻るとハルケギニアの事が頭に浮かぶ。

加えて、こちらに連れてきてしまったルイズとシェスターを責任を持つて向こうに帰さなければならぬ。

そんな事を考えながら、彼は眠りに落ちていつた。

彼が次に目覚めたとき、時計の針は7時半を指していた。既に日は昇り、窓から容赦なく日光が部屋の中に入つてくる。

才人は部屋を出て1階のリビングに向かつた。そこには、才蔵と礼子が椅子に座つて待つていた。

「おはよう、爺ちゃんに婆ちゃん。」

「おはよう才人。」

才人も椅子に座つた。

「2人は？それに曾爺ちゃんはまだ起きていないの？」

才人はルイズとシエスタ、それに才吉の姿が見えないので言った。
「まだ寝てるよ。それより、お前今日は平日だが、高校へは行くのか？」

「えー？」

才藏の質問に、才人は一瞬間抜けな顔をしたが、直ぐに表情を戻し考える。

（そういえば俺高校へ通っていたんだよな・・・すっかり忘れてた。・・・けど、またハルケギニアに戻るんだしな・・・だつたら。）

「爺ちゃん、取りあえず学校へは行くよ。けど、俺またハルケギニアに戻るつもりだから。だから、俺学校に休学届を出してくるよ。」

その言葉に、才藏と礼子は一瞬顔を見合せたが、すぐにこう言つた。

「そりゃか。お前が考えて出した結論ならそりゃしなさい。でも、朝食にしよう。」

3人はそのまま朝食に移つた。才人にとっては久しぶりのご飯に味噌汁、そして漬物といったシンプルな日本の朝食である。

才人は久しぶりに食べる味噌汁や漬物の味を楽しんだ。そして彼が食事を終わらせる頃に、ルイズとシエスタが起きてきた。

「「おはようござります。」」

2人は才助と礼子に向かつて挨拶をすると、出された食事に面食らつてしまつた。なにせ米を炊いたご飯も、味噌汁も、漬物も2人にとっては全くなじみがない。もちろん、箸も使えるわけがない。

その後、才蔵と礼子が2人に箸の使い方等を教え、2人は四苦八苦しながら食事を進めることとなつた。

その様子に苦笑しつつ、才人は洗面所へ行き歯を磨き、顔を洗うと今度は部屋へと戻り高校の制服に着替える。彼の制服はブレザーだった。久しぶりに着るその感覚に少し懐かしさを覚えながら、彼は一階に戻る。

彼が一階に戻った時には、ルイズとシエスタが丁度食事を終え、食後のお茶を飲んでいる所であった。

「あら、才人何よその服？」

「これは俺の学校の制服だよ。これから学校へ行くんだ。」

「ふーん。だつたら付いていいっても良い?」

ルイズの予想外の質問に、才人は少々面食らつてしまつ。

「えー? なんで?」

「うーん、別に。ただ行ってみたいから。それに折角あなたの世界に来たんだからこの世界見てみたいし。」

「私ももつとこの世界のこと知りたいです。」

ルイズに釣られるように、シェスタまでそんなことを言い始めた。

「そ、そんなこと言われてもな・・・」

いきなりの事なので、才人も少し困ってしまう。すると、才蔵が横から言った。

「良いじゃないか。どうせ学校には休校届出すだけなんだろ。だったら連れてってあまり問題はないと思つぞ。」

「うーん・・・じゃあ良いよ。」

すると、2人は顔を綻ばせた。

「ただし、その格好はなんとかならない?」

「「え?」

実はこの時、ルイズもシェスタも向こうでの普段着のまま来ていた。つまりルイズはトリステイン魔法学院の制服。シェスタはメイド服である。ルイズはまだ良いが、シェスタは目立つてしまうがない。

そこで、2人は普段瑞江が着ている服に着替えて出かける事になつた。ルイズは長めのワンピースにベレー帽。シェスタは白いセーターにロングスカートという格好である。

こうして2人の着替えが済むと、3人は出発した。

朝（後書き）

御意見・御感想・要請お待ちしています。
ゼロ戦という題名が付いていますが、ちょっと地球での描写が続
きそうです。何卒ご容赦ください。

日本での1日

才人の高校は、最寄りの駅から電車で3つほど行った所にある。そういうわけで、まず3人は電車に乗らなければいけないが、もちろんそんな物はハルケギニアはないので、才人は切符を買ってやり、さらに改札機の通り方をルイズとシェスターに教えた。

しかし、やはり口で説明するだけでは不足であった。ルイズが改札機を通り過ぎた途端、ピンポン！…というブザーがなった。

「え！？何、なんなの？」

慌てふためくルイズに、才人が言った。

「ルイズ、切符を取り忘れてる。」

改札機を抜けてホームに上ると、折よく列車がやつて來た。

「まもなく、2番線に総武・中央緩行線津田沼行きが参ります。黄色の線までお下がりください。」

すると、ルイズとシェスターがきょろきょろし始めた。

「どうしたの2人とも？」

才人が怪訝な視線を送ると、2人は言い返した。

「今のが、どこからしたの？」

「近くに喋っている人なんていませんでしたよ。」

どうやら構内アナウンスがどこから流れているか気になっているようだ。まあマイクもスピーカーも知らないのでは仕方がない。才人は苦笑いをした。

さらに乗り込んで電車が出発すると、2人はまたもあたりをキヨロキヨロ見回し、好奇心を剥き出しにした。

「うわあ！…早いですね！…」

「すゞいわ！…まるで竜にでも乗っているきぶんだわ。」

そんな風にはしゃぎまくる少女2人を、周りの乗客は奇異の目で見ていたが、才人は気にしたら負けなので、なんとかそれに耐えた。職員室へと足を向けた。シエスタとルイズには外で待つていての指示する。

「失礼します。」

才人が中に入ると、既に授業中のためか教師の数は少なかつた。しかし、担任の教師は授業がないため机に座っていた。

「おお、平賀じゃないか。久しぶりだな。何も言わず1ヶ月もどこへ行つていたんだ？」

恩師は1ヶ月間無断欠席していた。才人に怒るわけでもなく、いつものように聞いてきた。

「すいません。まあ色々とあって。それで、今日は休学届を出そうと思つて。」

「なんだ、久しぶりに来るなり休学届か。一体何があつたんだ？」

「えー？ それは、なんと言えば良いのか？」

まさか正直に、異世界の魔法使いの少女に召喚されて使い魔になりましたと言えるわけがない。言つたところで狂人扱いされるのは目に見えている。

しかし、彼はそれ以上突っ込まなかつた。

「まあ良いだろ？ それなりの事情があるようだな。休学期間は1年、休学理由は留学にしどぐがそれで良いか？」

「はい、ありがとうございます。」

才人は物分りの良い担任に感謝した。

じつして休学届を出した才人は教師に別れを告げ、職員室を出た。

「終わったよ2人とも。じゃあ帰ろうか。」

その言葉に、ルイズとシエスタは不満げな表情をする。

「ええ、もう帰るの？」

「もつとこの世界のこと知りたいです。」

2人の言葉に、才人は頭を抱える。こんな真昼間に制服の男子が女の子連れて歩いたりしたら警官に声をかけられるかも知れない。

しかし、才人はすぐにその考えを打ち消した。どうせ直ぐにハルケギニアに行くのだから、今のうちに楽しんでおくべきだろうと考え直した。

「わかつたよ。」

才人は2人を近くのショッピングモールに連れて行つた。色とりどりの服をショウウインドウに飾つた服屋や、クレープをはじめとするファーストフードショッピングが立ち並ぶ建物の中を、3人は数時間かけて見て回つた。もつとも、才人の持ち合わせの金では、2人が大いに興味を示した服やら化粧品やらを買つ余裕はないので、ルイズもシエスタも外から眺めるだけに終始した。

さすがの公爵家の娘ルイズでも、異世界では全く手も足も出なかつた。

そのように機嫌を悪くしたルイズに対し、才人は色々気を使つた。シエスタはそれを見て憮然としたが、大衆の前ではさすがに恥ずかしかつたらしく、積極的な行動は取らなかつた。

お昼にクレープを食べ、プリクラを撮つたりして3人は地球での時間を楽しんだ。特に、シエスタなんかは才人とツーショットで撮つたプリクラを「宝物にします。」と言つて喜んだ。

ルイズはそれをジト目で見つめていた。

しかし家に帰ると、意外なことが3人を待っていた。才蔵が忙しそうに家と車の間を往復して荷物を積んでいた。

「爺ちゃん、それ何？」

才人がトランク一杯に詰まれた荷物を指差す。

「おお、帰ったか3人とも。何つて、今夜向こうへ持っていく飛行機の部品や書物だ。」

「「「今夜!?」」

3人ともその単語を聞いて驚いた。

「あれ、言つてなかつたけ、今夜はまだ月が隠れている状態だからな。今日中ならまだ間に合つはずだ。もし今回を逃すと1ヶ月待たなきやならんくなるからな。」

3人が呆気に取られる中、才蔵はそう言つと家の奥へと入ってしまつた。

まさか今日の夜には戻る事になるなんて3人とも全く予想していなかつたのだ。

その後3人は取りあえず、正気に戻ると着替えた。どうせ家の中にいるのだから、着慣れた服のほうが落ち着く。才人は制服から私服に、ルイズとシェスターは借り物の服から日常用の制服とメイド服に着替えた。

夕食は、2人を気遣つてかパンを中心とした洋食のメニューだつた。ただし、才人のためを思つてか、彼にだけは照り焼きバーガーがメニューに加えられていた。

才人は祖母の気遣いに感謝しつつ、地球での最後の食事を楽しんだ。

そして食事も終わり、風呂に入つて一息つくと、才蔵は3人に出発までしばらく休むように指示した。出発は午前零時と決まり、それまで3人は仮眠する事となつた。

しかし、才人は気持ちが高ぶつて眠れなかつた。地球を離れ、ハルケギニアに行く不安もあれば、正反対に期待のような物が入り混じるように彼の心を渦巻いていた。

実は今日一日ルイズとシェスターとともに楽しんだが、ずつとハルケギニアのことが頭を離れなかつた。

そしてもう一つ、彼の心に気になる気持ちがあつた。

そんな事を考へていると、扉を誰かがノックした。恐らく才蔵が礼子だ。

「どうだ。」

才人の返事に答えて入つてきたのは、才蔵でも礼子でもなかつた。

「る、ルイズ。」

突然の珍客に、才人は驚かずにはいられなかつた。

日本での一日（後書き）

御意見・御感想・要請お待ちしています。

「ルイズ……どうしたんだよ?」

オ人は一体何の用だうつと思った。話があるなら後ですれば良いことである。

「眠れなくて……それにあんたと話したいことがあつたから。」

ルイズはオ人の隣までやつてくると、寄り添う様に座った。

「なんだよ、話したい事つて?」

ルイズはオ人の言葉にしばし俯いたが、決心したよつと囁つた。

「オ人は、このままいつちに残りたい?」

「えー?」

いきなりそんな質問をされてオ人は答えに窮してしまつた。つい先ほどまで考えていた心の中のもやもやはまだ片付いていない。そんな状況下では上手く答えられない。

「いきなりそんなこと言われても……困るよ。」

「そつ……あのね、実はこないだ実家から一通の手紙が届いたの。」

その言葉に、オ人はそう言えば、ルイズが何やら封筒を持ってい

るのを見たことを思い出した。

「私には、親同士が決めた婚約者がいたの。その人は格好良くて、強くて、家柄も良くて私にとつては小さい時からあこがれの人だつたの。」

ルイズは何か過去を懐かしむ用に、表情を綻ばせた。しかしぬる瞬間、その表情は一気に哀しみを帯びた物になつた。

「けど、その人は裏切り者だつたの。」

「裏切り者？」

才人にはそれが何を意味するのか測りかねた。

「そう。王室内で進められた調査で、レコン・キスターの一員だつたことがわかつたの。そして、アルビオンに逃亡したの・・・私本当に悲しかつた。あの人に限つてそんな事はないとずっと信じていたのに・・・それなのに。」

ルイズの目からは自然と涙が出ていた。

「ルイズ・・・」

「私怖いの・・・また親しい人が離れていくのが。私の手の届かない所に・・・才人を無理やり召喚したのも、こっちの世界に戻りたいと思つていてるのもわかっているわ。今日地球を見てこっちの世界が豊かで、楽しい所だとわかつたから。けど、私のワガママだけど、才人には私の側にいて欲しいの・・・ずっととはいわないわ。けど、今はそうして欲しいの。お願ひ。」

どうやらルイズは才人がこのまま地球に留まつてしまわないか怖
れでいたらしい。

しかし、才人の心のもやもやはルイズのその言葉で自然と消えて
いた。

「ルイズ・・・安心しろ。確かにこっちの世界も良いけど、ハルケ
ギニアもいい場所だよ。それに、お前を含めてたくさんの友人がい
るし、アルビオンとの戦争にここまで首突っ込んでおいて今更逃げ
出す事なんて出来ないよ。それに・・・」

「それに？」

「俺はお前の使い魔だからな。」

そう言って、才人はウインクした。その途端、ルイズの表情が明
るい物になる。

「ありがとう。才人。」

ルイズはそう言うと、才人にしな垂れかかった。才人は腕を回し、
彼女をやさしく抱きしめた。

この会話から数時間後、2人は才吉、シエスタと共に再び月蝕を
利用してハルケギニアへ戻った。

今回の地球行きで才人たちは大きな収穫を得た。まず、より高度
なパソコン用ソフトや資料、そしてゼロ戦用の予備部品を持ち込む
事に成功した。また、新月を利用して地球へ帰れることがわかつ

たため、定期的に地球とハルケギニアの往復が出来る事を保障された。

一方、才人とルイズの2人にとっては、お互いの絆を確認し合つた旅となつた。

ハルケギニアに無事帰つた一行であつたが、休んでいる暇はなかつた。ウェールズからいよいよアルビオンがトリステインに宣戦布告すると聞かされたからだ。

「情報によればアルビオン軍はまず、艦隊を率いて侵攻するらしい。旗艦の「レキシントン」号以下トリステイン空軍艦隊の数倍もの勢力らしい。」

レキシントンと聞いて、才人は苦笑した。彼の知識では、その名は太平洋戦争中、日本海軍が初めて撃沈したアメリカ海軍の空母だからだ。

もつとも、そんなことはここでは関係ないことだから、才人は口には出さず、心の中でその考えを押し留めた。

「けど、どうやって宣戦布告するんでしょう? 理由がなければただ

の侵略で、他の国の信用を落とすだけではないのですか？」

ルイズが質問する。

「それは簡単だ。レコン・キスタはアルビオンから脱出した私や貴族を血眼になつて探ししている。その捜査をトリステインに要求したんだ。もちろん、アンリエッタが飲めるはずのない条件付でね。条約はトリステインによって拒絶された。その条約反故を理由に連中は宣戦布告する気だ。そして同時に、タルブ方面へ強襲作戦を展開するらしい。」

すると、今度は才人が質問する。その時の彼の表情は焦りのものだつた。先日行つたばかりのシエスタの故郷が上陸予想地点などとは想像もしていなかつたからだ。

「そのことはアンリエッタ姫に伝えたんですか？」

ウエールズは頷くが、その表情はどうか険しい。

「ああ。だが、トリステイン王室内にはこの情報を軽視する動きがあるらしい。特に、アンリエッタに反抗的な重臣を中心にね。」

「そんな。侵攻してきてからじや遅いのに。タルブの村を生贊にする気かよ。」

才人は腹が立つた。戦争では情報が重要な鍵となる。それを無視し、そのどばつちりをタルブの村や住人に押し付けるとは不届きな話である。

あの美しい草原や村が一方的にアルビオン軍に蹂躪され、燃やさ

れる光景が才人の脳裏に浮かんだ。

「私としてはレコン・キスタに操られているとはいえ、祖国がそのような暴挙に出るのを黙つて見てはいる訳にはいかない。亡命してきました「イーグル」号に乗つて出撃する気だ。」

ウェールズは強い意志を言葉に含めて言つた。

「俺もその時はゼロ戦で掩護します！－ウェールズ王子だけに戦いを押し付けるなんて出来ません！」

「私も、自分の国のために戦います！－」

ルイズと才人が戦いに参加するべく名を上げた。

「ありがとうございます、2人とも。」

ウェールズは2人と握手した。

この翌日、ウェールズは世話になつた魔法学院を離れ、「イーグル」号が隠れている辺境の街、メルンへ向かつて出発していった。

その見送りのために、アンリエッタ女王がお忍びで訪れていた。彼女はウェールズの乗つた馬車が見えなくなるまで見送つた。

それが終わると、才人は彼女をゼロ戦の格納庫まで連れて行つた。現在この格納庫には、ゼロ戦が2機と、巻き込まれた自衛隊のヘリ1機が格納されている。

その格納庫の前には才助と才吉、そして自衛隊員2人が整列して

いた。

絆（後書き）

御意見・御感想・要請などお待ちしております。

決戦への序曲高まる

整列していた男たちの列に、才人も加わった。その前に立たされたアンリエッタはわけがわからないといった表情をしてしまう。

「え？ え？」

そんな彼女にお構いなく、一番右に立っていた才吉が声を張り上げた。

「全員、トリステイン王国王女、アンリエッタ姫殿下に対して敬礼！…」

5人はピシッと彼女に向かつて敬礼する。そして敬礼を崩すと、才吉が前に出た。今日の彼は以前才人が着たのと同じ、まばゆい白の旧帝国海軍の第2種軍装を着ている。地球へ一端戻つたときに持ってきた物だ。ちなみに階級は大尉の物をつけている。

彼は挨拶を終えると、驚くアンリエッタの前に出て言った。

「驚かせてしまってすいません殿下。今日は我々一同、陛下にある宣言をすべくここにいる所存です。」

「宣言ですか？」

一体何を彼らは宣言するのだろうとアンリエッタは気になつた。

「そうです。我々5人は、ただ今からトリステイン王国のために戦う事をここに宣言し、誓つものです。」

その言葉を言われたとき、アンリエッタは最初彼らが何を言つて
いるのか理解できなかつた。それほどまでに彼らの言つた事は予想
外だつたのだ。

しかしアンリエッタも王女である。直ぐに脳内で先ほどの言葉を
反芻し、意味を理解した。

「え、つまりはトリステイン軍に加わると仰るのですか？」

すると、オ吉は首を振つた。

「いいえ、そうではありません。詳しい話はあちらで。」

オ吉は彼女をゼロ戦の格納庫へと案内し、そこでより詳しい話を
する。

その様子を才人と才助は見守つていた。

「これで俺たちは引くに引けなくなつたわけだ。」

才人がそんなことを言つ。

「なんだ。ここまで来てやめるとか言つ氣か？」

「まさか。そんな裏切るようなことはしないよ。父さんこそ、どう
なんだよ？」

才人は冗談で父親に言つ。

「ぬかせ。俺だってそんなことしねえよ。こちらの世界じゃコルベール先生やオスマン校長に色々世話になつていい。それにお前がつてルイズさんに仕えている身だろ。いろいろ恩があるんだ。その恩返しのために戦うんだ。本職を舐めるなよ。」

そう言って笑う彼が今着ているのは、なんと航空自衛隊の三佐の制服である。そう実は彼、航空自衛官。しかも戦闘機パイロットである。

現在ゼロ戦は佐々木少尉が残した物も含めて3機ある。これは一個小隊分の戦力である。それに加えて日蝕に巻き込まれてやつてきた陸上自衛隊のヘリが1機ある。

飛行機どころか、まともな機械文明さえないこの世界ではこの4機と、搭載された武装はとんでもない価値を發揮する。

今回平賀一家と自衛隊員2人は、その戦力をトリスティン王国のために使つことを決めたのである。

本来なら、すでに新月と日蝕を使って地球に帰る方法がわかつているから、自衛隊員である清水1尉と山田3尉の2人は関係ないはずであつたのだが、2人とももう日本に戻る気はないらしく、今回の宣言に参加した。

才人がそれで良いのかと確認のために聞いた所。

「どうせ日本に戻つても家族はいないし。」

「それにここなら思う存分戦えるみたいだし。可愛い娘も多いし。」

と囁つて笑い飛ばした。

1時間後、才吉とアンリエッタとの会談が終わった。これによつて、正式に才人たちはトリスティンの為に戦う事が決められた。ただし、トリスティン軍に編入される形で戦うのではない。

才人や才吉たちは、今後はウェールズ皇太子の為にアルビオン内戦に出撃する可能性もある。そのため、トリスティン軍に編入されたら柔軟に動く事ができないため、色々と都合が悪い。

そこで、今回アンリエッタに対して才吉が提案したのは一種の傭兵契約と言える物である。つまり、才人たちは戦闘が起きた時はトリスティン王国（厳密にはアンリエッタ王女）から要請される形で戦うのだ。そして戦う際も必要時以外はトリスティン軍の指揮下には入ることなく独立した軍隊として戦うという物だ。

もちろん、ただではなく対価を貰つて戦うこととなる。幾らなんでも慈善事業のように戦うわけにはいかないからだ。ただし、傭兵とは違いどんなに金を積まれても、トリスティンならびにアルビオン王室軍には絶対に敵対しないという取り決めがなされた。つまり、実質義勇軍として戦うのである。そのため、この後の公式文書では、才人たちのことを「トリスティン空中義勇軍」として扱っている。

じつしてこの日、正式に彼らは義勇軍として戦う事が決まった。そしてその旗は故郷の日本でも使われていた旭日旗となつた。

旭日旗とは旧海軍と海上自衛隊の旗で、日の丸に加えて16条の光線が書き加えられている物である。

ちなみに、日の丸ではなくこちらになつたのは、単に才人の「こ

つちの方が格好良い！」と言ひ言葉に全員が賛成したからだ。

アンリエッタとの会談で正式にお墨付きを貰つた翌日、才人たちはゼロ戦とヘリを全て魔法学院から、タルブ村より少し離れた草原に移動させた。そこを前進基地にしたのである。ちなみにこの時、シエスタとルイズ、さらにはキュルケにタバサも何故か引っ付いてきた。

一方、彼の曾祖父である才吉は彼らから離れて、一人軽飛行機に乗つてウェールズ王子がいる Merlinへと向かつた。

Merlinはタルブ村から西へ50キロメイルほど離れた場所にある小さな村で、アルビオン軍巡洋艦「イーグル」号はここに身を寄せていた。

Merlinは産業も殆どなく、わずかに農作業を営む家が数軒あるだけの辺境の村で、よつぽど精密な地図でないと載つていらない様な場所である。領主も見回りには年に一度しか来ないという、まさに隠れるには絶好の場所であった。

才吉はその近くの平原に、先に到着したウェールズに急造の滑走路を造つてもらい、そこへと着陸した。

その飛行場では、ウェールズ皇太子が待ち構えていた。

「殿下、ご足労感謝します。」

「こちらこそ才吉殿。新兵器の装備協力感謝します。」

ウェールズは数人のメイジに手伝わせて、才吉が運んできた新兵

器であるロケット弾を運ばせた。その先には、突貫で改裝を行う「イーグル」号がいた。

決戦への序曲高まる（後書き）

このシリーズでは、既にかなりの面で原作ではから逸脱していますが、お付き合い願います。

御意見・御感想・要請などを待ちしています。

束の間の平和

アルビオン王室空軍巡洋艦「イーグル」は突貫での改装に入っていた。もつとも、ドックの無いようなここメルンで行える改装などたかが知れている。今回の改装にしてもかなり小規模な物だ。

しかしながら、規模としては小さいがその内容はハルケギニアで行つ艦船の改装に関する物としてはかなり異様な物だった。

まず、艦の両舷にある大砲のうち後部にある3門を取つ払つた。そしてその部分に大きな開口部を設け、さらにその開口部の周りには薄く鉄板を貼り付ける。

改装を担当した船大工や工作班の兵士たちは、一体こんな改装に何の意味があるのだろうとしきりに首を捻つたが、王命であるので文句一つ言わず仕事を行つた。

しかし、彼らの疑念をより大きくしたのはその部分に取り付けられた見たこともない物体であつた。金属製の回転する台座の上に乗つたその細長い物体は金属特有の光沢を放つていた。

武器であるとは直感的に感じたが、船大工も兵士も一体どのような武器であるのか見当もつかなかつた。

さりに、彼らには厳重な緘口令が敷かれた。

「突貫で取り付けるよう言われて、さうに緘口令だ。しかも王命だぜ！ 一体ありやなんなんだ！？」

「わからんねえ。新手のマジックアイテムかな?」

彼らは口々にそう言いあつていたが、工事が終わると直ぐに艦から降ろされた。代わつてやつて来たのは、その謎の武器を製作した1人である才吉にウェールズ王子、さらに数名の兵士だった。

ウェールズがまず兵士たちに向かつて言った。

「これは諸君らに、来たるレコン・キスタとの決戦において使用してもらいう新型の兵器、ロケット弾である。」

新兵器と言われ、兵士たちは少しばかりざわついたが、王子の前なので直ぐに平静に戻る。

「この兵器は、じぢらにいるヒラガ・サイキチ氏が開発したこれまでに無い新兵器である。大砲に比べて射程も長く、威力も大きい。その分、取り扱いには慎重を期す必要がある。そこで諸君らには大変苦労を掛けるが、これの使い方を促成で覚えてもらいう。レコン・キスタを征伐し、祖国解放を一日でも早くするためにも、諸君らの健闘を祈っている。」

ウェールズによる訓示が終わると、早速才吉は兵士たちに新兵器の操作に関する指導を開始した。

兵士たちは平民である才吉にかなり疑念のある目を向けていたが、王命もあり黙々と彼からの指示に従つた。

一方、タルブ村から少し離れた特設飛行場に展開した才人たちはアルビオン軍の侵攻に備えていた。

エンジンや機体を念入りに整備し、いつでも出撃できるようにしておく。ちなみに、シエスタの曾祖父である佐々木少尉の機体も運び込まれ、整備を受けていた。

そんな中で、引っ付いてきたキュルケは暇を持て余していた。

「ねえダーリン、そんな物ばっかり構つてないで私とゆっくりお話ししない？」

ダーリンとはキュルケの才人に対する呼称である。彼女は大の男たらしで、何人のボーイフレンドを持つている。

しかし、そんな彼女に才人は何故か惚れない。それは彼女のプライドが許さない事である。そんなわけで、彼女の誘惑も激しくなるのであるが、それでも才人はゼロ戦の整備を優先した。

「「めんキュルケ、今は暇してる余裕はないんだ。後でな。」

「もう・・・」

才人から素つ気無く拒否され、彼女は頬を膨らませた。

そんな情景がある一方、少し離れた場所では才人の母親の瑞江がシエスタ、ルイズと共に昼食の準備を行っていた。ちなみに、その

メニューは才人たちが持つてきた味噌で作る豚汁と、飯ごうで炊いたご飯だ。

「ええとシエスタさん。そこのニンジン切つておいて。」

「はい、お母さん。」

シエスタはここぞとばかりに、自分の名を売り込もうとする。もちろん、側にいるルイズからしてみれば面白いはずが無い。

ルイズもまたなんとか瑞江の気を引こうとする。しかし。

「お母様、ネギ切るの終わりました。」

ルイズはまな板を差し出した。

「ありがとう、ルイズさん。・・・て、あら?」

瑞江がまな板上のネギを取ると、切ったはずが見事に一本に繋がっている。

「えー?あ・・・」

失敗した事を悟り、呆然とするルイズ。さらに、シエスタと視線が合つ。

(あなたには私に勝てる要素など一つもありませんわ。)

視線からそう言われていると感じるルイズであった。

同じ頃、少し離れた場所にいるタバサは、相変わらず本を読んでいたが、その前には火に掛けられた飯ごうが何個もあった。

そう、彼女は「飯の当番を割り当てられていた。本にばかり目を向けていてちゃんと炊けるのか大いに気になる所である。

しかし、彼女は突然本を閉じると火に掛けられていた飯ごうを全て引き上げた。そしてそれをルイズたちの元へと持つて行つた。

「炊けた。」

ただ一言そりゃつと、再び本を読み始めた。

「ちょっとタバサ、あんた本読んでばっかだったんでしょ、ちゃんと出来ているの？」

言つておぐが、ルイズを含めてここにいるメンバーで米を炊いた経験を持つている者はいない。第一、ハルケギニアには米を炊いて食べると言うことがない。炊き方については、先ほど瑞江から軽くレクチャーされたのみである。

そんなんであるから、ルイズがタバサに向けた疑問は当然と言える。

しかし瑞江が飯ごうの蓋を開けてみると、そこには白くふつぶつと炊き上がったご飯があった。

「あら、すごい！ 完璧だわ！」

瑞江も賞賛の声を上げた。

シェスターとルイズはそんなタバサを驚愕の目で見つめていた。一方のタバサはそんな視線も気にすることなく、黙々と本のページをめくっていた。

そんな平和な光景が繰り広げられている中で、着々と戦いの足音は彼らの元へと近づいていた。

同じ頃、アルビオンの各軍港から戦艦「レキシントン」を旗艦としたトリステイン侵攻部隊が出撃していた。目的地はウェールズ王子が掴んだ情報どおり、タルブの村であった。

一方、緊急改裝を終えたただ一隻のアルビオン王室空軍艦艇である「イーグル」もメルンを出撃していた。

決戦は目前に迫っていた。

束の間の平和（後書き）

御意見・御感想・要請お待ちしています。

戦闘開始！

レコン・キスタ軍侵攻予定日の早朝、才人たちはいつでも飛び上がれる体制に入っていた。飛行服に着替え、コックピットに乗り込んでいた。

前日の夕方、ウェーリズとアンリエッタからの連絡でアルビオン軍が動き始めたという情報を掴んだ彼らは覚悟を決めていた。

トリステイン軍は攻撃を受け、さらにその報告が王室に飛ばなければ動かない。一応アンリエッタからは、自分の判断で銃士隊という部隊を派遣するとの連絡があったが、それも到着するのは昼頃であつた。

つまり、アルビオン軍が侵攻してきた時点ですぐに戦えるのは彼らだけだった。

今回才人は万が一に備えて背中にデルフリングガー（以降デルフ）を背負っている。彼の緊張は大きく、手が小刻みに震えていた。

「相棒、どうしたんだい？ 手が震えているぞ？」

背中のデルフがそんな彼の様子を疑問に思い、声を掛けて來た。

「緊張してるんだ。戦うのはフーケとの時以来だからな・・・」

あの時は突発的な戦闘となつたために、緊張などしていられなかつた。しかし今回は確實に殺し合いになるであろう戦いに赴くのである。緊張しないはずが無い。

「そりゃい。けどお前は伝説の『ガンダールヴ』なんだぞ。どんな武器でも自由自在に操れるんだ。もつと自信を持つていけよ。」

力タカタと鞘の音を鳴らしながら、ナルフは気軽に囁く。

「そうだな。」

そんなこんなで日が昇つてから2時間ほど経った頃、双眼鏡で辺りの空を窺っていた才助が叫んだ。

「来たぞ！――」

その声に、全員が一斉に空を見た。遠くの空に、「コマ粒の様な陰が幾つも見えた。

「エンジン始動だ――父さん！ エナーシャ回してくれ――！」

今回才人が乗るのは、これまでに乗っていた地球から持ち込んだ21型ではなく。佐々木少尉の残した52型だ。この機体のエンジンを始動するには、手動でエナーシャと呼ばれるクラシクを回す必要がある。

才助がエンジンに取り付き、クラシクを回し始めた。充分な回転を得たところで、再び才人は声を張り上げる。

「前離れ――！」

そのままプロペラを回しては才助を巻き込んでしまうので、彼が離れるのを待つ。それを確認すると、エンジンを始動させる。

「コンターック！！」

「コンタクトが訛つた日本海軍独特の掛け声と共に、エンジンの始動ボタンを押した。

バババ・・・・

栄エンジンはしっかりと回り始めた。『固定化』の魔法で保護され、さらにしつかり整備したおかげである。

一方、残る2機のゼロ戦はセルモーターが付いているのでそのままエンジンを始動させる。ちなみに1機は才助が操縦し、もう1機はヘリコプターのパイロットである清水一尉が操縦する。

その2機がまず離陸していく。

「よし、じゃあ行くとするか。」

才人も離陸へ向けて動き始めた。エンジンの出力を上げるためにスロットルを押そうとした。その時、突然機体によじ登る影があった。

「私も乗せてー！」

ルイズである。手には『始祖の祈祷書』を持つている。

「お前、何言つてんだー？乗せられるわけねえだろ。これから戦いに行くんだぞ！戦場にお前を連れていくるかよー！」

才人は危険と思って、ルイズを降ろそうとそう言った。しかし、彼女の決心は固かつた。

「私はあなたの主人よ、使い魔だけになんか行かせられないわ。それに私も戦うつて姫様とウェーレルズ王子に誓つたのよ。お願い、私も連れてって！！絶対に足手まといにはならないから、私を信じて！！」

凛とした意志を持つたその言葉に、才人は彼女の説得は無理と思った。そして、今回は彼女を信じる事にした。

「お前つて奴は、本当にバカだな・・・乗れよ、後ろの空きスペースに。」

「ありがとうございます、才人。」

ルイズはコックピットの後ろに乗り込んだ。

「しつかり掴まっているよ！！」

才人はスロットルを全開にして滑走に入った。この時風は向かい風で、離陸するには丁度良かつた。

才人のゼロ戦はすぐに空に浮かび上がった。そしてそのまま脚を畳むと、先行した2機に追いつくために上昇する。

「才人遅いぞ！」

無線機を通して、才助から叱責の声が来る。

「『めん。』

才人はゴーグルを掛け、目の前に迫る敵を見回した。

（大型の戦艦、おそらくウェーレズ王子が言っていた「レキシントン」だな。そいつを中心にして、それより一回り小さい戦艦が3～4隻、中小型艦が10隻近くいるな。）

才人の感覚から言えば、大艦隊というイメージからは程遠い。彼にとつての大艦隊とは、それこそ沖縄戦のアメリカ軍みたいな、海を埋めるほどの大群である。

しかし後ろのルイズ、いやハルケギニア人からすれば大艦隊である。

「こりゃあ、ロケット弾で早い所片付けた方がいいかもな。」

今回ゼロ戦にはそれぞれ主翼に1発ずつ、才吉やコルベール謹製のロケット弾が積まれている。さすがに鉄で出来た地球の軍艦に対しては玩具に過ぎない兵器だが、木造のハルケギニアの船ならこれでも充分すぎる威力を持っている。

才人がそんなことを呟いたが、その口論見は直ぐに打ち砕かれた。その艦隊の周りを飛び回る物体が見えたからである。

「なんだありや？」

才人が呟くと、後ろから頭を出したルイズが叫んだ。

「竜よ！多分アルビオンの竜騎兵だわ！氣をつけて才人！！竜騎

兵は火を吐く火竜のはずよ！！」

「火を吐くだつて！？『ゴジラ』じゃあるまいし。けどそうなると厄介だな。」

彼らの真下にはタルブ村がある。もし艦船の攻撃を食い止めて、その間に火竜をのさばらせたら村に被害が及ぶかもしない。

住民はシエスタを通して連絡を受け、既に避難しているはずだ。だが、それでもあの美しく平和な村を燃やさせるわけにはいかない。

才人はすぐに竜騎兵に関する情報を才助に無線で伝えた。すると、すぐに返信が帰つて来た。

「ようし、なら先にあの竜騎兵から片付けるぞ。全員個々に自由戦闘。その火竜の火炎攻撃と、艦船からの攻撃に厳重注意しろ！！各機の武運を祈る！！」

「「了解！！」

3機は編隊を解いた。

「よし、行くぞルイズ！」

「ええ！！」

「突撃！！」

才人はスロットルを全開にして敵へ向けて突っ込む。今、タルブ村上空で壮絶な空の戦いが始まろうとしていた。

戦闘開始！（後書き）

御意見・御感想・要請などお待ちしております。

タルブ空中戦

タルブ村に侵攻したアルビオン軍。その先陣を切る竜騎士団の隊長は、接近してくる影を見て予想以上に早い迎撃に驚きつつも、微笑んだ。

「たつた3匹の竜で何が出来る。」

この時アルビオン軍艦隊に付き従う火竜は約30。敵戦力の10倍である。負けるはずが無かつた。それは隊員、さらにはその戦いを見ていた後方の艦隊の乗員たちも同じであった。

ところが、彼らの敵への侮りは数十倍のお返しとなつてやつてきた。

才人たちは3機それぞれがバラバラになつて敵に接近した。相手の火竜も3つのグループに分かれて迎え撃とうと動いた。しかし、速度差がありすぎた。何せ火竜のスピードはどんなにがんばっても時速にして150km。それに対し、チューンしてあるゼロ戦はずれも最高速度は600km前後のスピードを発揮できた。

ようやく動き始めたアルビオン軍の竜に対して、その時には才人は火竜の1匹を照準機のど真ん中に捉えていた。彼から見れば、竜の動きはあまりにも緩慢だつた。

「いただきー！」

才人は機銃の発射レバーを引く。

ダダダ・・・

機首に装備された7・7mm機銃が発射される。才人は相手が剥き出しの人間と生き物の竜であることから、弾の節約のために、主翼の20mmは使わず、7・7mm機銃だけを発射した。

銃弾は狙いたがわずその火竜に命中し、さらに乗り手である竜騎兵にも命中した。竜騎兵は一応甲冑をつけていたが、その程度の防御では到底機関銃の弾を止める事は出来ない。

撃たれた兵士は、一発で致命傷を負い竜から振り落とされた。

「撃墜1だ。悪く思うなよ、これは戦争なんだ。」

相手が見える分、撃ち落としても後味は良くない。しかし、少しでも心の迷いを作つたらそれは自分自身の命を危うくする。才人はそれがよく分かっていた。

彼は心を鬼にして戦う。

才人が1匹目を撃ち落したのと同じ頃、才助と清水一尉のゼロ戦も1匹ずつ落としていた。

この一撃で、残りの竜騎兵は一気に浮き足立つた。中にはゼロ戦のエンジン音と機銃の発射音に竜が怯えてしまい戦闘さえままならぬ者まで出る始末だった。

こうして5匹が戦わずして脱落してしまった。残る火竜は22匹。

才人は一端上昇すると、今度は真上からの一撃離脱攻撃を試みた。

「うなると、動きの遅い火竜などただの的である。

才人は再び機銃を発射し、立て続けに2匹を撃墜した。さらに、他の2機も合わせて3匹を撃ち落した。

「うりやあまるで訓練飛行だ！」

現役戦闘機パイロットの才助にそう言わしめるほど、戦闘の展開は一方的だった。もちろん、竜騎兵たちも反撃を試みはした。なんとか接近してブレスや魔法による攻撃を試みた。だが、それは徒労に終わった。

追いかけようとしても引き離され、逆に旋回してきたゼロ戦に撃たれて落とされてしまう。正面から攻撃をかけようとしても、火竜のブレスが50m届くかどうかなのにたいし、ゼロ戦の機銃は150mから100mでも有効弾を打ち込めた。

さらに、火竜は一度交戦状態に入るとバラバラに戦うしかなく、お互いの意思疎通は難しい。逆にゼロ戦は無線で連絡を取り合つて連携プレーを取る事が可能だった。

はつきり言って、アルビオン軍の竜騎兵たちに勝てる要素は全くなかつたのである。

こうして、ハルケギニアでその名を轟かせてきたアルビオン竜騎兵はわずか5分の戦闘で撃ち落されるか、戦闘不能状態に陥り全滅した。

その様子を見ていたルイズとテルフは歓喜した。

「すうじいぢやないの、ハルケギニア隨一の腕を持つアルビオンの竜騎兵団を全滅させるなんて。」

「相棒、さすがだな。」

それに対しても、才人は特に誇るわけでもなくただ一言言った。

「ゼロ戦の性能が良すぎるのはさー。」

一方、この戦闘の一部始終を見ていたアルビオン艦隊の乗員たちは呆然としていた。世界最強と自負するアルビオンの竜騎兵が10分の1の敵に一矢も報いられぬまま全滅したのである。

(トリステインの軍隊は化け物の竜を持っているのか?)

そのような恐怖心が艦隊の乗員全てに広がっていく。

しかし、直ぐに「レキシントン」座乗の侵攻軍司令官であるジョンストンは命令した。

「竜騎兵は全滅したが艦隊は無事だ!! 3匹の竜など恐れるに足りず。前進せよ!! 橋頭堡さえ築けばどうにでもなる!!」

彼の叱咤激励に答えるかのように、艦隊は動き始めた。

「それにしても、あの彌々しい竜は一体何なんだ?」

彼の疑問に答えられる者は誰もいなかつた。

才人たちは集合すると、敵艦隊への攻撃準備に入る。

「いいか、横からではまぐれでも大砲の弾に当たる可能性がある。真上、もしくは真下からロケット弾を撃ちこむんだ！！」

「「了解！！」」

才人たちが艦隊攻撃に入ろうとした時である。デルフが叫んだ。

「相棒、右だ！！」

才人は慌てて機体を捻った。その後ろを、高速で移動する物体が飛んでいった。

「何だありや？」

その言葉には、ルイズが答えた。

「風竜よ。武器は持つてないけど火竜より早いわ！！注意して！！」

その風竜は距離を少し離すと切り返してきた。そして、乗つている騎士が魔法攻撃を仕掛けてきた。

才人は機体を横滑りさせて攻撃を交わす。

「やるじゃねえか！！」

才人は機銃で攻撃するために、その風竜の後ろに付こうとした。しかし、敵も手強く中々隙を見せない。

と、そこでルイズ相手の騎士を見て呴くように言った。

「ワルド！？」

「何？」

「こないだ言ってた私の元婚約者よ。アルビオンに逃亡していたとは聞いたけど、まさかトリステインに攻めてくるなんて！？」

その間にも、ワルドの風竜は才人のゼロ戦の背後に回りつつある。

「くそ！？」

才人はなんとか振り切ろうとするが、相手は竜を自在に操り、さらにはこちらの動きを牽制するための魔法攻撃を行つてくる。

振り切りようがない。

「才人！後ろに付かれてるわよー振り切つてー！」

ルイズが叫ぶが、才人もどうしようもない。

「そうしたいのはやまやまだけど、だめだ！振り切れねえーー！」

と、その時である。無線連絡に入る。

「才人、左に旋回しろー！」

才助の声だ。才人は指示に従い、操縦桿を左に倒した。もちろん、ワルドも追おうとするが、それは出来なかつた。何時の間にか後ろに回つた2機のゼロ戦の集中射撃を浴びたからである。

12挺の機銃から発射される銃弾のシャワーをまともに喰らつた
彼の風竜は、瞬殺され、大地目掛け落ちていった。

「才人、大丈夫か？」

「ああ、何とか。父さんに清水さん、助かつたよ。」

「礼なら戦いが終わつてから言つてくれ。さ、邪魔者は片付いた。
改めて敵艦隊を攻撃する。」

「了解！」

才人は高度を再び上げ、敵艦隊へと向かつた。

タルフ空中戦（後書き）

御意見・御感想・要請などをお待ちしています。

揺れる艦隊

3機は艦隊の上に出上昇すると、反転降下して攻撃を開始した。まず狙われたのが駆逐艦の「テネドス」だった。この船には才助の発射した2発のロケット弾が襲い掛かった。

最初駆逐艦の乗員たちは、才助のゼロ戦が何をしようとしているのか全く理解できなかつた。彼らには飛行機やロケットという存在自体への概念が全くないからだ。

彼らが唖然としているうちに、ロケット弾が発射された。才助は相手が一応巨大な船である事から、2発同時に使つた。

「発射！！」

誘導装置もなく、地球のミサイルに比べれば玩具のようなミサイルであるが、相手が木造の船なら充分だつた。2発のロケット弾は易々と「テネドス」の甲板を貫通して、内部で爆発した。

地球からもたらされた技術を使い、高い爆発を持つように設計されたロケット弾は「テネドス」を内部から破壊した。積んでいた火薬に誘爆したのである。

水系統のメイジたちが必死に消火を試みたが、どうにもならなかつた。早々と退艦命令が出され、乗員たちは風の魔法をかけて空中に浮いた救命ボートへと乗り移つた。

「テネドス」は全艦炎に包まれると、浮力を失い墜落していく。

さらに、これを見た才人と清水一尉のゼロ戦は、は別の駆逐艦に1発ずつのロケット弾を発射した。これも見事命中し、2隻の駆逐艦は火を噴いた。さすがに「テネドス」の様にあつという間に撃沈とまではいかなかつたが、2隻とも火災の延焼が激しく、間もなく退艦命令が発令された。

奇跡的に死者は出なかつたが、3隻の駆逐艦が撃沈されたため、アルビオン艦隊の陣形は大きく崩れた。

先ほどの竜騎兵全滅に続き、田の前で駆逐艦と言つ小型艦とはいえ、軍艦を一撃で撃沈されてしまつたことに兵士たちは再び呆然とした。

1回目の攻撃には、兵器の威力を見せ付けるデモンストレーションの意味があつたが、その意味では大成功だつた。

アルビオン艦隊は再び浮き足立つた。その中で、巡洋艦「インディミダブル」のヘンリ・ボーウッド艦長は冷静に命令を下した。

「信号」兵、艦隊旗艦「レキシントン」に信号。撤退を具申するだ。

すると副官が田を剥いた。

「艦長正氣ですか！？まだ戦いは始まつたばかりですよ！それなのに撤退を具申するなど言語道断の行為ですよ！」

それに対し、ボーウッド艦長は副官に諭すよつて言つた。

「君も見ただろ、連中が使つてゐる兵器は我々の大砲などとは比べ物にならない威力を持つてゐるのだぞ。しかもあんな俊敏な動きを

されではとてもではないが撃ち落す事など出来ない。今はまだ3匹しかいないが、もつとトリステインが持っていたら厄介だ。ここは傷を広げないうちに一端引くべきだ。責任は私が取る、信号を送りたまえ。」

「はーー。」

副官は命令を承諾すると、信号兵に「レキシントン」への信号を行つよひづ命令した。

ボーウッドが撤退を具申した理由には、先ほどの理由もあつたが、もつ一つ彼自身がこの戦争に否定的なことがあつた。

彼は一応レコン・キスター側についているが、別に政治的信念とか貴族としての利益があつて靡いたわけではない。内戦中上官がレコン・キスターについたのに従つただけである。

本来なら彼は旗艦である「レキシントン」の艦長職に内定していた。しかし、出撃前に反レコン・キスター派の嫌疑をかけられ取調べを受けた。今回の作戦は拙速であると批判的意見を言つた事と、積極的に協力する姿勢を示さなかつたからである。嫌疑自体は晴れたが、結局それが原因で以前乗り組んでいた巡洋艦の艦長に留任したままでの出撃となつた。

(ま、あの堅物司令官が意見具申を聞くほど賢明とも思えないがな。)

ボーウッドは侵攻軍司令官のジョーンストンの性格を思い出し、嘲笑した。彼は融通が利かず、部下からの意見具申を聞くとは思えなかつたからだ。

(特に自分のような人間がする意見はな。)

ボーウッドの予想通り、「レキシントン」の艦橋に立つジョーンストンはこの意見具申を無視した。

「たわけたことを…あのボーウッドらしい弱腰な意見だわ…少しうらいの損害を受けたぐらいで撤退など出来るか!!艦隊全艦に徹底しろ、撤退は許さん!!それよりも兵隊を降ろす準備をしろ!!」

直ぐにその通りの命令が通達される。しかし、ボーウッドの意見具申は大きな波紋となつて艦隊に広がつた。特に中小型艦の艦長たちはボーウッドの意見を支持する動きをみせた。

3分後には彼の意見に賛成する複数の艦が発光信号で、同様の意見具申を歸してきた。

その様子を見たジョーンストンは再び激昂した。

「愚か者どもが…少しうらいの損害で怖気づきよつて…!撤退は絶対に許さん!!もし少しでもその素振りを見せたら砲撃すると全艦に通達しろ!!」

いつしたやり取りが行われている間才人たちは攻撃を控え、艦隊上空をグルグル旋回していた。

「連中、盛んに信号をしつづけるけど、一体何がしたいんだ?」

「わかんないわね。」

才人もルイズも、発光信号は読めないので一体どのような連絡がなされているのか全くわからない。

「父ちゃんどうする?」

才人は無線で才助に呼びかけた。

「とりあえず連中が動き始めたら再攻撃だ。残ったロケット弾を旗艦と思われる戦艦に集中して使うぞ。指揮系統を麻痺させるだけで充分だ。」

すると、アルビオン艦隊は撃沈した3隻の乗員を救助する船を除き、バラバラになっていた陣形を戻すと再び進軍を開始した。しかも、高度を落としている。どうやらこのまま兵士を降ろす『気』のようだ。

「まだやる『気』のようだな。救助中の船は無視!—アルビオン艦隊旗艦に集中攻撃をかけるぞ!」

「『ア解ー』」

3機が翼を翻して再攻撃を開始しようとしたとき、清水一尉が叫んだ。

「平賀3佐、左後方に艦影。数は1。」

その言葉に、才人もルイズも左後ろ側を見た。確かに、艦影が1隻接近しているのが見えた。その正体に2人は直ぐに気付いた。

「ウェールズ王子の乗る巡洋艦だわ。」

「ああ。」

すると直ぐに無線機に交信が入った。

「ひから才助。今追いついた。ウェールズ王子も一緒だ。これより戦闘に参加する。現在の状況を知らせてくれ。」

「ひから才助。現在敵の竜騎兵を全滅させ駆逐艦3隻を撃沈するも、敵は侵攻を継続中。応援よろしく頼む。」

戦況が大きく動く。

揺れる艦隊（後書き）

御意見・御感想・要請お待ちしています。

戦いの分岐点

戦場に現れたアルビオン王室海軍巡洋艦「イーグル」の姿は、より一層の混乱をアルビオン艦隊にもたらした。

「あれは王室派についたまま行方不明となつた巡洋艦「イーグル」です！」

その報告によつて、アルビオン艦隊旗艦「レキシントン」の艦橋では、ジョンストンの顔色が一気に青ざめることとなつた。

「まさか、行方不明のウェーラーズ皇太子が乗つているとでも言つのか！？」

レコン・キスタが内外に向けて発表した情報では、アルビオン王室はニュー・カッスルでの戦闘で完全に滅んだとされている。しかし、革命戦争（アルビオン内戦）終結以後から彼が亡命し生き残つてゐると言う噂話がアルビオン国内では絶えなかつた。

内戦はレコン・キスタの勝利で終わつたが、実質上扱いが変わつていない、むしろ貴族が完全に政権を握つた事によつて生活が苦しくなつた平民からの人気は地を這うレベルであつた。さらに革命中は聖地奪回と言う公約に釣られた貴族も、レコン・キスタの強引なやり方に失望を覚えつつある人間が多かつた。

そうした国内の不満をそらす為にも、成功させねばならないトリステイン侵攻であつたのに、初っ端から敵の見たこともない竜によつて竜騎士団が全滅し、さらに駆逐艦3隻が立て続けに撃沈されたため、艦隊には動搖が走つてゐる。

そのタイミングで現れた巡洋艦「イーグル」。もしウェールズ皇子が乗っていたら、大変な結果を招くかもしれない。そして、彼の悪い予想は間もなく現実の物となつた。

「イーグル」の艦橋から発光信号がなされたのが見えた。すぐに信号兵が解読しジョン斯顿の元へと持つてきた。

「信号です。我、アルビオン王室海軍巡洋艦「イーグル」なり。アルビオン艦隊に告ぐ。今回のトリステインへの侵攻は、レコン・キスタによる悪辣な道理にもとる侵略戦争である。貴君らが貴族、アルビオンの人間としての名誉を持ち、アルビオンをレコン・キスタより解放する意志があるならば、直ちに侵略行為の中止を求むものである。アルビオン王国皇太子ウェールズ・テューダ。以上です。」

やはりあの船にはウェールズ皇太子が乗っているようである。今 の信号で艦隊内から本当に離反艦が出る可能性があった。そうなる前になんとかしなければならない。

「砲撃準備！あれば国を見捨て、アルビオンを退廃させた裏切り者の王室軍の軍艦だ。そんな者が寄越す信号など考慮する価値は無い。撃沈しろ！…」

「了解！…」

「レキシントン」の片側100門以上の砲が一斉に「イーグル」に指向する。しかし、この動きはもはや手遅れであった。

「艦隊最後尾の駆逐艦「エクスプレス」が陣形外に出ます…」

見張り兵が絶叫する。ついに離反艦が出てしまつた、ジョнстトンが急いで「エクスプレス」の見えるところまで行くと、「エクスプレス」が大きく右に舵を取つてゐる所であった。その船尾に掲げられていたレコン・キスターの3色旗は降ろされ、代わりにマストに白旗が掲げられている。

「しまつた・・・後続の艦に信号だ。裏切り者の「エクスプレス」を撃沈せよ！！」

だがその命令が実行される前に、さうなる報告が彼の元へともたらされた。

「駆逐艦「スチュワート」、「ホープ」、戦列より離脱します！」

「巡洋艦「インドミダブル」、「フォーミダブル」、白旗を上げて艦隊陣形より離れます！あ、「インドミダブル」が信号を送っています。我これより、巡洋艦「イーグル」の指揮下に入るです。あ、巡洋艦「ペネロープ」、「ベルファスト」も陣形から離脱します。」

次々と艦艇が離反する様子に、ジョンストンは歯噛みする。

「お、おのれ！..」

結局、最終的に戦艦5隻を除く全ての艦艇が艦隊から離れた。戦艦に離反する船が出なかつたのは、艦長をレコン・キスターに従順な人間で固めていたからだ。

「くそつ、こうなつたら離反した艦ともども殲滅してくれる。残存する各艦に信号、ただちに砲撃を開始するよつ送れ！..目標は巡洋艦「イーグル」号、そして離反した裏切り者どもだ！..」

「アイ・サーーー！」

ジョンストンの命令が各艦に送られ、その1分後には全艦が一斉に砲撃を開始した。

艦隊から離反した艦艇の内、ボーウッド艦長指揮の「インドミダブル」を始め、歴戦の指揮官に率いられた各艦はその砲撃を巧みに避ける。さらに、被弾しても優秀な乗員たちは直ぐに応急処置を行い、船をもたせようとする。

しかし、それにも限度がある。間もなく犠牲が出てしまった。艦隊から最後に離反した巡洋艦「ベルファスト」は戦艦からあまり距離を離していなかつたために田の仇にされ、集中砲火を浴びてしまった。

まもなく、艦の飛行に重要な風石庫を破壊され、同艦は墜落してしまった。乗員の多くが脱出出来たものの、味方に滅多打ちにされる姿は悲劇そのものであった。

その様子を見ていた才人は信じられない思いだつた。

「信じられねえーー！今までの味方を平氣で撃ちやがったーー許せねえーー！」

才人は艦隊旗艦「レキシントン」に向けて急降下を開始した。

「喰らえーー！」

残つてゐる1発のロケット弾を「レキシントン」に向けて放つた。

さうして、もう1機の残弾を有する清水機もロケット弾を「レキシントン」に向けて撃ちこんだ。

2発のロケットは狙いたがわず「レキシントン」に命中した。さすがに相手が大型である分、撃沈とまではいかなかつたが、1発はマストを全壊させ、もう1発は艦の操舵系統に被害を与えた。

これによつて、「レキシントン」は事実上戦闘不能となつた。

「やつた!!」

制御不能となつた「レキシントン」を見て、才人は歓喜の声を上げた。そんな彼に、デルフが声をかける。

「相棒、喜んでもいられないぜ、まだ4隻残つてゐるぜー。」

「そうだった。けど、ミサイルは全部使ひまつたしな。機関銃の弾はあるけど・・・」

既に3機のゼロ戦には対艦用の兵器は残つていない。あるのは機首の7.7mm機銃と主翼の20mm機関銃だけである。しかし、さすがに木造船とはいえ戦艦を機銃で撃墜できるとは才人も考へていなかつた。

しかし、残る4隻は「レキシントン」が戦闘不能にされてもなお砲撃を続けてゐる。

「どうすれば良いんだ!?」

戦いの分岐点（後書き）

御意見・御感想・要請お待ちしています。

虚無発動

才人たちのゼロ戦がロケット弾を撃ち飛くしたころ、ウェーラーズ王子と才吉を乗せた巡洋艦「イーグル」は攻撃準備に入っていた。

敵戦艦から発射される砲弾を避けつつ、ウェーラーズは今回積み込んだ新兵器ロケット弾を使おうと試みた。

「頼みますよ、才吉わん。」

その期待を一身に受ける才吉はその時、下層の発射機の側で大忙しだった。

「ロケット弾発射準備！！」

ロケット弾の発射機の側で指揮を執るのは才吉である。85歳とは思えぬ気迫と動きで乗員の水兵たちを呆気にとらせながら、双眼鏡をのぞいて距離と方位を測る。

「目標右舷敵戦艦！！方位右舷45度、距離1000m、的速10ノット！！」

指示を受けた水兵が発射機にあるハンドルを回してロケット弾の照準をつける。この発射機は才吉が、地球にある軍艦につけられている魚雷発射管を参考にして、コルベールと共に突貫で開発した物だ。

「右舷45度、距離1000メイル、的速10ノット！！」

水兵が復唱し、発射機の照準がその位置に固定された。

「ほほ同高度だ、これなら当たるはずだ。・・・口ケット弾発射用意、要員は待避！！」

才吉の命令によつて、それまで発射機を操作していた水兵が一齊に発射管の設けられた部屋から出る。口ケット弾が吐く炎で火傷をする恐れがあるからだ。そのため、発射時は発射機から全ての人間が離れ無人にしなければならない。

ちなみに、改装のさい開口部の周りを鉄板で覆つたのも、船体に炎が引火するのを防ぐためだ。

発射は隣の部屋から電気式の着火装置を用いて行う。才吉が最後に発射機から離れ、隣の部屋に移動して発射装置に手を掛けた。

「よつし、撃て！！」

才吉は発射ボタンを押した。

直後、2発のロケット弾が発射され、数秒後には目標となつた2番艦である敵戦艦、「サラトガ」の横腹に直撃した。そしてその1秒後には信管を作動させた。

その一瞬の後、「サラトガ」は大爆発を起こした。僅か数秒で船体全体が炎に包まれていた。そして弾薬庫に引火したのか、あつという間に船体が真つ二つに裂け、そのまま炎上しながら墜落していった。

その光景に、その場を見ていた敵味方問わず、全ての人間は呆然

とした。ほとんど轟沈である。水上ではないし、メイジが乗員の比率として多いはずだから、死者もそこまで多くはないだろう。それでも巨大戦艦が格下の巡洋艦から発射されたちっぽけなロケット弾2発で轟沈してしまった事は、見る者全てに大きなショックを与えた。

「すごい、なんて威力だ！」

「イーグル」のブリッジからその様子を見ていたウェールズすら、目の前の光景を信じられない眼差しで見ていた。異世界の兵器だから、それなりに威力はあると考えていたが、ここまで威力があるとは考えていなかつたのだ。

異世界の兵器である事を知らないアルビオン艦隊の乗員に与えた衝撃は、ウェーレズが感じた物の比ではなかつた。特に、王室軍がそのような兵器を持つていてことに、彼らは恐怖した。

そして、ついに残る3隻全てがついにレコン・キスタの旗を降ろし、白旗を掲げると次々に艦隊から離反した。

「後はあの1隻だけだな・・・」

才人が呟くが、ほとんど戦闘不能になりながらも「レキシントン」は頑なに降伏を拒んでいる。「イーグル」を始め、他の船も説得のためにしきりに降伏を勧める信号を送っているが、「レキシントン」はわずかに残っている大砲をうちまくる一方で、全く聞く耳をもない。

「こままじや犠牲者が増えるだけだぜ。」

巡洋艦「イーグル」にはまだ2発のロケット弾が残っているが、ウェーレズも才吉も犠牲を増やしたくなかった。だから、発射をためらっていた。

しかし、このまま砲撃戦が続けば、恐らく「レキシントン」を沈めるまで時間が掛かり、双方に犠牲ができる。

そんな中、後ろに座るルイズは祈っていた。

（始祖ブリミル、そして姫様、この戦いを無益な犠牲なく終わらせられるよう、私に力をお与え下さい・・・）

今回ルイズは、以前アルビオンへ行つたさいアンリエッタから預かつた水のルビーと、オスマンから託された『始祖の祈祷書』をそのまま持つてきていた。

ルイズは何気なくその『始祖の祈祷書』を開いた。本当に何気なくだつた。するとルビーが光り、『始祖の祈祷書』に文字が浮かび上がつた。

ルイズはその文字を夢中で読み始めた。しばらくすると、そこに呪文が浮かび上がつた。

彼女のその行動に前に座つている才人も気付いた。

「ルイズ？」

才人はルイズがやけにおとなしいので、後ろの席を向いた。すると、彼女は杖を持ち、何かを唱えていた。才人が聞きなれた他の魔法使いがよく唱える4系統の魔法とは違う、長く聞いたことの無い

物だった。

「これは？一体どうこいつ」とだ？」

すると、テルフが答えた。

「おお、懐かしいね、こいつは『虚無』の呪文だ！！」

「『虚無』！？」

才人はどこか聞き覚えのある気がしたが、その意味までは知らなかつた。

「ああ、始祖ブリミルが用いた伝説の系統魔法だ。そうか、相棒が『 Gandarub 』になつたのもこのためだつたんだ！『虚無』の魔法は詠唱に時間が掛かる。その詠唱が終わるまで主人を守つてやるのが『 Gandarub 』の使命だ！！相棒、こいつをあの戦艦の上に持つていくんだ！！そうすれば嬢ちゃんも魔法が使いやすくなる！」

「わかつた！！」

才人はエンジン出力を上げ機体を上昇させ、ゼロ戦を「レキシントン」の上空まで持つていつた。丁度その時、ルイズの詠唱が完成した。そして才人のゼロ戦を中心にまばゆいばかりの光が発生した。

その光を、ウェールズも、才吉も才助も、アルビオン艦隊の乗員も、タルブ村の住民も、そしてようやく駆けつけた銃士隊の面々も目撃した。

後に伝説とまでなるその光は、まるで太陽がもう一つ現れたかのようだった。

そしてその光が収まつた時、そこにあつたのは風石が消滅し、帆が全て炎上する「レキシントン」の姿だつた。まもなく、「レキシントン」は飛行能力を失い、タルブの草原に不時着した。ただ一人の死者を出すことも無く。

虚無発動（後書き）

御意見・御感想・要請などお待ちしております。

戦闘終結

タルブ村上空で行われた空戦は、敵艦隊旗艦「レキシントン」の撃墜によって幕を閉じた。もつとも、戦い自体は小規模ながらまだ続いていた。

墜落した軍艦から脱出した乗員や兵隊の一部が、降伏を拒み、抵抗を続けていた。それを、アンリエッタ王女の肝いりで編成された銃士隊が追撃をかける。

銃士隊は全員平民の女性で編成された新しい部隊で、今回が初陣であった。彼女らは魔法こそ使えないが、マスケット銃と剣で武装し、それを操る腕も優れていた。

抵抗を続けるアルビオン軍人のほとんどは、杖を失うなどして魔法が使えない状態にあつたため、次々と銃士隊の前に倒れていくか降伏していく。しかし、まだ魔法が使えたり、武器を持つていたりする者はしつこく反撃を続ける。

銃士隊隊長のアニエスの目の前で、また1人の隊員が敵の反撃によつて傷つき倒れる。

「くそ、衛生兵！負傷者の収容を頼む！」

平民と魔法が使えるメイジでは、超近距離での1対1ならともかく、複数の人数で相手をされると分が悪い。マスケット銃は射程が短いし、剣は肉薄せねば使えない。

今も目の前で4人ほどの男が逃げていくが、魔法で攻撃してくる

ために下手に近づく事は出来ない。

「セヒセヒビウしたものか？」

アニエスが思案していると、突如上空を、轟音を発しながら何かが通り過ぎた。上空で戦っていたゼロ戦が降りてきたのである。

「あれは？」

アニエスにとって、飛行機を見るのは今回が初めてであった。

ゼロ戦は一度様子見のためか、彼女の上空を通過したが、間もなく旋回して逃げるメイジに接近していった。そして、機関銃で攻撃した。

もつとも、実際は当てる気など全くなく、威嚇のための銃撃であった。

ダダダ・・・・

銃士隊が使う銃の数倍の大きさで、さらに連続した機関銃の発射音は、銃を使い慣れている彼女を大いに驚かせた。

「な、なんなんだあれは？」

だが、今はそんなことを考えている余裕は無かつた。彼女は今のが攻撃で怯んだメイジたちとの距離を一気に縮め襲い掛かつた。

ゼロ戦の攻撃に驚き、腰をぬかしていたメイジたちは、アニエスへの対処が遅れた。呪文を詠唱する前に、杖を彼女に叩き切られて

しました。

「ひー！」

その男の喉下に、彼女は剣を突き付けた。

「もう終わりだ。それでも、まだやるか？」

「くそ・・・」

男は悔しそうな表情をして、しぶしぶ両手を上げた。銃士隊隊長アニエスが、敵侵攻軍司令官、ジョン斯顿を捕らえた瞬間であった。

それから間もなくして、抵抗を続けていたアルビオン軍は全面降伏し、タルブ村における戦闘はトリステイン軍の大勝利で終わつた。

そんな中、戦闘の終結を見届けた才人たちのゼロ戦も少しほなれた臨時飛行場に次々と着陸した。才人は初めて魔法を成功させ、気絶してぐつたりしているルイズをコックピットからやさしく抱き上げて、ゼロ戦から降ろした。

地面に降りた時、ようやく彼女は目を覚ました。

「・・・才人？」

「ルイズ、目を覚ましたんだな。」

「戦いは、戦いはどうなつたの？」

虚ろな目で才人を見るルイズ。虚無の魔法は彼女にかなりの体力を消耗させたようだ。そんな彼女に、才人は微笑みながら言う。

「勝ったよ。トリステインの勝利さ。アルビオンの艦隊は全滅したよ。お前のおかげだ。お前の使える魔法は虚無だつたんだな。これでゼロの名を返上できるな。」

「そう……」

「疲れただろ、今はゆっくり休め。」

才人にそう言われたせいか、彼女は再び目を閉じ眠りについた。

才人はそんな彼女を抱きかかえたまま、皆の元へと歩いていった。

この数時間後、ようやくアンリエッタ王女率いるトリステイン軍主力がタルブ村に到着し、正式にアルビオン軍は武装解除された。そして、着陸した巡洋艦「イーグル」号から降りたウェールズ皇太子と、アンリエッタ王女は互いに無事を確認しあい、深く抱き合つた。

この戦いで、レコン・キスタ軍は空軍戦力の殆どを失い、再建にはまる1年をようする大損害を受けた。彼らはしばらくの間、聖地の奪回どころかトリステインへの最侵攻さえ不可能となってしまった。

戦闘に大敗北し、なおかつウェールズ皇太子が生きているという情報は、アルビオン国内に大きな波紋となつて広がり、レコン・キスタに対する権力を著しく落とし、なおかつアルビオン内での王制復古運動を盛り上げる要因ともなつた。

一方、この戦いでの勝利はトリステインやゲルマニアへも大きな影響を与える事となつた。

トリステイン国内では、アルビオンへの一方的勝利を手にしたアンリエッタ王女（公式発表ではそのように国内に知らされた）への人気や忠誠度を大いに盛り上げる事となつた。

また、それによつて発言力を高めたトリステイン王室は、ゲルマニアへのアンリエッタ王女の婚約を破棄することが可能となり、間もなくそれは実行される事となつた。アンリエッタは、望まぬ結婚を回避する事に成功した。

そして、アンリエッタが直接指揮下におく、3匹の鉄の竜を要する義勇軍の噂が、ハルケギニア中に広がる事となつた。

戦闘終結（後書き）

御意見・御感想・要請などお待ちしております。

エピローグ

タルブ村の攻防戦から1週間後、トリステイン王国首都のトリステイン王女アンリエッタは街全体が朝からお祝いムードに包まれていた。平民、貴族問わず市民たちは通りに繰り出している。

戦いの戦後処理が一段落した今日、現地へ自ら赴き陣頭指揮を執っていたアンリエッタ王女が、正式に亡命政権の立ち上げを宣言するアルビオン王国のウェーレルズ皇太子と共に凱旋するのだ。市民たちはその車列を一目見ようと、朝早くから通りに出でていたのだ。

いよいよ2人を乗せた馬車の車列が大通りを通り過ぎる時になると、市民たちはこぞって馬車に向かって叫んだ。

「トリステイン王国万歳！！アンリエッタ王女万歳！！アルビオン王国万歳！！ウェーレルズ殿下万歳！！」

そして、その車列が街を抜け、城の門に差し掛かる。門の周りも詰め掛けた群衆で埋まっていた。その上を爆音を響かせ、紙吹雪を撒きながら、才人たちの操るゼロ戦が、綺麗なV字型の3機編隊で通過する。

今やハルケギニア中の伝説となつている鉄の竜の姿に、市民たちは酔いしれた。

アンリエッタの凱旋に華を添えるように、風防を開け才人らは紙吹雪を巻き、市民たちの熱狂をより盛り上げた。

アンリエッタ王女らの馬車列が城に入ったのを見届けると、3機

はそのまま城内の庭に着陸した。城内の衛士たちはそれを苦々しく見ていたが、王室から直接指示されたことなので黙認する。

今回3人が直接城に迎えられた理由は、もちろん王室自ら彼らに對して戦いの労を労う意味もあったが、ただお褒めの言葉を下賜するためだけではなかつた。

アンリエッタの強い希望により、この度の戦いから平民出身者に對しても貴族の証しであるシユバリエの称号が送られることとなつたのだ。

今回その称号が送られるのは、残敵掃討戦で敵司令官を捕縛した銃士隊隊長のアーネス。そして3匹の鉄の竜を操った才人ら3人だ。また、今回アルビオン艦隊に大打撃を与えた新兵器であるロケット弾を開発したコルベールとオ吉、さらに虚無の魔法を発動させ戦いを終結へと導いたルイズらには、情報秘匿の觀点から公式には何も与えられなかつたが、後日秘密裏に恩賞が与えられる事となつた。

平民に対する貴族称号の付与は、内外から激しく非難されたが、ウェールズ皇太子の応援もあり、アンリエッタは渋る重臣らを説き伏せて認めさせた。

このニュースは、国民の9割を占める平民たちに大きな希望を与える事となり、後々トリスティンの歴史に大きな影響を及ぼす事となる。

そしてこの勲功授与の翌日には、アンリエッタ王女が王位に付く事が決定し、トリスティンは再び熱狂の渦に包まれる事となる。

しかし、これで全てがハッピーエンドで終わつたわけではない。

亡命政権を立ち上げたウェールズ皇太子にとつてはこれからが正念場であつた。レコン・キスタから国を取り戻す戦いは始まつたばかりである。

また、アンリエッタ女王にしてもその戦いを正式に支援するトリステインの舵取りをしつかりしなければいけない。2人の前途は多難だつた。

一方、戦いを終え、シユバリエの称号を頂いた才人は、凱旋する形でトリステイン魔法学院に帰還した。

オスマン校長にコルベールと言つた学院教師たち、食堂のマルトー料理長を中心とする平民の職員たち、そしてギーシュラ学院の生徒たちが帰還した彼らを出迎えた。そして夕食はお祝いのパーティーとなつた。

その席上彼の貴族入りを受け入れる者、皮肉する者、卑下する者。皆それぞれ様々な対応をした。しかし、才人からしてみればどうでも良かつた。彼にとつて平民とか貴族とかで人を分けるなどバカらしかつたからだ。

パーティーも終わつたその日の夜、才人は一人静かに中庭でワインを飲んでいた。才助ら大人連中はオスマンやコルベールらと祝宴を楽しんでいるはずである。そんな中、彼は一人空に浮かぶ2つの月を見つめていた。

「何やつてるの？」

そんな彼に、声を掛ける人物がいた。ルイズである。才人は彼女の方を一瞥するとぞんざいに答えた。

「別に。ただ月を見ながらワインを飲んでいただけ。」

「そう。」

才人の無遠慮な言葉に別に怒るわけでもなく、ただそういうとルイズは才人の隣に座つた。

「お前も飲む？グラスはもう一つ貰つてきてるから。」

ルイズがいつもと違うような気がすると思いながら、才人は彼女にワインを勧めた。

「いただくわ。」

才人はグラスにワインを注ぎ、彼女に渡した。

「ありがとう。」

2人は並んで月を愛でながら、ワインを飲む。

「それにしても、才人がシユバリエの称号を貰つちゃうなんて夢にも思わなかつたわ。」

「なんだよ、俺に対する愚痴を言いに来たのか？」

「まさか、祝いに来たのよ。まあ悔しい気もしないことはないけど、おめでとう才人。もうこれで犬なんて呼べないわね。」

その言葉に才人は笑つた。

「俺は別世界の人間だぜ。確かに姫様直々に貴族の称号を貰つて嬉しい事は無いけど、あんまり関係ないよ。遠慮なんかする必要はないぜ、まあさすがに大呼ばわりは勘弁してほしいけど、俺は今までどおり、これからもルイズの使い魔だぜ。」

その言葉に、ルイズはワインで少し赤くなつていた頬をさらに赤らめた。

「そう・・・ありがとう。」

「ああ。だつたら、乾杯しようぜ。2人のこれからを祈つて。」

才人は空になつた自分のグラスと、ルイズのグラスにワインを注ぎなおした。2人はグラスを持つ手を近づけた。

「ルイズ、これからもよろしくな。」

「才人こそ。これからもしつかり守つてよね。」

「ああ。」

「じゃあ。」

「「乾杯」」

2人はクラスを併せ、乾杯しワインを飲んだ。その瞬間、何ともいえない満足感が、2人の心に湧きあがつていた。

ハルケギニア特有の2つの月は、そんな2人の前途を光照らすよ

うに、輝いていた。

Hプローグ（後書き）

ついに完結です。お付き合ってありがとうございました。「心」の後第2弾にも続く予定なので、連載開始後はまたよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7385d/>

ゼロ戦才人 第1部

2010年11月21日11時23分発行